

養父郡八鹿町所在

西山B・C古墳群

－ふるさと農道緊急整備事業に伴う発掘調査報告書－

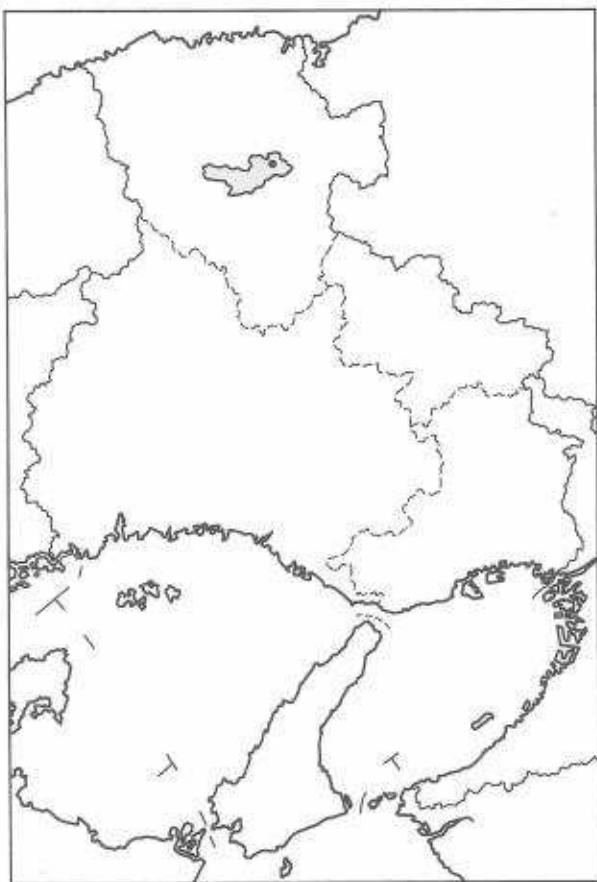
2002年3月

兵庫県教育委員会

養父郡八鹿町所在

にし やま こ ふん ぐん
西山B・C古墳群

-ふるさと農道緊急整備事業に伴う発掘調査報告書-



2002年3月

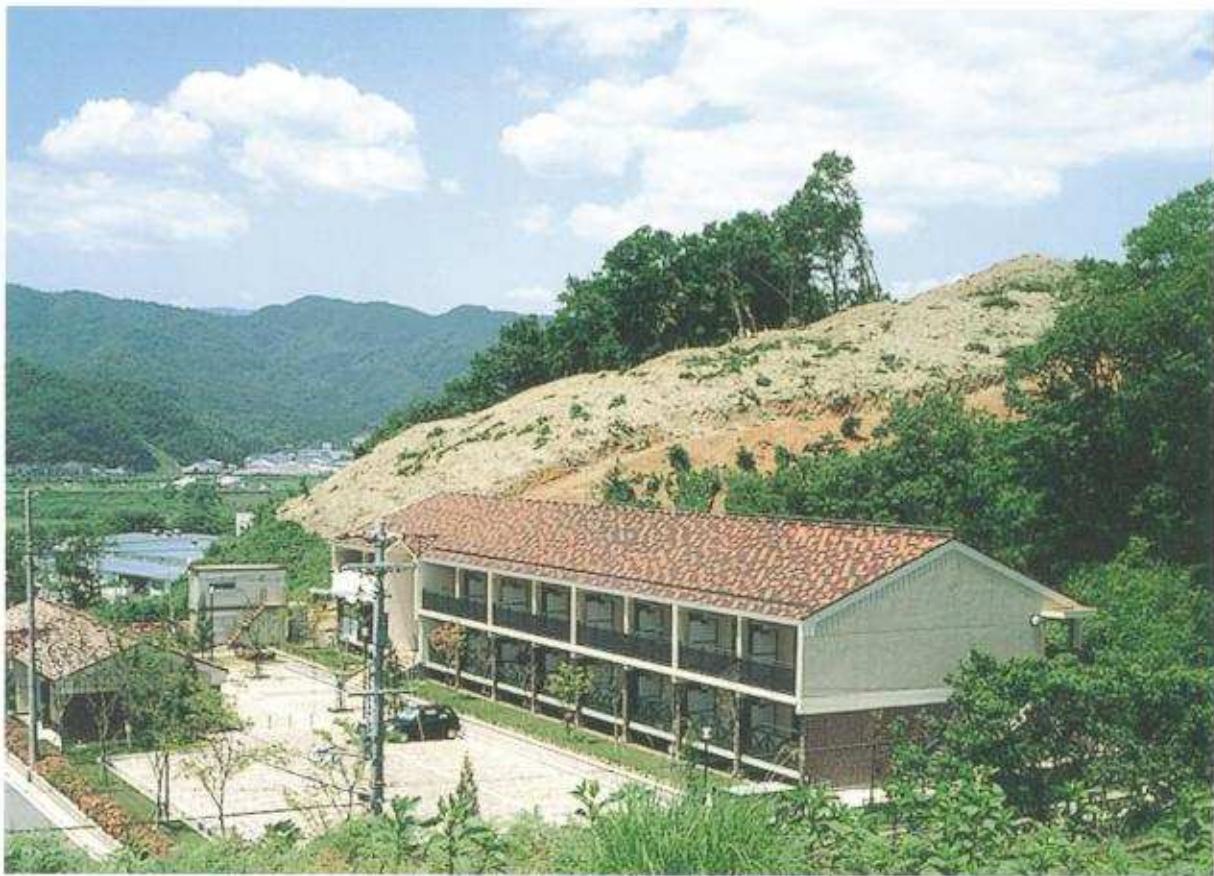
兵庫県教育委員会



西山B・C古墳群遠景（北から）



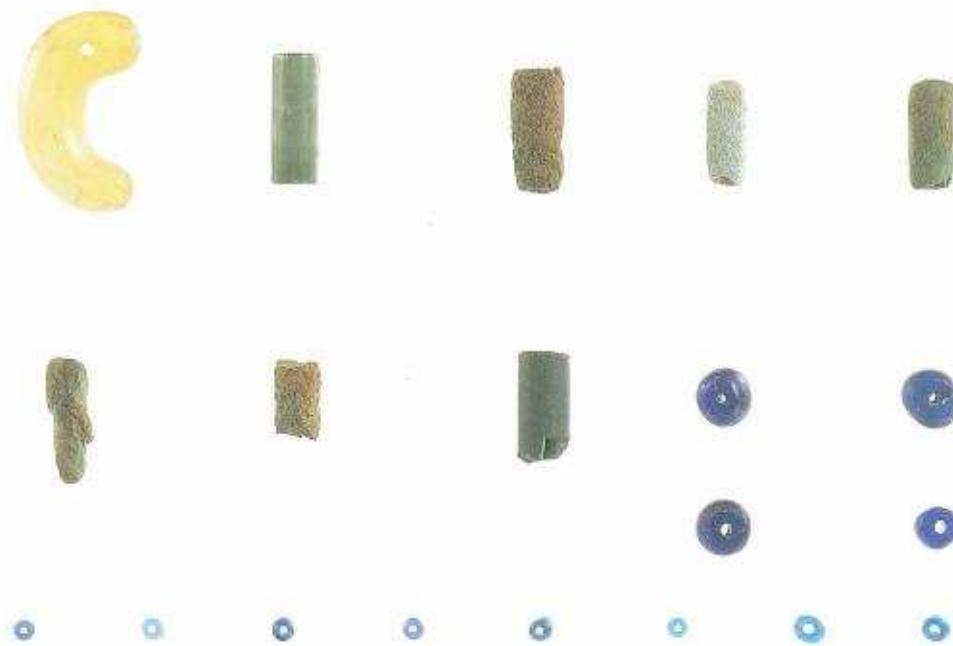
西山B・C古墳群遠景（西から）



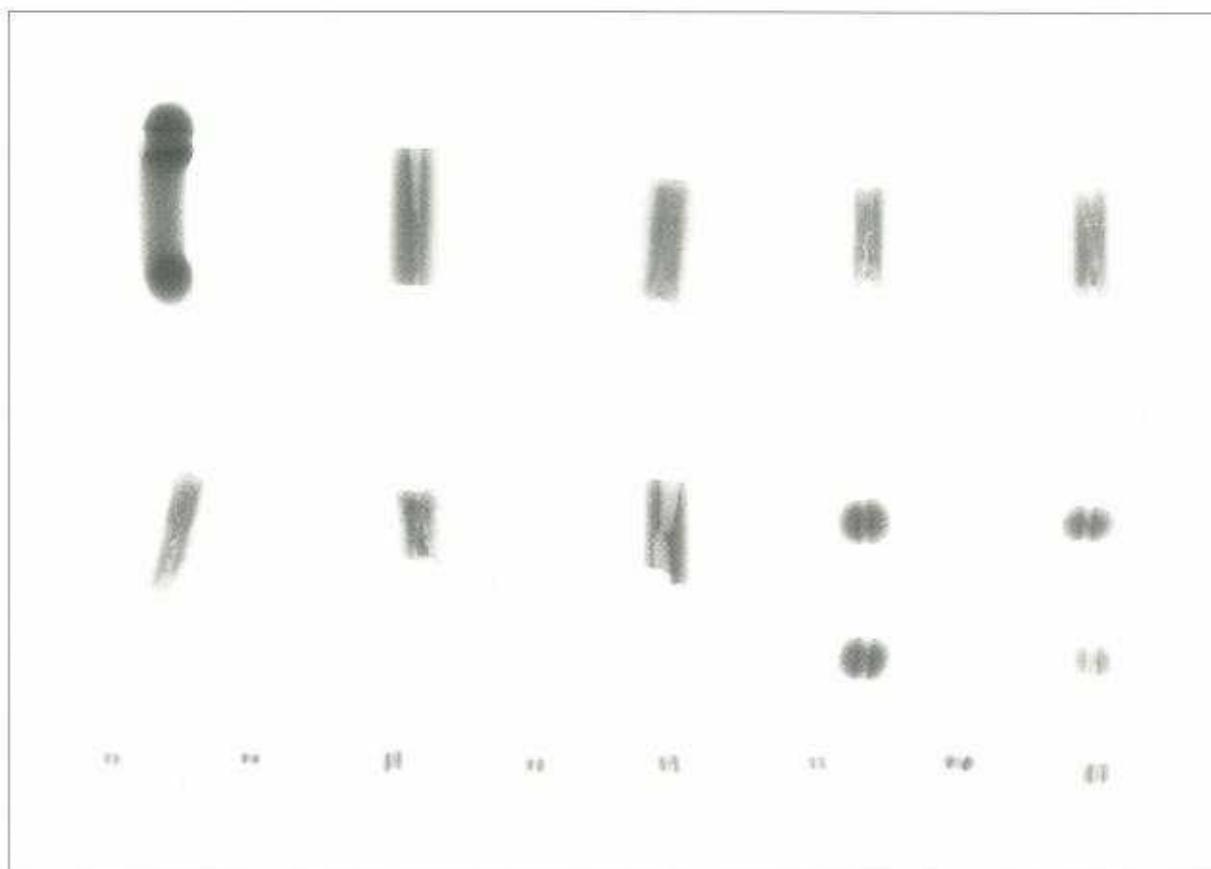
西山B古墳群全景（調査前、東から）



西山B古墳群全景（調査後、上空から）



勾玉・管玉・ガラス小玉（西山B2・11号墳出土）



勾玉・管玉・ガラス小玉（X線透過写真）

例　　言

1. 本書は、養父郡八鹿町浅間に所在する『西山B・C古墳群』の発掘調査報告書である。
2. 調査時点では事業名称等に「くぬぎばな古墳群」を冠していたが、整理作業をすすめる過程でこれらの古墳が西山B古墳群に含まれると判明した。本書では整理後の遺跡名称に基づき作成したことから、過去の調査成果と名称・内容が異なる場合は、本書の記載内容をもって正とされたい。
3. 発掘調査ならびに整理作業は、兵庫県和田山土地改良事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会が実施した。
4. 確認調査は平成11年度、本発掘調査は平成12年度に実施した。本発掘調査では、株安井工務店に発掘調査作業を、株ワールドに空中写真測量をそれぞれ委託した。
5. 現場での遺構実測・写真撮影は、各調査員が分担して行った。
6. 整理作業は平成12年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。遺物写真は株イーストマン・タニグチ・フォトに撮影を委託した。
7. 本書で掲載した図版のうち、遺跡分布図については『兵庫県遺跡地図』兵庫県教育委員会（2000）掲載の遺跡範囲と知見に基づいている。また個別遺構図については、空中写真撮影による成果ならびに現地で調査担当者が実測した図面をもとに作成した。
8. 発掘調査ならびに整理作業に際しては、八鹿町教育委員会 谷本 進氏のご指導・ご助言を受けた。記して感謝いたします。
9. 本書の執筆は調査担当者で分担した。編集は、松本嘉子の補助を得て柏原が担当した。
10. 本報告に係る出土遺物ならびに記録写真、関係書類は兵庫県埋蔵文化財調査事務所、および兵庫県教育委員会魚住分館において保管している。

本文目次

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	(1)
第2節 調査の経過	(1)
第3節 整理作業の経過	(3)
第4節 古墳名称の整理	(4)

第2章 位置と環境

第1節 遺跡の位置	(7)
第2節 周辺の遺跡	(7)

第3章 調査成果－西山C古墳群

第1節 概況	(11)
第2節 2号墳	(11)

第4章 調査成果－西山B古墳群

第1節 概況	(12)
第2節 1号墳	(12)
第3節 2号墳	(13)
第4節 3号墳	(14)
第5節 4号墳	(14)
第6節 5号墳	(16)
第7節 6号墳	(17)
第8節 7号墳	(18)
第9節 8号墳	(19)
第10節 9号墳	(19)
第11節 10号墳	(20)
第12節 11号墳	(21)

第5章 出土遺物

第1節 土器	(22)
第2節 金属器	(27)
第3節 玉類	(27)

第6章 まとめ

(33)

挿 図

第1図 確認調査の状況	(1)
第2図 確認調査トレンチ配置図	(2)
第3図 見学状況	(3)
第4図 整理作業の状況	(3)
第5図 周辺の古墳分布状況	(5)
第6図 周辺の遺跡	(8)
第7図 西山B 4号墳 石室内礫床	(15)
第8図 出土遺物実測図(1) 土器	(23)
第9図 西山B 6号墳出土土器内面	(24)
第10図 出土遺物実測図(2) 金属器	(27)
第11図 出土遺物実測図(3) 玉類①	(29)
第12図 出土遺物実測図(4) 玉類②	(30)
第13図 出土遺物実測図(5) 玉類③	(31)
第14図 出土遺物実測図(6) 玉類④	(32)

表

表1 西山B古墳群 名称対照表	(6)
表2 周辺の遺跡 地名表	(9)
表3 出土玉類法量表(1)	(28)
表4 出土玉類法量表(2)	(32)
表5 出土金属器法量表	(32)

巻頭図版

- 巻頭図版1 上：西山B・C古墳群遠景（北から）
下：西山B・C古墳群遠景（西から）
- 巻頭図版2 上：西山B古墳群全景（調査前、東から）
下：西山B古墳群全景（調査後、上空から）
- 巻頭図版3 上：勾玉・管玉・ガラス小玉（西山B 2・11号墳出土）
下：勾玉・管玉・ガラス小玉（X線透過写真）

図 版

- 図版1：調査前地形図 西山C 2号墳
- 図版2：調査区平面図・周溝堆積状況図 西山C 2号墳
- 図版3：調査前地形図 西山B古墳群（1～3号墳付近）
- 図版4：調査前地形図 西山B古墳群（4～11号墳付近）

- 図版5：調査区平面図 西山B古墳群
図版6：墳丘測量図・周溝堆積状況図 西山B1号墳
図版7：墳丘測量図・周溝堆積状況図 西山B2号墳
図版8：墳丘測量図・主体部平・断面図 西山B3号墳
図版9：主体部平・断面図 西山B1号墳・2号墳
図版10：墳丘測量図 西山B4号墳
図版11：主体部平・立面図 西山B4号墳
図版12：地形測量図・周溝堆積状況図 西山B5号墳
図版13：墳丘測量図・周溝堆積状況図 西山B6号墳
図版14：墳丘測量図・周溝堆積状況図 西山B7号墳
図版15：墳丘測量図・周溝堆積状況図 西山B8号墳
図版16：墳丘測量図・周溝堆積状況図 西山B9号墳
図版17：墳丘測量図 西山B10号墳
図版18：墳丘測量図・周溝堆積状況図 西山B11号墳
図版19：主体部平・断面図 西山B6号墳・7号墳
図版20：主体部平・断面図 西山B10号墳・8号墳
図版21：主体部平・断面図 西山B11号墳・9号墳

写真図版

写真図版1：古墳群全景

- 上：西山C古墳群 2号墳（上空から）
中：西山B古墳群 1～3号墳（東から）
下：西山B古墳群 4～11号墳（北から）

写真図版2：西山C2号墳

- 上：調査前全景（南から）
中：人力掘削作業（南から）
下：墳丘全景（南から）

写真図版3：西山C2号墳

- 上：墳丘全景（南東から）
中：墳丘・周溝（北から）
下：周溝（西から）

写真図版4：西山B古墳群

- 上：調査前遠景 西山B古墳群（西から）
中：調査前全景 B1号墳（西から）
下：調査前全景 B2号墳（東から）

写真図版5：西山B1号墳

- 上：古墳全景（東から）
中：主体部（北東から）
下：周溝（北東から）

写真図版6：西山B2号墳

- 上：古墳全景（東から）
中：主体部（西から）
下：主体部内 勾玉出土状況（東から）

写真図版7：西山B2・3号墳

- 上：周溝堆積状況 B2号墳（北から）
中：古墳全景 B3号墳（東から）
下：主体部 B3号墳（北東から）

写真図版8：西山B古墳群

- 上：調査前遠景（南から）
中：調査前全景（東から）
下：調査前全景（北から）

写真図版9：西山B古墳群

- 上：調査前全景 B 6号墳（南から）
- 中：調査前全景 B 7号墳（南から）
- 下：人力掘削作業（北から）

写真図版11：西山B 4号墳

- 上：古墳全景（西から）
- 中：主体部（南から）
- 下：墳丘内列石（南東から）

写真図版13：西山B 5号墳

- 上：古墳全景（北から）
- 中：周溝 土器出土状況（西から）
- 下：出土土器アップ（西から）

写真図版15：西山B 6号墳群

- 上：主体部（南東から）
- 中：土器検出作業（北西から）
- 下：主体部 土器出土状況（西から）

写真図版17：西山B 8号墳

- 上：古墳全景（北から）
- 中：主体部（東から）
- 下：墳丘検出作業（北から）

写真図版19：西山B 10号墳

- 上：古墳全景（北から）
- 中：墳丘検出状況（東から）
- 下：主体部（西から）

写真図版21：西山B 11号墳

- 上：古墳全景（西から）
- 中：周溝（東から）
- 下：主体部（東から）

写真図版10：西山B古墳群

- 上：調査後全景 B 5～11号墳（北から）
- 下：調査後全景（B 1号墳から南を望む）

写真図版12：西山B 4号墳

- 上：主体部礫床（南東から）
- 中：主体部排水溝（南から）
- 下：主体部検出作業（南から）

写真図版14：西山B 6号墳

- 上：古墳全景（北から）
- 中：主体部（南東から）
- 下：墳丘検出作業（南から）

写真図版16：西山B 7号墳

- 上：古墳全景（北西から）
- 中：主体部（北から）
- 下：主体部アップ（西から）

写真図版18：西山B 9号墳

- 上：古墳全景（北から）
- 中：主体部（西から）
- 下：周溝堆積状況（西から）

写真図版20：西山B 10号墳・包含層

- 上：主体部 金属器出土状況（西から）
- 中：墓壙 土器出土状況（南から）
- 下：包含層 土器出土状況（南から）

写真図版22：出土遺物（1）

写真図版23：出土遺物（2）

写真図版24：出土遺物（3）

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経過

西山B・C古墳群は養父郡八鹿町の北東部、同町浅間・伊佐から城崎郡日高町との境にかけて連なる円山川右岸の丘陵上に分布する。周辺一帯では、このたび農道整備事業の一環として「あるさと農道緊急整備事業」の事業計画が立案された。

八鹿町宿南から日高町浅倉にかけては、急峻な崖の間を縫って円山川が流れ、川の左岸を這うように国道312号線が走る。この箇所は、災害のたびに崖面崩落が起こり通行不能になる一方で、道路を拡幅できる余裕がなく交通量増加への対応が難しい、慢性的な問題を抱えている。加えて、浅倉の対岸にあたる日高町赤崎は、周囲を川と山に遮断された小規模な平野に立地し、交通路が円山川にかかる橋梁だけという状態にある。

当事業で建設される農道は、八鹿町伊佐から円山川右岸沿いに日高町赤崎を経由して円山川を渡り、国道312号線に合流させるルートで計画され、将来には国道312号線のバイパスとして、浅倉付近の混雑緩和・周辺集落の交通路確保といった役割が期待されている。

八鹿・日高町境付近は、進美寺山から連なる丘陵が川岸まで張り出しているため、トンネルの開削によって道路を確保する計画となっている。坑口部分に取り付くまでの丘陵には、西山A・B・C古墳群・くぬぎばな古墳群など多くの古墳が、また平野部では伊佐遺跡などが、周知の埋蔵文化財包蔵地として存在する。

事業予定地内に存在する埋蔵文化財については、事業の計画段階から兵庫県和田山土地改良事務所と兵庫県教育委員会で協議を重ね、対応を進めてきた。まず事業予定地の確定に伴って、これまで周知してきた埋蔵文化財包蔵地との位置関係を確認し、新規の包蔵地が存在する可能性を判断する目的で、分布調査をおこなった。事業の具体化に向けて条件が整った箇所から、調査員が現地に立ち入って遺物や遺構の存否を確認した。この結果に基づいて埋蔵文化財の存在が想定される箇所を絞り込み、具体的な取扱いを協議した。

第2節 調査の経過

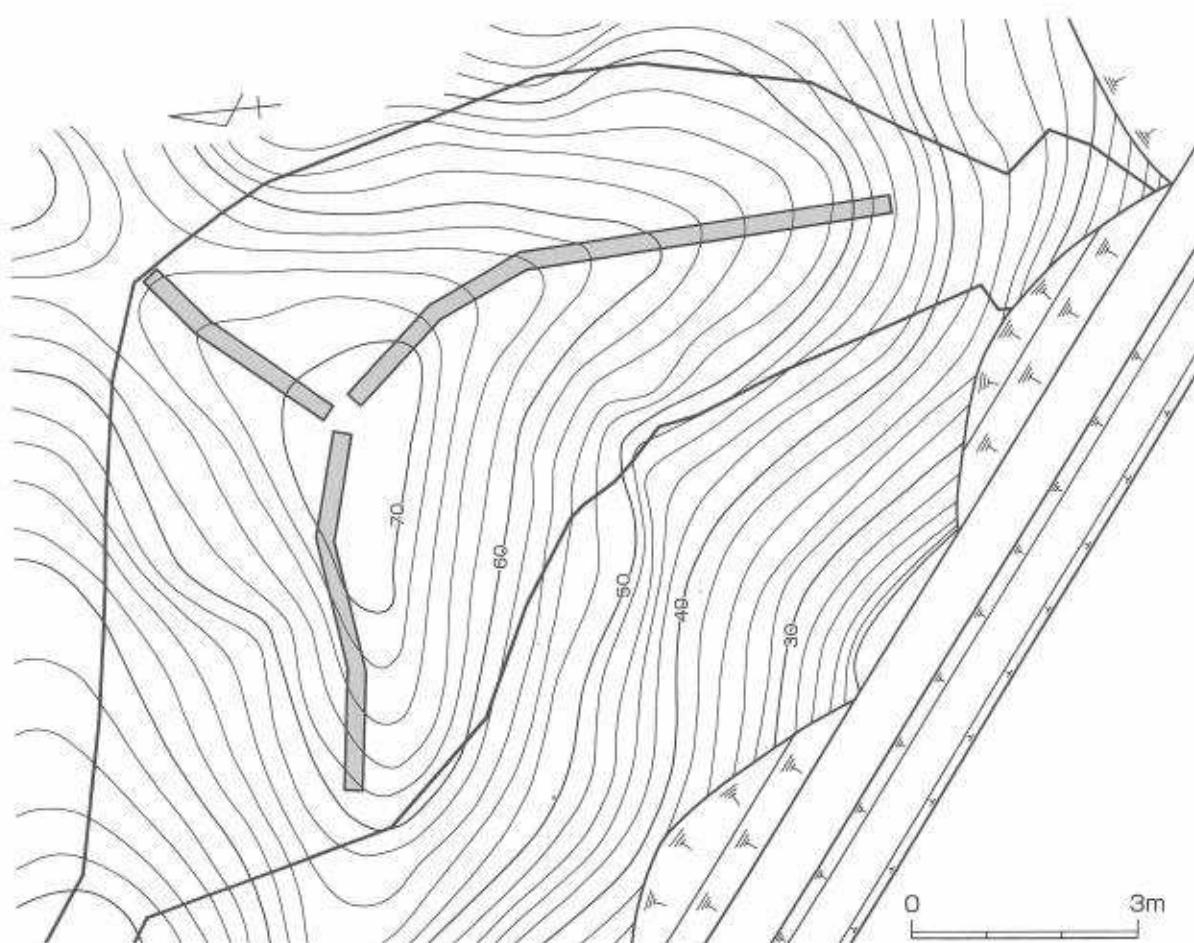
1. 確認調査（調査番号：990273）

養父郡八鹿町浅間に所在する事業範囲内は、周知の文化財包蔵地である「くぬぎばな古墳群」ならびに「西山B古墳群」の範囲にあたることから、兵庫県和田山土地改良事務所長より埋蔵文化財確認調査の依頼（平成11年11月24日付 和土改第1064号）があった。これに基づき、平成8年3月18日確認調査を実施した。

調査にあたっては、古墳の存在が想定されている尾根の中央に3本のトレンチを配して、掘削を実施した。



第1図 確認調査の状況



第2図 確認調査トレンチ配置図

トレンチは総延長160m・幅1mで、すべて人力により掘削を行った。掘削後は人力による断面整形を実施して、遺構・遺物の確認につとめた。

調査の結果、尾根の高所を中心に南および西へのびる尾根筋から、直列して立地する古墳群の存在が確認された。遺物の出土はなかったものの、墳丘ならびに周溝と考えられる堀状の溝を検出した。埋葬主体については、石材等の散乱が認められないため木棺直葬墳の可能性が高いと考えられたが、今後の経過を勘案して具体的な考究は控えた。

《発掘調査体制》 所長 寺内幸治

(調整事務・発掘調査担当) 企画調整班

調査専門員 山本三郎 主任 山本 誠

2. 本発掘調査（調査番号：2000283）

古墳の存在が確認された範囲について、埋蔵文化財調査事務所と和田山土地改良事務所の間で取扱いに関する協議が持たれた。該当する箇所は丘陵の先端で、低地からの比高差もあるため、ルート変更や工法変更による現状保存は困難との結論を確認した。続いて記録保存に向けた発掘調査の依頼が、和田山土地改良事務所長より（平成12年3月16日付 和土改1452号）提出された。埋蔵文化財調査事務所では、これに基づいて平成12年度に本発掘調査を実施した。

調査対象範囲は、狭隘な谷を挟む2つの丘陵上に立地する。谷よりも東側は、日高町との境界をなす丘陵の鞍部で409m²を調査対象とした。谷の西側は、南から北西方向へ弓上に連なる丘陵で調査面積は



第3図 見学状況

3,071m²である。いずれも周知の埋蔵文化財包蔵地で、谷より東が「西山C古墳群」、西が「西山B古墳群」の範囲にそれぞれ含まれている。

地表面から古墳までの堆積が薄いため、すべて人力で掘削した。具体的な作業として、まず埋蔵文化財の包蔵に留意しつつ、遺存する墳丘ならびに古墳築造時の地面（基盤層）まで土を排除した。掘削後は墳丘および周溝・埋葬主体を検出し、遺物の出土状況に注意を払いながら遺構を掘り下げた。また適宜、写真撮影・遺構実測を実施して、埋蔵文化財の記録に努めている。

調査の過程で多くの古墳が新たに発見され、最終的には、西山C古墳群で1基、西山B古墳群11基を調査した。

調査区内の地形測量・全体図作成にあたっては、空中写真測量を実施、撮影ならびに図化作業を株式会社ワールドに委託した。6月28日に西山C古墳群、10月18日に西山B古墳群の撮影図化を行った。

調査中あたっては、八鹿町教育委員会から協力をうけたほか、8月22日には古墳を校区内にもつ八鹿町立伊佐小学校6年生の児童15名が、現地の調査状況や出土遺物を見学した。

《発掘調査体制》所長 寺内幸治

(調整事務担当) 企画調整班	調査専門員	山本三郎	主査	高瀬一嘉
(発掘調査担当) 調査第3班	調査専門員	小川良太	主任	柏原正民
臨時の任用職員		田中秀明・宮田耕平	研修員	田中弘樹

第3節 整理作業の経過

出土遺物のうち、金属器と脆弱な状態の土器をのぞいた遺物は、発掘調査と平行して洗浄を行った。また調査時に作成した実測図や写真記録等も、調査中に適宜整理を行った。

調査成果の取りまとめに伴う本格的な整理作業は、平成13年度に埋蔵文化財調査事務所において実施した。作業内容は、遺物の注記・接合補強・実測、脆弱遺物の保存処理、遺構図・遺物実測図などの整図、出土品の写真撮影などである。また平行して報告書の執筆・編集をおこない、調査成果を公にすることができた。

なお調査した古墳は当初、西山C古墳群、西山B古墳群、くぬぎばな古墳群にまたがると考えてきたが、その後の知見を整理した結果、西山C古墳群と西山B古墳群の範囲に該当することが明らかとなった。報告書作成にあたり、古墳名の整理・改訂をおこなつたが、従前遺跡地図や調査時点で付した名称との整合については、次節で触れる。

《整理作業体制》所長 大村敬通

(調整事務担当) 整理普及班
主任調査専門員 池田正男
主任 深江英憲



第4図 整理作業の状況

(整理作業担当) 調査第2班

主任 柏原正民

嘱託員 松本嘉子・香川フジ子・西口由紀・木村淑子・藏 幾子・鈴木まき子・中西睦子・
宮野正子・大仁克子・早川有紀

第4節 古墳名称の整理

八鹿町浅間は周辺で最も顕著な古墳の密集が見られる地域の一つであり、西山A・B・C古墳群、くぬぎばな古墳群など、100基を越える古墳が存在する。

今回の調査成果をとりまとめるにあたって、これまでに古墳群の把握にいくつかの混乱があることがわかった。以下、八鹿町教育委員会の協力をうけて、遺跡名の整合を試みる。

浅間周辺に古墳が存在することは、古くから知られていたようだが、埋蔵文化財包蔵地として広く認知されたのは、昭和49年発刊の『埋蔵文化財分布調査』(八鹿町文化財調査報告書 第1集)を初めとする。昭和45・48年度に実施された八鹿町域の分布調査成果に基づいて、浅間字西山に「くぬぎばな・西山A・西山B・西山C」の古墳群が存在すると記されている。

その後、開発行為の進行とともに、埋蔵文化財保護の体制が整備された。開発行為に関する埋蔵文化財の調整と保護、普及啓発などの取り組みがなされる過程で、多数のデータが収集されることになった。これらの成果は、平成8年に『八鹿町の埋蔵文化財包蔵地』(八鹿町文化財調査報告書 第12集)にとして刊行され、その後『兵庫県遺跡地図』兵庫県教育委員会(2000)にも引き継がれている。

前後して浅間では、西山A古墳群の発掘調査が実施された。あわせて周辺に存在する古墳の詳細な分布調査が実施され、新たな古墳・古墳状隆起の存在が明らかとなったほか、くぬぎばな古墳群・西山B古墳群の位置について地形からの棲別を行なう必要性が判明するなど、新たな知見が得られた。

今回報告する発掘調査範囲は、谷をはさんで西側が西山C古墳群、東側が西山B古墳群とくぬぎばな古墳群にわたると考えていたが、以上の知見を整理した結果、谷より東側はすべて西山B古墳群の範囲に含まれることが明らかとなった。また発掘調査では古墳の認識した順に仮番号を配したが、本報告書を作成するにあたって、西山古墳群周辺を取り巻く新たな知見を重視した番号配列に改めた。

このため、過去の報告文とは古墳の名称が異なっている。古墳によっては複雑な名称変更を生じたものもあり、さらなる混乱も危惧されたが、本書では最新の知見をもって、古墳名称を変更した。なおこれまでに使用された遺跡名称との整合は、表1に一括している。

様々な知見の蓄積によって、埋蔵文化財の包蔵地に関するデータは日々更新されている。「遺跡は生きている」とたとえられる所以であろう。

特に古墳については、完全に埋没して視認できない状態のものがある一方で、明瞭な隆起を持ちながら、結果として古墳ではないものもあり、常の変動を宿命づけられている。

これらの整理・公開は、当該市町村の文化財担当部局が担当しており、職員の不断の努力によって新しいデータの更新がなされている。今回の整合についても、埋蔵文化財保護の直接な窓口である八鹿町教育委員会に多大なご協力を得た。深く敬意を表したい。



第5図 周辺の古墳分布状況

表1 西山B古墳群 名称対照表

NO	従来の遺跡名称					整理後の遺跡名称		備考
	遺跡名(1995準拠)	町1974	町1995	県2000	発掘調査	古墳群	古墳名	
1	西山B 3号墳	236	476	680476	1	西山B古墳群	1号墳	
2	西山B 4号墳	237	477	680477	2	西山B古墳群	2号墳	
3	(名称、未確定)	—	—	—	3	西山B古墳群	3号墳	※ 3
4	(名称、未確定)	—	—	—	H	西山B古墳群	4号墳	※ 3
5	(名称、未確定)	—	—	—	G	西山B古墳群	5号墳	※ 3
6	くぬぎばな1号墳	—	456	680456	F	西山B古墳群	6号墳	※ 2
7	くぬぎばな2号墳	—	457	680457	E	西山B古墳群	7号墳	※ 2
8	くぬぎばな3号墳1	—	458	680458	D	西山B古墳群	8号墳	※ 2
9	くぬぎばな3号墳2	—	459	680459	B	西山B古墳群	9号墳	
10	くぬぎばな3号墳3	—	460	680460	C	西山B古墳群	10号墳	
11	(名称、未確定)	—	—	—	A	西山B古墳群	11号墳	※ 3
12	西山B12号墳	245	485	680485		西山B古墳群	12号墳	
13	西山B13号墳	246	486	680486		西山B古墳群	13号墳	
14	西山B14号墳	247	487	680487		西山B古墳群	14号墳	
15	(名称、未確定)	—	—	—		西山B古墳群	15号墳	
16	西山B11号墳	244	484	680488		西山B古墳群	16号墳	
17	西山B10号墳	243	483	680489		西山B古墳群	17号墳	
18	西山B9号墳	242	482	—		西山B古墳群	18号墳	※ 4
19	西山B8号墳	241	481	—		西山B古墳群	19号墳	※ 4
20	西山B7号墳	240	480	—		西山B古墳群	20号墳	※ 4
21	西山B2号墳1	235	474	680474		西山B古墳群	21号墳	
22	(名称、未確定)	—	—	—		西山B古墳群	22号墳	※ 4
23	西山B2号墳2	—	475	680475		西山B古墳群	23号墳	
24	(名称、未確定)	—	—	—		西山B古墳群	24号墳	※ 4
25	西山B15号墳	248	488	680488		西山B古墳群	25号墳	
26	西山B1号墳	234	473	680473		西山B古墳群	26号墳	
—	西山B5号墳		478	680478		西山B古墳群	27号墳	
—	西山B6号墳		479	680479		西山B古墳群	28号墳	
—	西山B16号墳		489	680489		西山B古墳群	29号墳	

典拠 町1974:『埋蔵文化財分布調査』八鹿町教育委員会

町1995:『八鹿町の埋蔵文化財包蔵地』八鹿町教育委員会

県2000:『兵庫県遺跡地図』兵庫県教育委員会

発掘調査:発掘調査時に用いた仮称で、発掘調査実績報告ならびに県年報もこの古墳名を踏襲している。

「西山B古墳群他」『平成12年度 年報』兵庫県埋蔵文化財調査事務所(2001)

※1; Noは、第6回と一致。

※2; 1974に記載された同名の古墳とは別。

※3; 発掘調査で新たに検出。

※4;『浅間西山古墳群』八鹿町教育委員会(1997)、p.4参照。

第2章 位置と環境

第1節 遺跡の位置

八鹿町は兵庫県の北部、旧「但馬国」のほぼ中央に位置する。養父郡に属し、東は出石郡出石町、南は養父町・大屋町、南西から西は関宮町・美方郡村岡町、北は城崎郡日高町に接する。面積77.06km²、人口12,204人（平成11.4.1現在）である。

町域は中国山地の東縁にあたる但馬山地にあたり、町最高峰の標高1,142メートルの妙見山をはじめとする標高100～300mの山地が全体の7割を占める。東部には円山川が蛇行しながら北へ流れ、中心市街の東で氷ノ山を起点とする八木川と合流する。集落は山地・丘陵を開削して流れる河川沿いの沖積平野・河岸段丘に立地する。主要な交通路も川沿いに開け、JR山陰本線と国道312号線は円山川、国道9号線は八木川に沿って町内を通過する。京阪神と山陰を結ぶ交通の要衝である。

中心市街は円山川と八木川の合流点で、国道9号線（旧山陰街道）と312号（旧但馬街道）の分岐点にもあたる。陸水運の便も恵まれた物資の集積地として、明治～昭和初期にかけて養蚕業の卸売業を中心とする商業の町として栄えてきた。近年、商業の町としての側面は薄れたが、様々な活性化への試みがなされ、新たな町のイメージを構築しつつある。

遺跡は中心市街から北東へ5km、八鹿町伊佐と浅間の境界をなす丘陵に立地する。南1.5kmに伊佐、東0.8kmに浅間があり、2つの集落を結ぶ主要県道宮津八鹿線は、浅間トンネルを経て出石郡出石町へと通じている。伊佐は円山川の氾濫原による沖積平野上に立地する。一方浅間は、浅間川が谷田川層群の流紋岩・緑色凝灰岩類からなる山地を侵食して形成された谷地に位置し、集落は浅間川沿いに形成された扇状地上に立地する。

西山B・C古墳群は谷の開析部にあたる標高150m前後の丘陵上にある。須留岐山と進美寺山が連なる山地からはりだす丘陵地で、周囲は小規模な谷が切りこんで尾根状の起伏が多数形成される。

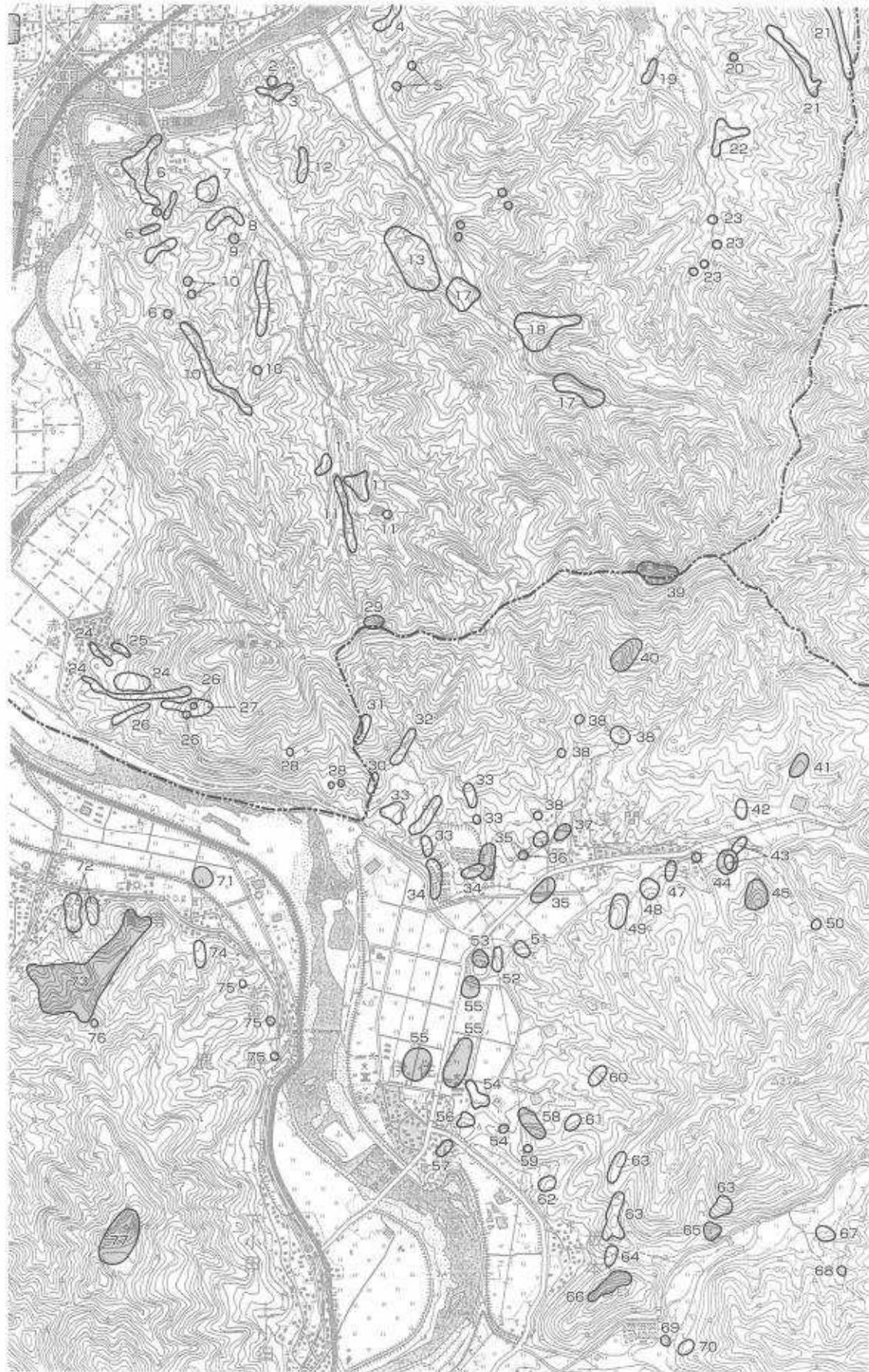
第2節 周辺の遺跡

伊佐から浅間にかけては、現在の集落と重なり合うように埋蔵文化財の包蔵地が点在するが、発掘調査等で実態が把握できているものは少ない。その中で、丘陵上や山麓に点在する古墳について、比較的まとまった知見が得られている。

円山川の右岸に沿って南へ7km南下した養父町大藪には、円山川中流域における代表的な古墳群である大藪古墳群がある。但馬最大の後期古墳群で、大型横穴式石室を持つ禁裡塚古墳や塚山古墳を中心に多数の横穴式石室を持つ古墳で構成される。また町境をはさんで接する八鹿町舞狂～大江にも、大藪古墳群から連なる多数の横穴式石室がある。

一方、八鹿町坂本から浅間にかけては、古墳数が少なく小規模な古墳群の散在する。舞強～下網場間の崖錐によって隔てられ、大藪古墳群からの影響が少なかった結果と考えられている。

この範囲の中で浅間は、古墳の密集が見られる地域である。西山C古墳群（31）・西山B古墳群（33）・くぬぎばな古墳群（34）など、円山川に面した尾根を階段状に造成して古墳を築いている。多くは木棺



第6図 周辺の遺跡

表2 周辺の遺跡 地名表

No.	遺跡名	所在地	No.	遺跡名	所在地
1	但馬国分寺跡	城崎郡日高町祢布	40	浅間寺旧跡	養父郡八鹿町浅間
2	来山城跡	城崎郡日高町鶴岡	41	浅間八坂土器散布地	養父郡八鹿町浅間八坂
3	来1~9号墳	城崎郡日高町鶴岡	42	八坂古墳群	養父郡八鹿町浅間八坂
4	宮ノ谷1~9号墳・西ノ谷1~3号墳	城崎郡日高町上郷	43	城坂古墳群	養父郡八鹿町浅間
5	大谷古墳群	城崎郡日高町鶴岡	44	浅間城館跡	養父郡八鹿町浅間
6	姫路山古墳群	城崎郡日高町日置	45	浅間城	養父郡八鹿町浅間四田谷
7	谷古墳群	城崎郡日高町日置	46	シンドウ塚古墳	養父郡八鹿町浅間上浅間
8	カナ谷古墳群、法尺谷古墳群	城崎郡日高町日置	47	一位谷古墳群	養父郡八鹿町浅間一位谷
9	茅谷窯跡	城崎郡日高町日置	48	アシ谷古墳群	養父郡八鹿町浅間
10	棚田古墳群	城崎郡日高町日置	49	浅間小城	養父郡八鹿町浅間ヤシ谷
11	中谷古墳群	城崎郡日高町日置	50	四田谷古墳	養父郡八鹿町浅間四田谷
12	岬古墳群	城崎郡日高町日置	51	田口古墳群	養父郡八鹿町浅間
13	丸山古墳群、菖蒲谷古墳群	城崎郡日高町鶴岡	52	丸山古墳群	養父郡八鹿町浅間丸山
14	森垣古墳群	城崎郡日高町鶴岡	53	丸山城	養父郡八鹿町浅間丸山
15	勘定山古墳	城崎郡日高町鶴岡	54	巡礼古墳群	養父郡八鹿町伊佐巡礼
16	楯縫古墳	城崎郡日高町鶴岡	55	伊佐遺跡	養父郡八鹿町伊佐
17	スルギ古墳群	城崎郡日高町鶴岡	56	弘法山古墳群	養父郡八鹿町伊佐弘法山
18	新林古墳群	城崎郡日高町鶴岡	57	舟山古墳群	養父郡八鹿町伊佐舟山
19	岩谷古墳群	城崎郡日高町上郷	58	割谷城	養父郡八鹿町伊佐割谷
20	奈良谷遺跡	城崎郡日高町上郷	59	淀古墳	養父郡八鹿町伊佐淀
21	溝仲谷古墳群	城崎郡日高町上郷	60	篠谷古墳群	養父郡八鹿町伊佐篠谷
22	山谷川古墳群	城崎郡日高町上郷	61	割谷古墳群	養父郡八鹿町伊佐割谷
23	朝間岳古墳群	城崎郡日高町上郷	62	倉谷古墳群	養父郡八鹿町坂本倉谷
24	左鎌古墳群、シゲリ谷古墳群	城崎郡日高町赤崎	63	勝負谷古墳群	養父郡八鹿町坂本勝負谷
25	マス谷1号墳	城崎郡日高町赤崎	64	城山古墳群	養父郡八鹿町坂本城山
26	赤崎ホーキ古墳群	城崎郡日高町赤崎	65	岩崎土器散布地	養父郡八鹿町岩崎中田
27	空山古墳群、シゲリ谷古墳群	城崎郡日高町赤崎	66	坂本城	養父郡八鹿町坂本城山
28	南ホウキ古墳群	城崎郡日高町赤崎	67	塚谷古墳群	養父郡八鹿町岩崎大山
29	進美寺(山)城跡	城崎郡日高町赤崎	68	深原古墳	養父郡八鹿町岩崎深原
30	大谷ノ上1~3号墳	城崎郡日高町赤崎	69	寺垣遺跡	養父郡八鹿町大江寺垣
31	西山C古墳群	養父郡八鹿町浅間西山	70	ハタガイ古墳群	養父郡八鹿町大江ハタガイ
32	西山A古墳群	養父郡八鹿町浅間西山	71	町土居ノ内遺跡	養父郡八鹿町宿南土居ノ内
33	西山B古墳群	養父郡八鹿町浅間西山	72	高月古墳群	養父郡八鹿町宿南高月
34	くぬぎばな古墳群	養父郡八鹿町浅間西山	73	宿南城	養父郡八鹿町宿南館ノ上
35	浅間土器散布地	養父郡八鹿町浅間小西谷	74	広ヶ谷古墳群	養父郡八鹿町宿南広ヶ谷
36	西屋敷土器散布地	養父郡八鹿町浅間西屋敷	75	寄宮古墳群	養父郡八鹿町宿南寄宮
37	神官田井遺跡	養父郡八鹿町浅間神官田井	76	うなば古墳	養父郡八鹿町宿南うなば
38	大谷古墳群	養父郡八鹿町浅間大谷	77	池之内遺跡	養父郡八鹿町宿南寄宮
39	須留喜山城	養父郡八鹿町浅間堂の奥			

や石棺を直葬する前・中期古墳とみられる。

後期古墳は大谷古墳群（38）・城坂古墳群（43）・シンドウ塚古墳（46）などのほか、発掘調査された西山A古墳群（32）が注目される。平成7・8年度、採石事業に伴って3基の古墳（1～3号墳）が調査され、横穴式石室を主体部にもつ古墳であることが判明した。2号墳では2重に巡らした外区列石が検出され、3号墳からは金銅製太刀が出土している。6世紀末から7世紀初頭に築造され、7世紀中葉までの追葬が出土遺物より考えられている。

続く奈良一平安時代の遺跡として、伊佐遺跡（55）がある。伊佐集落の北側にひろがり、小学校の建設工事に伴って奈良時代の須恵器広口壺や陶製の土馬が出土した。平安時代の「和名類聚抄」に但馬国十三郷の一つとしてみえる、「浅間郷」が当地を指すと考えられ、この遺跡も関連した官衙的性格が推定されている。また関連する文化財として、丘陵上にある浅間寺の本尊薬師如来が平安時代後期の作として知られる。

浅間寺は、六勝寺の1つである成勝寺の末寺として中世に勢力を拡大、周辺の信仰を集めめた。本尊の脇侍である日光菩薩と月光菩薩には元亀4（1573）年6月12日の銘文が残っている。

中世城館もいくつか点在するが、浅間小城（49）・浅間城（45）は天正8（1580）年の羽柴秀吉による第二次但馬攻略に関連して投降した佐々木氏の本拠地と考えられ、注目される。浅間小城は二段の曲輪に横堀や敵状豊堀を配する一方、浅間城は土塁で虎口をかためて、屈曲しながら曲輪に入る織田系城郭の要素がみられる。手法から前者は羽柴軍の進攻に対する防御、後者は羽柴氏への服属後に織田氏の影響による築城を施した動向がうかがえる。

近世初頭の伊佐周辺は、たびたび起こる円山川の大規模氾濫によって、やせた畠地と荒地が広がっていた。寛文9（1669）年よりたびたび新田開発が試みられ、延宝4（1676）年成功するにいたって、当初属していた宿南村から独立、伊佐村・浅間村となつた。嘉永5（1848）年に幕府領となるまでは出石藩領で、伊佐には出石街道から円山川を渡る際に使う出石藩公用の舟渡し守が置かれていた。

明治時代にはそれぞれ村制をしいたが、明治22（1889）年に浅間村が伊佐村に吸収合併され、昭和30年には八鹿町の大字となって現在にいたる。

出石街道の後身である県道宮津八鹿線は、現在も出石への主要交通路として多くの通行がある。伊佐は周辺の中核集落として、伊佐小学校・青渓中学校・農協・駐在所といった公共施設が集まる。一方浅間は田畠が広がる谷あいの閑静なたたずまいを残しているが、調査地周辺に新興住宅地の円山台や産業団地などの造成が計画され、新しい姿を現わしつつある。

◇参考文献

- 『八鹿町史』上・下巻 八鹿町（1977）
 - 『出石町史』第1巻 出石町（1984）
 - 『養父町史』第1巻 養父町（1990）
 - 『兵庫県大百科事典』神戸新聞社（1983）
 - 『角川地名大辞典 兵庫県』角川書店（1988）
 - 但馬考古学研究会編『徹底討論 大蔵古墳群』養父町教育委員会（1994）
 - 『浅間西山古墳群』八鹿町教育委員会（1997）
 - 『歴史講演 八鹿を探る』八鹿町教育委員会（1996）
 - 『八鹿町の歴史探訪』八鹿町教育委員会（2000）
- このほか、統計資料等については、八鹿町ホームページ（URLは <http://www.town.yoka.hyogo.jp/>）の記載内容を参照した。

第3章 調査成果－西山C古墳群

第1節 概況

事業予定地に直交する南北の尾根上に位置する。日高町との境界をなす丘陵には、西山C古墳群と総称される古墳が、現在のところ5基知られている。調査した古墳は西山C2号墳に該当する。他の古墳は、発掘調査が行なわれておらず、詳細はわからない。

C2号墳は事業予定地の北寄りに位置する。分布調査・確認調査において、周辺の地形を観察して未見の古墳に注意を払ったが、事業予定地内でC2号墳以外の古墳は確認できなかった。

第2節 2号墳（図版2／写真図版2・3）

尾根の傾斜角度が変化する部分に立地し、南側は急斜面が続く。古墳の東側では大きな土砂崩れの痕跡が、深く溝のように走っていた。崩れの範囲には墳丘の東斜面も含まれ、古墳の東から南側にかけて墳裾から墳頂部がえぐりとられる形で消失する。また調査前は山林に覆われ、樹木の一部が土坑状の搅乱として墳丘の一部を乱している。

古墳を構成する遺構として、墳丘と周溝を検出した。墳丘は土砂崩れの影響から全体の3/5程度を失うほか、主体部も検出することができなかった。

墳丘：丘陵の傾斜が変わる部分に立地する。東側は地形改変による影響で、構築当初の状況が完全に失われている。一方西側は明瞭な隆起を持たないが、墳裾部分はわずかに推定できる。本来は正円形に近い形状と考えられ、南北方向の全長が9.2mを測る。対する東西方向は、遺存する最大長が4.3mであった。墳丘の高さは、尾根の低所にあたる南側の墳裾中央から6.1mである。盛土は硬くしまった黄褐色細砂～シルト質細砂で、墳頂部の一部に遺存する。ほとんどの個所では、基盤層である黄褐色疊混じりシルトが露出することから、盛土の使用はわずかで、大半が丘陵を削りだすことによって構築したものであろう。

墳丘上および盛土内部において、遺物の出土はなかった。

周溝：墳丘の背後にあたる北側に、尾根を切る格好で設けられる。墳丘に沿って円弧を描くが、中央部分では墳丘ならびに対岸の斜面を大きく削りこみ、V字状のカットをなす。西端は傾斜に収束し、東側は土砂崩れによって消失する。検出できた全長8.5m、中央部分での幅4.9m、最大深度1.1mである。

埋土は4層で構成される。周溝の中央部分において、須恵器の杯蓋（1）が出土した。最下層の褐色ロームブロック混じり細砂に含まれ、底面からはわずかに浮き上がっていた。

埋葬主体：墳頂部を中心に検出につとめたが、平面で確認できなかった。また墳頂部に接する崩落部分の断面観察でも痕跡を検出できず、墳丘の崩落に伴って完全に消失したと考えられる。

墳頂部は、全体の1/3程度が遺存するため、主体部は墳頂部の中央付近に、尾根に直行する方向で設けられた可能性が高い。なお、墳頂部からも遺物は出土していない。

墳丘上・周溝内部も含めて、古墳周辺から石材が一切見られなかった。主体部の形式には、木棺直葬を想定しておく。

時期：出土した遺物の特徴から、6世紀前半の築造と考えられる。

第4章 調査成果－西山B古墳群

第1節 概況

南から西へと弓状に曲がる尾根上に立地する。古墳は南と西へ派生する2つ尾根筋に並列する形で設けられている。付近一帯は多数の古墳が密集し、そのうち事業予定地内には11基が存在する。

第2節 1号墳（図版6・9／写真図版5）

調査区のほぼ中央で検出された。東西と南へ延びる尾根筋の交点に位置する。西には2号墳が、また東は多少の距離を持って4・5号墳が立地する。墳丘と周溝・主体部から構成され、急斜面となる南北側を中心に墳丘の流失が認められるほか、樹木の植林に伴う土坑状の攪乱が多数存在する。

墳丘：墳裾付近の形状が方形をなす。特に2号墳に接する西面において明瞭で、盛土および地山の整形痕が直線を呈し、北西および南西のコーナーが遺存する。方形を意識して築造されたと考えたい。規模は、東西軸13.6m、南北軸13.0m、西側墳裾からの高さ1.2mである。

丘陵を削りだした基部に盛土を加えて構築する。盛土は墳丘の中央付近に遺存する明黄褐色ロームブロック混じり細砂～シルト質細砂で、ロームブロックが基盤層（にぶい橙色疊混じりシルト）に類似することから、周溝掘削や造成で生じた土砂を利用したと考えられる。墳丘は硬く叩き締められていたが、遺存する範囲では単一の土壤で、特徴の異なる土砂を積み重ねるといった手法は見られなかった。墳丘上および盛土内部からの出土遺物はない。

周溝：墳丘東部の平坦面を中心に、南北方向にのびる。尾根筋を横断する形で設けられるが、平面は墳丘に対してわずかな円弧を描く。南北両端は墳丘に沿って西へ屈曲するものの、急斜面によって収束され、消失する。全長は12.5m、東辺の中央が最も良好に遺存し、幅広い逆台形の断面をなす。幅は2.5m、深さは0.2mである。

埋土は8層で構成され、少しづつ幅を減じてゆく様子が見てとれる。遺物は、底部に近い暗褐色疊混じりシルトから極めて少数出土した。図化できたものは細片化した須恵器杯身（2）だけであった。

埋葬主体：墳丘の中央からやや南寄りで、木棺の痕跡を1基検出した。組合せ式箱式木棺を直葬する。

墓壙は方形で、尾根の軸線と直交の南北に長軸をむける。全長は長軸2.21m、短軸1.34mである。底面はほぼ平坦で、周壁も直立する。木棺の痕跡部分よりわずかに浅く、検出面からの深さは0.25mを測る。埋土はロームブロックが混じる暗褐色のシルト～細砂で構成され、微量の炭化物が混入する。

木棺の痕跡は、墓壙のほぼ中央で検出された。平面は整美な長方形で、長軸は1.8m、短軸は0.85mをそれぞれ測る。断面は方形で、周壁が直立する。底面はほぼ平坦だったが、わずかに南側が低い。最深部での深さは0.28mである。底面において小口板の痕跡は認められない。埋土は中央付近が2層の並行堆積、棺側部周辺には小規模な堆積がある。

墓壙ならびに木棺痕跡の内部から、副葬品は出土しなかった。

時期：出土遺物が少ないため、厳密な時期は特定しがたいが、周濠より出土した土器から5世紀末～6世紀初頭の築造と考えられる。

第3節 2号墳（図版7・9／写真図版6・7）

調査区のほぼ中央に位置する。東西方向に延びる尾根上にあり、東には周溝を接して1号墳が、西13mには3号墳がそれぞれ存在する。墳丘と周溝・主体部で構成される。墳丘の上部は流失するものの、調査前から明瞭な隆起が認められる状態であった。墳丘・周溝埋土には植林された樹木が多数存在し、主体部に影響を与えるものもあった。

墳丘：流失や後世の改変を受けるものの、墳裾付近の形状や周溝の平面形から円墳と判断できる。墳丘の規模は、東西の中央軸が9.4m、南北軸が9.8mを測る。墳丘の高さは、尾根の低所にあたる西側の墳裾から1.52mである。

丘陵を削りだした基部の上に盛土を加えて墳丘とする。盛土はいくぶん流出が考えられるものの、西側斜面を中心に遺存する。墳丘盛土は浅黄橙色ロームブロック混じりシルトで、硬く叩き締められていた。基盤層（にぶい橙色礫混じりシルト）に類似するロームブロックを大量に含むことから、周溝や丘陵の掘削で生じた土砂を用いたのであろう。

東側の墳丘斜面から、数点の土器が出土した。いずれも細片化して、墳頂部から流出した堆積に含まれている。図化できたものは、須恵器の杯身（5・6）である。

周溝：墳丘の背後にあたる東側に、尾根筋を横断する形で設けられる。墳丘に沿って円弧を描き、全長は11.6mで、半径およそ6mである。南北の両端は西へ曲線を描き、急斜面によって収束・消失している。1号墳に接する東辺の中央が最も良好で、幅2.2m、深度0.38mを測る。断面は緩やかなU字形を呈する。

埋土は7層で構成される。レンズ状の堆積が重なるが、1号墳側からの堆積が先行し、溝幅を減じた後に2号墳側から埋土が堆積した様子が窺える。なお1号墳との構築順序を示す手がかりはない。遺物は状態が悪いえ少量で、図化できたものは2点にとどまる。上層の淡褐色シルト混じり細砂から須恵器の杯蓋（4）が、淡褐色細礫混じり細砂から須恵器の杯蓋（3）が、出土している。

埋葬主体：墳頂部の南部で、木棺の痕跡を1基検出した。組合せ式箱式木棺を直葬する。墳丘の中心から南へ偏在するが、ほかの埋葬主体は検出できなかった。

墓壙は方形で、長軸を尾根筋と同じ南北方向にむける。長軸の全長2.8m、短軸1.5mである。底面は平坦で、周壁も直立する。木棺の痕跡部分よりわずかに浅く、検出面からの深さ0.55mを測る。埋土はロームブロックの混じる、鈍い黄橙色細砂である。

木棺の痕跡は、墓壙のはば中央で検出した。長軸1.8m、幅は東辺がわずかに広く0.92mを測る。断面は方形で、最深部の深さ0.61mである。底面は東側にむかって緩やかな傾斜を持ち、小口板の痕跡はなかった。埋土は棺側面から中央にむけてレンズ状の堆積を呈する。

木棺痕跡から出土した遺物はないが、墓壙から玉類がまとまって出土している。出土位置は墓壙の北辺中央からやや東寄りで、底面よりも0.35m高い位置から検出された。勾玉（T1）・管玉（T2～7）・ガラス小玉（T8～107）がある。なお土器や金属器は出土していない。

時期：周溝および墳丘からの出土遺物は5世紀末～6世紀初頭のものが主体をなす。古墳もほぼ同時期の築造と考えたい。

第4節 3号墳(図版8／写真図版7)

調査区の西部に位置する。尾根の傾斜変換点にあたり、1・2号墳から続く緩やかな斜面が、3号墳より西では急斜面に変わっている。西側に隣接する古墳はなく、35m離れた尾根の下方から再び古墳が立地(西山B15~20号墳)する。尾根筋の中央に主体部を検出した以外に、古墳を構成する遺構は認められなかった。周囲の地形などから判断して、墳丘や周溝は流失したと考えられる。

墳丘: 地表面の直下で基盤層が露出、墳丘盛土と考えられる堆積は検出できなかった。基盤層自体の遺存状態が悪く、墳丘や周溝に伴う地山の整形痕も特定できなかった。

比較的緩やかな北側の傾斜において、わずかながら円形の張り出しが認められる。また2号墳と境を接する尾根の上の平坦面から南西にむけて、溝状の落ち込みが存在する。これらの傍証から主体部を中心とする直径7m前後の円墳を想定しておきたい。

主体部周辺の丘陵斜面において、遺物の出土はなかった。

埋葬主体: 尾根の中央において、組合せ式箱式木棺の痕跡を1基検出した。墓壙は方形で、尾根の軸線と直交の南北に長軸をむける。長軸の全長2.23m、短軸0.95mを測る。底面はほぼ平坦で周壁も直立するが、上面は大きく削平されて、検出面からの深さ0.20mである。埋土はロームブロックが混じるにぶい橙色シルト質細砂である。

木棺の痕跡は、墓壙のほぼ中央で検出された。北東隅付近を立木による搅乱で乱される。整美な長方形で、長軸1.47m、短軸0.53m、最深部での深さは墓壙とほぼ同じ0.2mである。周壁は直立、底面も平坦だが北側でわずかな段を有する。小口板の痕跡などは認められなかった。埋土は基本的に3層の並行堆積である。

墓壙・木棺痕跡とともに、埋土から出土遺物はなかった。

時期: 時期決定の根拠を欠くが、主体部が小規模なことから、1・2号墳よりも後出すると考えておきたい。

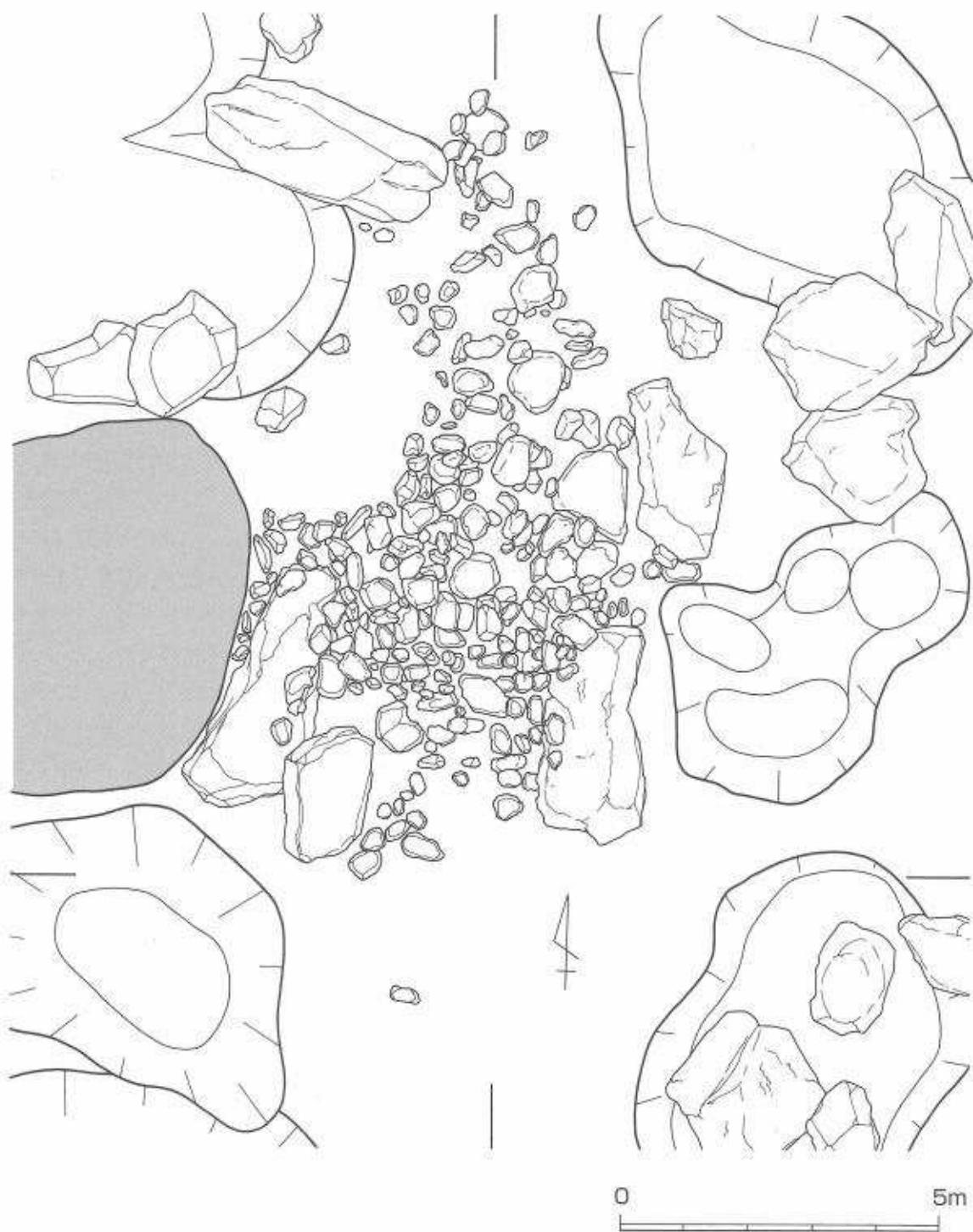
第5節 4号墳(図版10・11／写真図版11・12)

調査区の東部で検出された。南へ延びる尾根筋からはずれた東斜面上に立地する。北西20mには1号墳が、南西13mには5号墳がそれぞれ存在する。検出前からコの字状のくぼみとして認識できる状態であったが、掘削を進める過程で横穴式石室を持つ古墳であることが判明した。石室は主要な石材のほとんどが消失し、墳丘・列石・周溝の遺存状況も悪い。

墳丘: 盛土は流失して確認できなかった。墓壙周囲の整形痕や古墳の西部にある周溝の平面形から、南北に長い楕円形の墳丘が想定できる。遺存する規模は、南北12.0m、東西4.5mである。なお石室中央で折り返した場合の東西規模は6m程度となる。墳丘上および盛土内部において、遺物の出土は見られなかった。

周溝: 斜面の高所に当たる西側で、墳丘を取り巻くように設けられる。南西部分は明瞭な溝状だが、北西部分は斜面のカットのみが認められる。南西部分は緩やかなレンズ状の断面で、西端付近は短く北東への分岐がある。遺存する最大深度は0.15mであった。なお、内部から遺物は出土しなかった。

墳丘内列石: 周溝から北西に続くカット面の内側で、一列に延びる石列を検出した。石列の両端は搅乱によって消失、検出した部分も調査前の段階で一部が露出していた。石材の抜き取りなどに伴って墳丘



第7図 西山B 4号墳 石室内礫床

の盛土が除かれた際に大半が消失したのであろう。検出した全長は3.08mで、基本的には長方形の石材が並列している。一部では石材の隙間を埋める形で小さい石が認められた。石室の床面から1.3mの高さに、ほぼ同一レベルで並べられていた。

丘陵斜面をL字にカットして、石材を据えているが、墳丘ならびに石室との詳細な工程順序はわからない。ただ西側のカット面との位置関係から見て、墳丘内に取り込まれていた可能性が高い。いわゆる

墳丘内列石の一部と考えられる。なお、周辺から遺物は出土しなかった。

埋葬主体：南に開口する横穴式石室だが、玄室・羨道ともに石材の大半は抜き取られ、石室全体が大きく乱されていた。石室内部の遺物も持ち出され、開口部前の搅乱坑に廃棄されたと考えられるものが、わずかに存在する。

尾根の縁辺に位置し、西から東へと下る丘陵斜面をL字形に削り墓壙とする。傾斜の変化を利用しているが、急斜面に接する東側は崖崩れで消失している。検出した墓壙は、平面が長方形で長軸4.85m、短軸2.25mを測る。底面はほぼ平坦、周壁は天端にむけてわずかに開き気味だが、ほぼ直立して立ち上がる。

横穴式石室：石材のほとんどが抜き取られ、原位置を保つものは奥壁と側壁の基底石1つづつである。袖の有無や用石方法は不明だが、抜き取り痕跡から推定した規模は、全長が3.7m以上、玄室幅が0.7m前後と考えられる。抜き取り痕跡の底部付近では、20cm前後の石材を検出した。いずれも石材の下部もしくは裏込め側に置かれ、掘り方の底面と接することから、石材を安定させるための詰石と見られる。遺存する側壁の基底石では、掘り方の北側を中心に詰め石を用いて、側壁を積み上げる面の平坦さを保っていた。他の基底石も、詰め石を用いることで、石材を積み上げる上面または壁をなす内面が平坦になるように調整したのであろう。

奥壁周辺の床面には礫床が遺存する（図7）。拳大から3cm前後の川原石を用い、側壁と並行に並べられた長方形の石材の間を埋める形で床面に敷き詰める。一部の円礫が長方形の石材の上に乗り上げて検出されたが、移動していない礫床と石材は同一のレベルを示す。石材は側壁の掘り方を切って据えられ、棺台の役割を果たすものと考えられる。なお、礫床から遺物を検出することはできなかった。

床面の中央より開口部方向に、排水溝が存在する。西側壁の抜き取り穴から東に延び、直角に曲がって床面中央を直進、先端は構成の搅乱によって消失する。対する東側壁では検出できなかった。断面はU字形で埋土は褐色シルト質細砂、内部から遺物は出土しなかった。排水溝の屈曲は袖石の影響による可能性があり、右肩袖を持つのかもしれない。この場合、玄室の内法は全長2.2m、幅0.7mとなる。

開口部分付近を搅乱で失うため、羨道部分については不明な点が多い。羨道の先端付近を破壊する搅乱坑からは、須恵器片のほか、人頭大の円礫がいくつか検出された。石室内を搅乱した際の廃棄土坑と考えられ、丘陵側にあたる西側の墓壙ラインから2m前後の短い羨道を考えておきたい。

開口部の搅乱坑内から出土した土器片のうち、図化できたものは須恵器の壺（20）だけである。石室内から遺物の出土はなかった。

時期：小規模な石室であることや、出土遺物の年代感から、7世紀中葉の古墳と考えられる。石列の存在や石室の構築方法など興味深い特徴を持つが、本来の状況を推し量るには限界がある。なお横穴式石室を有する古墳はこの1基のみであった。

第6節 5号墳（図版12／写真図版13）

調査区のはば中央で検出された。南へ延びる尾根筋の付け根に位置する。南8mには同じ尾根上に位置する6号墳が、北西18mに1号墳、北東13mに4号墳がそれぞれ位置する。円弧を描く周溝のみが検出された。周溝に囲まれた範囲が墳丘と考えられるが、主体部の痕跡は認められない。

墳丘：墳丘そのものは完全に流出した状態であった。周溝周辺は表土直下で基盤層が露出し、墳裾の位置を示す整形痕跡も検出することができなかった。周溝の円弧から、直径3.5m前後の小規模な円墳と考えられる。なお主体部も墳丘と同じく完全に流失した模様で、確認はできなかった。

周溝：平面は半円形をなし、墳丘の背後である北側に設けられる。直径は5.85mで、いくぶん南北が長い楕円形を呈する。断面はレンズ形で、幅は1.38m、深さは0.32mである。

埋土は3層で、植林の樹木が深く食いこむ箇所をのぞけば、底面の起伏は少ない。検出したほぼ中央から、須恵器の杯蓋（7）が出土した。底部に伏せられる形で検出され、樹木の根が絡んで天井部のツマミが消失する以外は、良好な遺存状態であった。

時期：周溝より出土した土器は、5世紀末～6世紀初頭に比定できる。ただし近接する6号墳との前後関係などに、不明な点が残る。

第7節 6号墳（図版13・19／写真図版14・15）

調査区の南部で検出された。南へ延びる尾根筋に位置し、北8mには近接して5号墳が、南9mには7号墳がそれぞれ存在する。墳丘と周溝・主体部から構成される。調査前の植栽に伴って土坑状の搅乱が設けられ、墳頂部および墳丘を乱している。

墳丘：墳裾部分が円弧を描き、隆起は比較的明瞭であった。ただ墳頂部付近の流出は顕著で、両小口側の上部が失われている。墳丘の規模は、東西の中央軸8.15m、南北軸7.6mを測る。南側墳裾からの高さ、1.5mである。

丘陵を削って基部とし、さらに盛土を積んで墳丘とする。基盤層（にぶい橙色碟混じりシルト）の上に堆積する、にぶい赤褐色シルトが墳丘盛土で、最大50cmの厚みを持って遺存する。部分によって粗密はあるが、基盤層に類似するロームブロックが含まれており、周溝や整形時に生じた土砂を利用して構築したと考えられる。局部的な変質は認められるが、特徴の異なる堆積は見られない。

墳丘上および盛土内部において、遺物の出土は見られなかった。

周溝：背後にあたる北側に設けられ、墳丘の1/3を取り囲む。東端は斜面によって収束され消失するが、急斜面に接する西端では底面を階段状に整形している。全長は10.2m、断面は緩やかなレンズ状をなし、北辺の中央が最も良好に遺存する。最大幅2.1m、最大深度0.34mである。

埋土は搅乱などによって分断されるが、基本的には4層で構成される。内部から遺物は出土しなかった。斜面の高所にあたる北側から埋没する状況がうかがえるものの、北側の5号墳と前後関係を示す堆積状況は見られなかった。

埋葬主体：墳丘のほぼ中央で、木棺の痕跡を1基検出した。組合せ式箱式木棺を直葬する。主体部の西側は植栽に伴う搅乱で大きく乱されているほか、東側小口付近も墳丘の流出時に失われている。

墓壙は方形で、長軸を尾根の軸線と直交の東西にむける。遺存する長軸の全長が2.38m、短軸1.48mを測る。底面はほぼ平坦で、底面に接する付近の周壁が緩やかに湾曲する。検出面からの最深度は0.5mである。埋土は基本的に明赤褐色シルト系の堆積で構成される。なお、棺痕跡の直上に堆積する明赤褐色シルトからは、須恵器の杯が2点並んで出土した。

木棺の痕跡は、墓壙のほぼ中央に遺存する。西小口を搅乱で失うほかは良好な遺存であった。平面は長方形で、遺存する長軸の長さ1.71m、幅が中央付近で0.69mをそれぞれ測る。断面は方形で深さ0.3m、棺の埋土は3層が並行に堆積する。

底面は平坦で、両小口において小口板の痕跡が認められた。東小口は棺尻に接する位置に設けられ、全長0.57m、最大幅0.22m、棺底からの深さ0.15mを測る。西小口は全長0.59m、最大幅0.42m、棺底からの深さ0.15mを測る。

木棺痕跡の内部から遺物を認めることはできなかった。墓壙では、棺痕跡の直上に堆積する明赤褐色シルトから須恵器の杯蓋（8）と杯身（9）を検出した。木棺のはば中央で、東側に蓋・西側に身が同一レベルに並び、いずれも口縁を上にむけて置かれていた。焼成が悪く脆弱なため、周囲の土壌ごと取り上げて、屋内で細部の検出作業を行ったが、内容物はみられなかった。棺痕跡を覆う土壌の内部に含まれることから、被葬者の埋葬直後に供献された土器であろう。

時期：墓壙より出土した遺物の特徴から、6世紀前葉の築造と考えられる。

第8節 7号墳 (図版14・19／写真図版16)

調査区の南部で検出された。南へ延びる尾根筋の上に位置する。北9mには6号墳が、南8mには8号墳がある。墳丘と周溝、主体部で構成される。墳丘には樹木が多数植えられ、墳丘ならびに主体部の一部が土坑状の攪乱で消失する。

墳丘：基底部の形状から見た墳丘の平面形は、東西に長い楕円形である。隆起は南側で明瞭だが、墳頂部から周溝にかけて広い平坦面が認められる。主体部の深度が浅いことから、墳頂部付近の墳丘が大きく流出して形成されたものであろう。墳丘の規模は、南北軸4.85m、東西軸6.7mである。墳丘の高さは、尾根の低所にあたる西側の墳裾から1.18mを測る。

丘陵を削りだして基部とし、盛土を積んで構築する。盛土は基盤層（明赤褐色シルト）の上に堆積する赤褐色ロームブロック混じりシルトで、硬く叩き締められていた。墳頂部付近が流出したために、主体部寄りの周溝底部で盛土と地山の境を検出することができた。

墳丘上および盛土内部からの出土遺物はない。

周溝：墳丘の北側で、尾根を東西に横断する形で設けられる。平面はほぼ直線で、両端がわずかに墳丘側へ屈曲する。全長8.8m、幅1.45mである。幅広いレンズ形の断面をなす最深部は中央部分で、0.15mを測る。

検出した埋土は3層で、底部付近に堆積する褐色シルト質細砂シルトから遺物が出土した。周溝の大半は地山を削って形成されるが、南側の一部は墳丘を切りこんで設けられる。北側に位置する6号墳の墳丘とは切り合いを生じない。

出土遺物は細片化した土器1点である。須恵器壺（10）で、口縁のごく一部だけが遺存する。

埋葬主体：墳丘の中央からやや北寄りで、木棺の痕跡を1基検出した。組合せ式箱式木棺を直葬する。墓壙ならびに木棺痕跡は、大きく攪乱を受けている。

墓壙は方形で、北東隅に攪乱坑がある。尾根の軸線と直交する東西方向が長軸である。長軸の全長2.68m、短軸1.56mを測る。周壁は直立し、検出面からの深さは0.25mである。埋土は赤褐色シルトシルト質細砂を基本とし、局部的にロームブロックの混じった変質層が見られた。

木棺の痕跡は、墓壙のはば中央に位置する。平面は長方形で、長軸1.73m、短軸0.80mである。断面は方形で周壁は直立する。底面は東にむかって緩やかな傾斜を持ち、小口板の痕跡などは検出できなかった。最深部での深さは0.3mである。埋土は基本的にレンズ状の堆積を呈する。

墓壙ならびに木棺痕跡の内部から、遺物は出土しなかった。

時期：周溝から出土した須恵器は細片のため、検討に限界があるが、5世紀後半と考えておく。ただし出土状況を見る限り、他所からの流入を否定できない。この遺物を根拠として、古墳の時期を決定するのは困難といわざるを得ない。

第9節 8号墳（図版15・20／写真図版17）

調査区の南側において検出された。南へ延びる尾根上に位置し、北8mには7号墳、南10mには9号墳がある。古墳は墳丘と周溝、主体部で構成される。

墳丘：東西の中央軸が7.9m、南北軸が6.5m、墳丘の高さは、南墳裾からの高さ1.5mである。丘陵を削りだした基部の上に盛土を積んで構築する。基盤層（にぶい橙色礫混じりシルト）の上に堆積する明黄褐色シルトが盛土で、他の古墳と同じく基盤層に類似するロームブロックが含まれる。盛土は墳頂部付近を中心に遺存するものの、北側の堆積はかなり薄く、一部で基盤層が露出している。多くが流失したのであろう。

南東斜面からは、細片化した須恵器杯蓋（11）の破片が1点出土した。盛土内部から、遺物の出土は見られなかった。

周溝：墳丘の背後である北側に設けられる。尾根筋を横断する形で東西方向にのびるが、東西両端付近でわずかながら墳丘側へ屈曲を見せる。端部はいずれも急斜面によって収束され、消失する。全長は11.2m、北側の立ち上がりが急なため、断面は三角形に近い。良好な遺存の中央部分で、幅が2.08m、深さが0.55mを測る。

埋土は5層で構成され、基本的に並行堆積をなす。遺物は出土しなかった。

埋葬主体：墳丘のはば中央で、木棺の痕跡を1基検出した。組合せ式箱式木棺を直葬する。

墓壙は方形で、尾根筋と直交方向の南北に長軸をむける。全長は長軸2.62m、短軸1.48mである。底面は平坦で、木棺の痕跡部分よりわずかに浅い。検出面からの深さは0.41mである。墓壙北側は基盤層を穿つことから、底面の中央で盛土と基盤層の境界が検出できた。埋土は明赤褐色のシルト質細砂で構成される。

木棺の痕跡は、墓壙のはば中央で検出された。平面は整美な長方形で、長軸2.14m、短軸0.80m、最深部における深さ0.44mをそれぞれ測る。底面は平坦で、小口板の痕跡は認められない。埋土は中央付近で3層が並行堆積するほか、棺側部周辺に小規模な堆積がある。

墓壙ならびに木棺痕跡から、遺物の出土は見られなかった。

時期：墳丘から出土した遺物は6世紀前葉の年代感を持つが、出土量が寡少なうえ、出土状況からも古墳への共伴を確定できない。

第10節 9号墳（図版16・21／写真図版18）

調査区の南部、南北に延びる尾根筋の中央で検出された。西10mには8号墳が、東は多少の距離を持って10号墳がある。古墳は墳丘と周溝、主体部で構成される。墳頂部付近は大きな平坦面となり、墳丘の流失が顕著なことを示す。また調査前の植林に伴う土坑状の擾乱が点在する。

墳丘：北側にある周溝から墳裾が半円形に張り出している。規模は、東西の中央軸が10.5m、南北軸が7.15m、南側墳裾からの高さ0.8mである。

丘陵を削りだした基部に盛土を加えて墳丘とする。基盤層（にぶい橙色礫混じりシルト）の上に堆積する赤褐色シルト質細砂～シルトが盛土で、墳丘の南側にかけてわずかに遺存する。

墳丘上および盛土内部からの出土遺物はない。

周溝：墳丘の北側に、東西方向で設けられる。平面は弓形で、両端部がわずかに墳丘側へと屈曲する。全長は13.6m、断面は幅広いレンズ形をなす。中央部分が良好な遺存を示し、幅2.36m、深さ0.36mをそれぞれ測る。

埋土は5層で構成される。削平によって、下部の堆積が露出している。遺物は出土しなかった。

埋葬主体：墳頂部平坦面の中央から北寄りに主体部1基を検出した。盛土を掘りこんで、組合せ式箱式木棺を直葬する。

墓壙は方形で、長軸が尾根軸線と直交の東西方向にむける。各部位の規模は、長軸の全長2.82m、短軸1.49m、検出面からの深さ0.38mである。底面は平坦で、周壁が途中で小段を持ちながら斜め上方に立ち上がる。埋土はいくつかの層に分かれるが、明赤褐色～褐色系のシルトが主体をなす。

墓壙のほぼ中央で、木棺の痕跡を検出した。西の棺尻は墓壙の周壁に近接する。平面は長方形で、長軸が墓壙よりも南西方向へ振る。長軸2.24m、短軸0.65mである。周壁は直立し、最深部での深さ0.46mを測る。底面は平坦で、小口板の痕跡は認められなかった。埋土の上半は、落ち込んだ堆積によって層序を乱されている。下半は中央付近が2層の並行堆積、棺側部周辺には小規模な堆積が存在する。

墓壙、ならびに木棺痕跡の内部において、遺物の出土は見られなかった。

時期：墳丘の流出・改変の影響が大きく、築造時期を決める手がかりにかける。主体部の形式や古墳の位置から、8号墳と近接する時期を考えておく。

第11節 10号墳（図版17・20／写真図版19・20）

調査区の南西隅で検出された。南へ延びる尾根の先端に位置し、北15mには9号墳が、東14mには11号墳がある。平坦面の中央から主体部が検出された。他の古墳のような、盛土を持つ墳丘や周溝は認められなかった。

墳丘：表土直下より平坦な基盤層（にぶい橙～暗オリーブ色礫混じりシルト）が露出し、盛土の存在は確認できなかった。完全に流失した可能性も比定できないが、検出した墓壙の深度や、供獻されたと考えられる遺物が良好に遺存する点から、当初より築造されなかつた可能性もある。

平坦面は東西7.5m、南北5.8mを測る。平坦面の端部から斜面にかけては、周辺の地形と大きく矛盾せずに変化し、墳丘状の張り出しなど認められなかった。西部は調査区外に続くが、傾斜が崖状に変化するため、大きく広がるとは考えがたい。

主体部の背後には、丘陵を削った整形面がある。平坦面と一連の造成によるものであろう。整形面と主体部の間には植林に伴うピット状の搅乱が検出されただけで、周溝の存在は認められなかった。

埋葬主体：平坦面のやや北寄りで、木棺の痕跡を1基検出した。組合せ式箱式木棺を直葬する。

墓壙は方形で、尾根の軸線と直交の南北方向に長軸をむける。各部位の規模は、長軸3.77m、短軸1.80m、最大深度0.57mである。底面はほぼ平坦で、周壁が斜め上方へ緩やかに立ち上がる。木棺の痕跡部分はわずかに浅く、2段墓壙状の断面を呈する。埋土は棺側部分が褐色系のシルト～細砂、棺直上がロームブロックを含む褐色～明赤褐色シルト質細砂で構成される。

木棺の痕跡は墓壙のほぼ中央に位置するが、主軸をいくぶん北西へと偏向させる。平面は長方形で、長軸2.39m、短軸0.73mを測る。周壁が直立、底面は平坦だった。最深部での深さは0.33mである。中央で搅乱を受けているが、全体に堆積の乱れは少ない。埋土は棺側部周辺に小規模な堆積があるほか、中央付近で2層の並行堆積をなす。

遺物は木棺痕跡と墓壙から出土した。墓壙では、鷹（16）が墓壙内に落ち込む形で検出されたほか、検出面に近い位置から、杯・壺・高杯などが（12～15・17・18）出土した。いずれも棺埋納に伴って供獻されたと考えられる。木棺痕跡から土器・玉類は見られなかったが、東小口寄りの底部から鉄製品（F1～3）を検出した。

時期：出土土器は5世紀末～6世紀初頭のものが主体だが、5世紀後葉の特徴をもつものが混在する。時期が遡る要素として捉らえ、5世紀末の築造と考えたい。

第12節 11号墳（図版18・21／写真図版21）

調査区の南部で検出された、今回の調査で最も低所に位置し、尾根の主筋から外れた南西斜面上に立地する。東14mには10号墳が、北西方向に少し距離を置いて、9号墳がある。墳丘と周溝、主体部から構成される。墳丘の隆起は明瞭で、背後の斜面を削りこんだ区画をもつ。ただ墳頂部には植林等の搅乱が集中し、主体部に影響を与えている。

墳丘：斜面下方に位置する南東部を中心に遺存しており、墳頂部はある程度の流失が認められる。局部にも改変を受けるが、墳形は周溝の平面形と同じ円形と考えられる。墳丘規模は、南北の中央軸6.15m、東西軸4.95m、尾根の低所にあたる西側の墳裾からの高さ1.5mをそれぞれ測る。

他の古墳と同じく、丘陵を削りだした基部の上に盛土を加えて構築する。盛土は墳丘南部を中心に遺存し、大きく3つの堆積で構成される。基盤層（暗オリーブ色礫混じりシルト）の上に、灰褐色シルト～礫混じりシルト・褐灰色シルトならびににぶい赤褐色シルト・赤褐色シルト質細砂シルトである。いずれも基盤層に類似するロームブロックを大量に含むことから、周溝や基盤の整形時に生じた土砂を利用して構築したものであろう。墳丘上および盛土内部から、出土遺物はなかった。

周溝：墳丘の裾を囲んで明瞭な円弧を描く。周溝の背後に当たる北側では丘陵斜面を大きく削りこみ、傾斜のきつい南東側は不明瞭である。外周径は南北8.6m、東西7.2mの楕円形をなす。遺存の良好な東部中央は、断面がレンズ状で幅2.5m、深さ0.45mである。一方、西部の中央は、断面が浅いV字形で、幅1.5m、深さ0.2mである。南東部の埋土中から、土師器の甕（19）が出土した。口縁部の小破片であることや、上層の埋土に含まれていたことから、流入品の可能性が高い。

埋葬主体：墳丘の北西寄りで、木棺の痕跡を1基検出した。組合せ式箱式木棺を直葬する。周辺には搅乱土が大きく入り込み、棺痕跡の東部分を失うほか、遺存する部分も上面が乱されている。

墓壙は方形と考えられ、南北方向を長軸とする。長さは長軸が2.18m、短軸が南小口付近の1.06mである。周壁は斜め上方へ直線に開く。検出面からの深さは0.23mで、木棺の痕跡部分がわずかに深い。埋土はにぶい褐色シルトである。

木棺は、上面を大きく削平され、底部付近だけが遺存する。平面は長方形で、長軸1.69m、短軸0.56mである。遺存する周壁は直立し、最大深度0.12mを測る。底面は平坦で、北側に緩やかな傾斜を持つ。埋土は棺側部周辺に小規模な堆積があるほか、中央付近が2層の並行堆積をなす。

木棺痕跡の北側底部で、玉類がまとまって出土した。管玉1点（T108）とガラス小玉8点（T109～116）で、管玉は途中で折れている。出土位置が搅乱坑に近いことから、遺存した副葬品の一部と考えられる。この他に、墓壙ならびに木棺痕跡から遺物は出土しなかった。

時期：古墳に伴うことが確実な遺物は玉類だけであり、築造時期を決定するのは困難だが、古墳の規模や尾根における立地から、群中では新しい時期に築造されたと考えておく。

第5章 出土遺物

第1節 土器（第8図）

出土した土器の大半を須恵器が占める。それぞれの古墳から出土しているが、1～2点にすぎず、遺存状況もよいとはいえない。

1（須恵器・杯蓋） 口縁から底部の5/8が遺存する。口縁：12.9cm、器高：4.1cmである。

形態：天井部は中央が隆起する。体部は底部から屈曲し、口縁にかけて外方へ開き気味で端部に至る。口縁端部は内傾、ナデによって端面がわずかに段状をなす。

調整：口縁～体部は外・内面ともに回転ナデ。天井部外面は回転ヘラ切りの後ナデ。中央にヘラ起こしの痕跡が残る。内面は、粗い回転ナデの後一方向の仕上げナデ。回転ナデはかなり粗く、一部で前工程の調整痕がのぞく。中央では粘土の高まりをヘラ状工具で削り落とす。

2（須恵器・杯身） 口縁から体部が遺存する。復元口径：10.45cm、残存器高：3.4cmである。

形態：たちあがりは、わずかに内傾気味に口縁部へ至る。口縁端部は内傾して、段を有する。受部は欠損するため、形状不明。体部はわずかに湾曲しながら直立する。

調整：口縁～体部は、外・内面ともに回転ナデ。底部外面は、回転ヘラケズリの痕跡がわずかに遺存する。ヘラケズリは受部の直下にまで及び、広範囲に施されている。ヘラケズリの方向は不明。内面は、回転ナデで調整する。

3（須恵器・杯蓋） 天井部の一部が遺存する。残存器高：3.4cmである。

形態：天井部は緩やかなドーム状をなし、中央に直径2.7cmのツマミを付す。ツマミは鉗状で斜め外方へ大きく開く。口縁と体部の境をなす稜線は、突出が明瞭で端部も鋭い。体部は緩やかな曲線をなし、底部との境は不明瞭。

調整：ツマミも含めて、天井部の外面には広く灰被りが見られる。また稜線の上部にわずかながら自然釉が付着する。外面は回転ヘラケズリ、ツマミは回転ナデで調整する。内面は回転ナデの後に、一方向へ仕上げナデを施す。体部は外・内面ともに回転ナデを施す。

4（須恵器・杯蓋） 口縁部が1/4弱、体～天井部が1/2弱、残存する。復元口径：12.15cm、器高：4.2cmである。

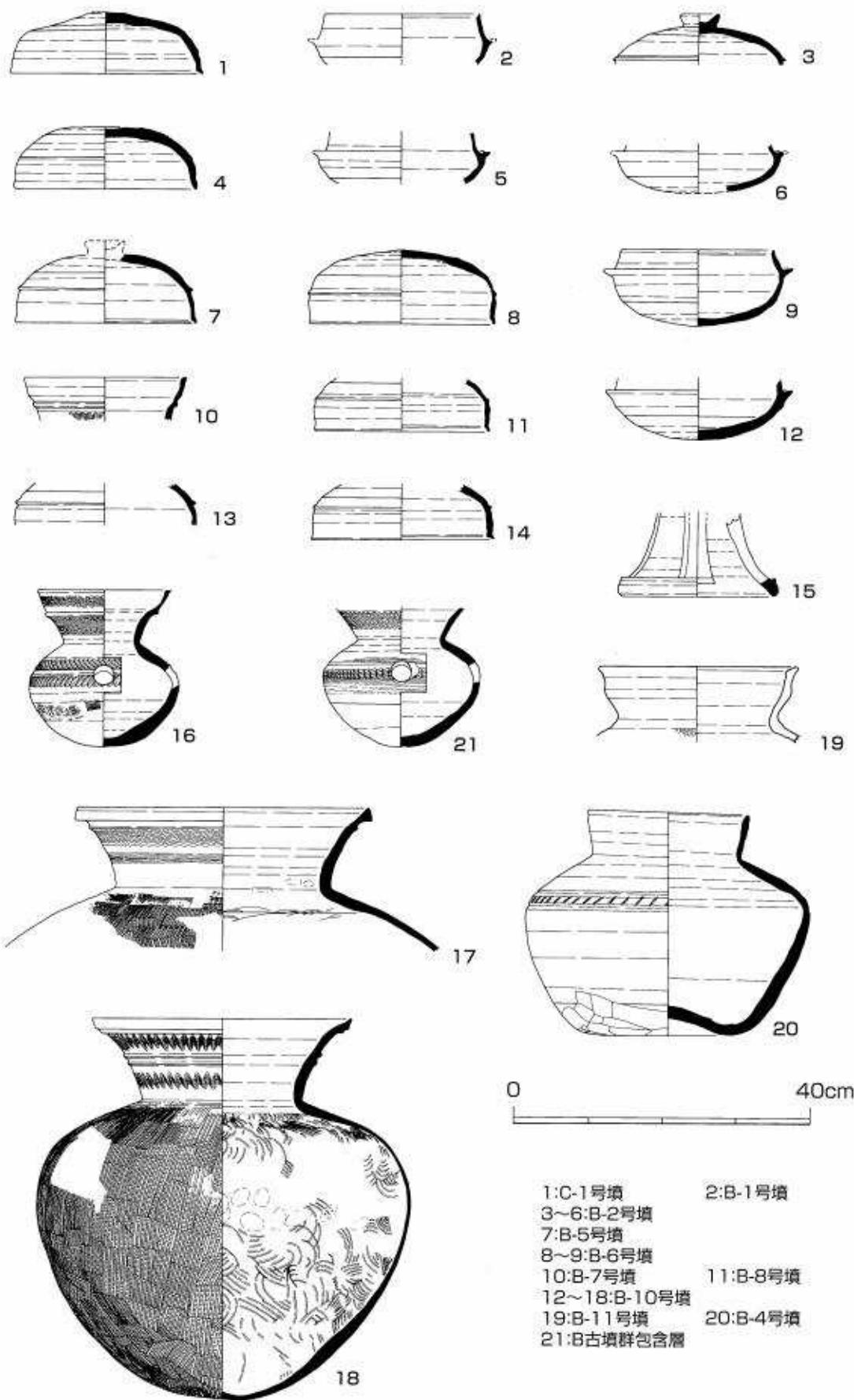
形態：天井部は外・内面とも平坦で、緩やかに湾曲しながら体部へ至る。外面の中央付近に自然釉が厚く付着する。体部と口縁の境界には微弱な凹線が1条めぐり、退化の進んだ稜線を強調させる。口縁部は垂下気味にのび、端部付近でわずかに外反する。口縁端部は丸くおさめる。

調整：口縁から体部にかけては、外・内面ともに回転ナデ。口縁端部で、わずかに重ね焼きの痕跡が残る。天井部外面は回転ヘラケズリを施す。内面は回転ナデだが、中央の調整痕が不鮮明で仕上げナデの有無を確認できなかった。

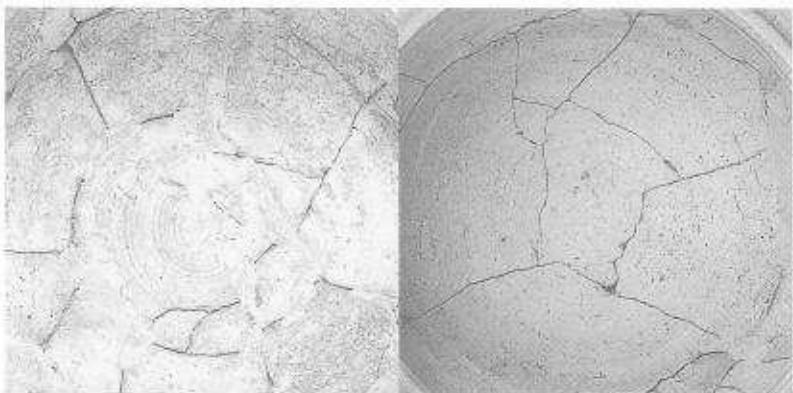
5（須恵器・杯身） 体部の1/9が遺存する。口縁部を欠損するが、たちあがり高から端部付近がわずかに欠けているのみと考える。残存器高：3.5cmである。

形態：たちあがりは基部で鋭く屈曲してから、斜め上方へ直立気味に立ち上がる。受部は外方へ鋭く突出する。体部は緩やかな湾曲を持ちながら底部へとむかう。

調整：たちあがりから受部・体部にかけて、外・内面とも回転ナデで成形する。受部の上端は、ヘラに



第8図 出土遺物実測図（1） 土器



第9図 西山B 6号墳出土土器内面

よるナデで平坦に成形する。底部の外面では、わずかにヘラケズリの痕跡がのこる。

6 (須恵器・杯身) 口縁と受部の先端を欠損、体部の1/7が遺存する。残存器高：3.3cmである。

形態：受部は基部付近が遺存する。遺存する形状からみて、明瞭に突出していた

と考えられる。体部から底部にかけては、緩やかに湾曲する。底部は中央を欠損するが、残存する部位から平坦で安定のよい形態であろう。

調整：体部は外・内面ともに回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリを施すが、ケズリ痕は丸く平滑化している。内面は回転ナデを施す。

7 (須恵器・杯蓋) 全体の7/8が遺存する。天井部の中央を欠損するが、遺存状態はよい。口径：12.1cm、残存器高：4.65cmである。

形態：天井部は緩やかなドーム状をなし、欠損する中央部分にはツマミの痕跡が認められる。体部は緩やかな曲線をなし、突出の明瞭な稜線を持つ。口縁部は直線に垂下する。口縁端部付近は外反気味となり、内面には段を持つ。

調整：口縁～体部にかけては、外・内面とも回転ナデ。天井部の外面は、2/3を回転ヘラケズリ。天井部外面の中央には、ツマミ貼り付け時のナデがある。内面は回転ナデ。

8 (須恵器・杯蓋) 口縁部は一部が遺存するが、体～天井部は完形である。復元口径：12.4cm、器高：5.0cmである。

形態：天井部は緩やかにドーム状をなす。体部はゆるやかに湾曲して、鈍化した稜線が巡る。口縁部は内傾気味に端部へ達する。口縁端部の内面はわずかに段を有する。

調整：軟質で器面の剥落が顕著なために、不明瞭な部分が多い。口縁～体部は、外・内面ともに回転ナデで調整する。天井部は外面を回転ヘラケズリ、内面を回転ナデで調整する。内面の中央には微弱な同心円が認められる（第9図左）。9の底部内面にも同様の痕跡があり、形状等が酷似するため、同じ原体を用いて押圧したと考えられる。押圧は中央に1回施されており、いわゆる「同心円スタンプ」と同じ意図が考えられる。対応する外面にタタキ等の痕跡は認められないことから、成形時ではなく、天井部を調整する際の當て具として用いたものであろう。

9 (須恵器・杯身) わずかに欠損する口縁部をのぞいて、完形に遺存する。口径：10.2cm、器高：5.2cmである。

形態：たちあがりは内傾して、端部付近でわずかに外反する。口縁端部はわずかな段をなす。受部は外方へ直線的に引き出される。体部から底部にむかって緩やかな湾曲を見せ、底部は丸底となる。

調整：焼成が悪く、器面の剥落が目立つ。口縁～体部は外・内面とも回転ナデ。底部は外面が回転ヘラケズリ、内面は口縁部から連続する回転ナデで調整する。内面の中央には、8の天井部内面と同じ、微弱な同心円の条線がある（第9図右）。中央に1回押圧した後、仕上げナデとして回転ナデを加え、さらに中心部分をユビオサエで平滑にしている。

10 (須恵器・壺?) 口縁部付近がわずかに遺存する。残存部位の形態や器壁から壺に比定したが、ハソウの可能性もある。復元口径: 10.8cmである。

形態: 頸部から大きく開き、途中で内湾して端部に達する。口縁端部は内傾する。頸部外面は鈍い突帯が1条めぐり、その下部に櫛描波状文を施す。

調整: 口縁部は外・内面ともに回転ナデで調整される。器壁に自然釉の付着が著しい。

11 (須恵器・杯蓋) 口縁~体部がわずかに遺存する。復元の数値に不安が残るが、復元口径: 11.7cm、残存器高: 3.65cmである。

形態: 体部は緩やかな曲線をなし、口縁で垂下する。口縁端部は内傾して、わずかに段をなす。

調整: 口縁~体部は、外・内面ともに回転ナデを施す。体部外面の上端にはヘラケズリの痕跡があることから、天井部の広い範囲にヘラケズリを施しているのであろう。

12 (須恵器・杯身) 体~底部の1/2が遺存する。口縁は完全に欠損する。残存器高: 4.2cmである。

形態: 口縁部はたちあがりの基部のみが遺存、わずかに内傾気味で立ち上がる。受部は斜め上方に突出するが、全体に厚ぼったく、下部は体部と一体化する。体部は椀状で、緩やかに湾曲しながら底部へと至る。底部は全体に丸みをおびる。

調整: 体部は外・内面とも回転ナデで調整する。底部外面は回転ヘラケズリののち、回転ナデを加える。

内面は体部と一連の回転ナデが中央までおよぶが、粗いために未調整の部分が帶状で残る。

13 (須恵器・杯蓋) 口縁端部ならびに天井部を欠損する。残存器高: 2.9cmである。

形態: 天井部から体部はドーム状をなし、口縁にかけて垂下する。稜線の下部には、強いヨコナデを加えて突出を強調する。

調整: 口縁~体部の外面は回転ナデ、天井部付近の外面はヘラケズリの痕跡がある。遺存する範囲の内面には、すべて回転ナデが施される。

14 (須恵器・杯蓋) 口縁から体部にかけて、1/4が遺存する。天井部のほとんどを欠損するため、ツマミの有無は不明。復元口径: 12.2cm、残存器高: 3.7cmである。

形態: 遺存する天井部は中央に向けてドーム状となる。体部は緩やかに湾曲して、突出の明瞭な稜線を持つ。口縁部は垂下し、内傾する端部の中央が凹線状にくぼむ。

調整: 外面は、天井部に回転ヘラケズリ、体部の稜線直上から口縁部にかけて回転ナデを施す。内面は遺存する部位の全体を回転ナデで調整する。

15 (須恵器・高杯) スカシを持つ脚部のみが遺存する。杯との連接部分以上が欠損し、形態や特徴はわからない。残存器高: 5.7cm、復元底径: 10.2cmである。

形態: 脚柱部は、裾部に向けてラッパ状に開く。スカシの全容はわからないが、下端部が幅2.5cmを測る。裾部は上部へわずかに拡張し、上端沿いに凹線を施す。裾部端面は丸くおさめる。

調整: 脚部は外・内面ともに回転ナデで調整する。内面を中心に自然釉が付着するほか、裾部の先端に重ね焼きの痕跡が残る。

16 (須恵器・甌) 口縁部の3/4を欠損、体部から底部にかけて完全に遺存する。復元口径: 8.9cm、器高: 10.6cmである。

形態: 口縁部は頸部からラッパ状に開き、途中で内湾して端部に至る。口縁端部は内傾するが、外縁と端面を水平に描えている。端面はわずかな段を持つ。底~体部は球形だが、肩部に膨らみが少ない。底部は完全な丸底である。

調整: 器面全体が灰かぶりを受け、あれれている。外面は、口縁部が回転ナデの後に櫛描波状文を2条施す。肩~胴部はナデの後、胴部に凹線を1条巡らせ、上下に櫛状工具で刺突文を加える。最後に胴部の

中心からやや上方へ、直径1.3cmの円孔を穿つ。下体部～底部は、平行タタキを施したのち底部付近のみナデ消す。内面は、口縁～体部が回転ナデ、下体部～底部に同心円の当て具痕が残る。

17 (須恵器・甕) 口縁～肩部の1/4が遺存、体部以下は欠損する。復元口径：19.4cm、遺存する器高：9.7cmである。

形態：外方へ緩やかに開く短い口縁である。口縁端部は下方へ拡張させ、断面を三角形に成形する。肩部は頸部から屈曲し、直線的に外方へ張り出す。いわゆる「怒り肩」の形態である。

調整：口縁部のうち、頸部内面から口縁端部付近の外面にかけては回転ナデで調整する。頸部内面には、成形時の指押さえ痕がわずかに残る。頸部外面はカキメを施して上方に櫛描波状文を巡らせ、下方をナデ消す。肩部の外面は格子目タタキ、頸部との連接部分をヨコナデで消す。内面は同心円の当て具痕がのこるが、粗くナデ消されている。

18 (須恵器・甕) 破片化して出土したが、ほぼ完形に復元できた。復元口径：17.3cm、器高：25.6cmである。

形態：口縁は緩やかに外方へ開き、端部が外傾する。頸部のくびれは明瞭。肩部は直線的に張り出し、胴部へといたる。胴部の最大径がかなり高い位置にあり、怒り肩の形態となる。下体部から底部にかけてはわずかな曲線を描くが、比較的直線に近い。底部の中央はわずかに平底気味である。

調整：口縁部は外・内面ともに回転ナデを基本とし、頸部中央に断面三角形の微弱な突帯を作り出す。突帯の上下には櫛描波状文をそれぞれ施す。体部から底部にかけては、外面に平行タタキ、内面に同心円の当て具痕が残る。当て具痕は切りあいが明瞭で、肩部と胴部、底部でそれぞれ方向が異なる。また肩部の上端をナデ消され、胴部付近も指押さえ痕によって切られる。

19 (土師器・甕) 復元口径：13.0cmとしたが、口縁部がわずかに遺存するにすぎず、数値に不安がある。残存器高：5.1cmである。

形態：頸部で軽く屈曲し、直立気味に端部へ至る。端部付近は外反気味となり、端面は内傾する。

調整：口縁部は外・内面ともに回転ナデ、肩部は外面に平行タタキの痕跡が残る。

20 (須恵器・甕) 口縁～底部の1/2強が遺存し、器形の全容がわかる。復元口径：10.7cm、器高：15.0cm、底径：8.7cmである。

形態：頸部は直立して口縁端部へと至る。内面がわずかに肥厚するが、端部は丸くおさめる。肩部は屈曲して直線的に張りだし、胴～下体部がわずかに丸みを帯びながら底部に至る。底部は平底だが、中央を大きくくぼませる。

調整：口縁～体部は外・内面ともに回転ナデで調整する。自然釉や灰かぶりによって、肩部外面の器面があれれている。胴部の上側は、凹線を2条巡らせた間に斜めの櫛描列点文を等間隔で配する。下体部は外・内面とも回転ナデだが、内面のところどころで成形時の指押さえの痕が遺存する。底部外面は静止ヘラケズリの後、中央を指押さえで大きくくぼませる。内面はナデを施すと見られるが、自然釉の付着によって調整不明。

21 (須恵器・甕) 体～底部は完形である。口縁部の上半分を失うが、頸部下半以下は完形に遺存する。残存器高9.4cmである。

形態：頸部はラッパ状に外方へ開く。体部は球形で、下体～底部がわずかに尖り気味となる。胴部の中央に1箇所、直径1.4cmの正円孔を穿つ。

調整：外面は、頸部が回転ナデの後に櫛描波状文、肩～下体部がカキメを施して上下をナデ消す。肩部寄りに凹線を1条巡らせ、胴部中央には波状文の変形と見られる、櫛状工具を押し付けるようにした刺突文を加える。底部は回転ヘラケズリで調整するが、摩滅を受けている。内面は回転ナデによって調整

する。

杯身は、全ての底部外面にヘラケズリが認められる。また端部を遺存するものはいずれも内傾して、丸くおさめただけのものは見られない。2は長いたちあがりと口縁端部の明瞭な段、器形全体の鋭さから、TK47型式並行期に比定した。全容が遺存しない5・6も受部の突出具合や器形の鋭さが2と共通し、ほぼ同じ型式と考える。9は受部の突出が明瞭で体～底部が深いなど、古い形態を備える。ただし内傾する端部の段が弱いことから、MT15型式並行期と考えておきたい。また12は底部ヘラケズリの範囲が全体の1/2にとどまり、鋭さを欠く受部の形態などから、TK10型式並行期に当てはめたい。

杯蓋は、いずれも天井部外面の広い範囲にヘラ削りを施す。また口縁と体部の境に稜線を持ち、口縁端部が内傾して段を有するものが目立つ。稜線の形態は、鋭く突出する（3・7・13・14）、鈍い突出がある（8・11）、突出が消失して器面に凹線や鈍い稜線をとどめる（1・4）の3タイプがある。稜線の突出が明瞭なものは、器形が薄くシャープで調整も丁寧なところからTK47型式並行期とする。また稜線が鈍磨するものはMT15型式、稜線の突出が見られないものはTK10型式並行期に当てはめる。ただし1は端部に明瞭な段を持ち、古い要素をとどめている。

ハソウはいずれも球形の体部を有し、頸部が長大化する以前の形態である。尖底で広口な器形の21は、16よりもいくぶん後出する。16をTK23型式、21をTK47型式に並行する時期と考えておく。

第2節 金属器（第10図）

10号墳の木棺痕跡底部から、3点が出土した。いずれも鉄製、融着した状態で検出された。

F1 断面が長方形で、一端が片刃状に広がる。形態から鉄鎌に比定したが、先端を欠損し、関部にも鋭さが見られない。また遺存する部位においては、明瞭な刃が確認できなかった。

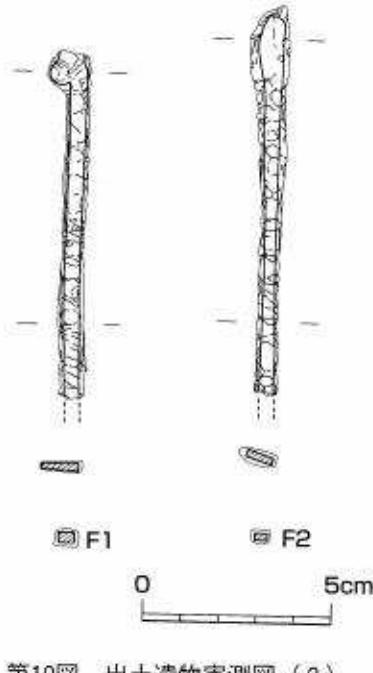
F2 先端の幅広い部分が鎌身、断面が長方形の軸が頭と考えられる。頭の一部において木質が遺存する。鎌身は片側へ突出するが、関部は明瞭でない。平面から鑿箭形の鎌身と見られるが、峯が不明瞭で断面にも明瞭な刃部分が見られない。

F3 直径2～5mmの細い円軸状をなす。4片に細片化して、接合が可能な部位はない。延べの全長は5.3cmを測る。鎌身部分を欠き、茎だけが遺存する鉄鎌であろう。

第3節 玉類（第11～14図）

2号墳からは勾玉1点・管玉6点・小玉101点、11号墳からは管玉1点・小玉8点が出土した。以下、古墳ごとに概要をまとめた。個々の法量については、後掲の一覧表に括した。

2号墳出土玉類 勾玉（T1）はベージュ色の半透明で、水晶製とみられる。硬質だが石材は悪く、節理が浮き出ている。管玉（T2～T7）は薄緑色で、T2が硬質、T3～T7が



第10図 出土遺物実測図（2）
金属器

軟質であった。軟質なものは石質が悪く、T6・T7は一部が埋土に溶けだしている。材質は前者が滑石、後者がグリーンタフであろう。小玉(T8-T108)はすべてガラス製で、直径が0.3~0.4cmと、0.7~0.95cmの2種に分化する。色調は青一緑を基調とするが、色調や濃淡はそれぞれにばらつきがある。

11号墳出土玉類 管玉(T109)は硬質で、濃い緑色を呈する。小玉(T110~116)はガラス製で、直径0.3~0.4cmの小型品である。攪乱坑の近くから出土していることや、管玉が中央で破損していることから、攪乱時の散逸が予想される。

表3 出土玉類法量表(1)

B 2号墳出土 ガラス小玉

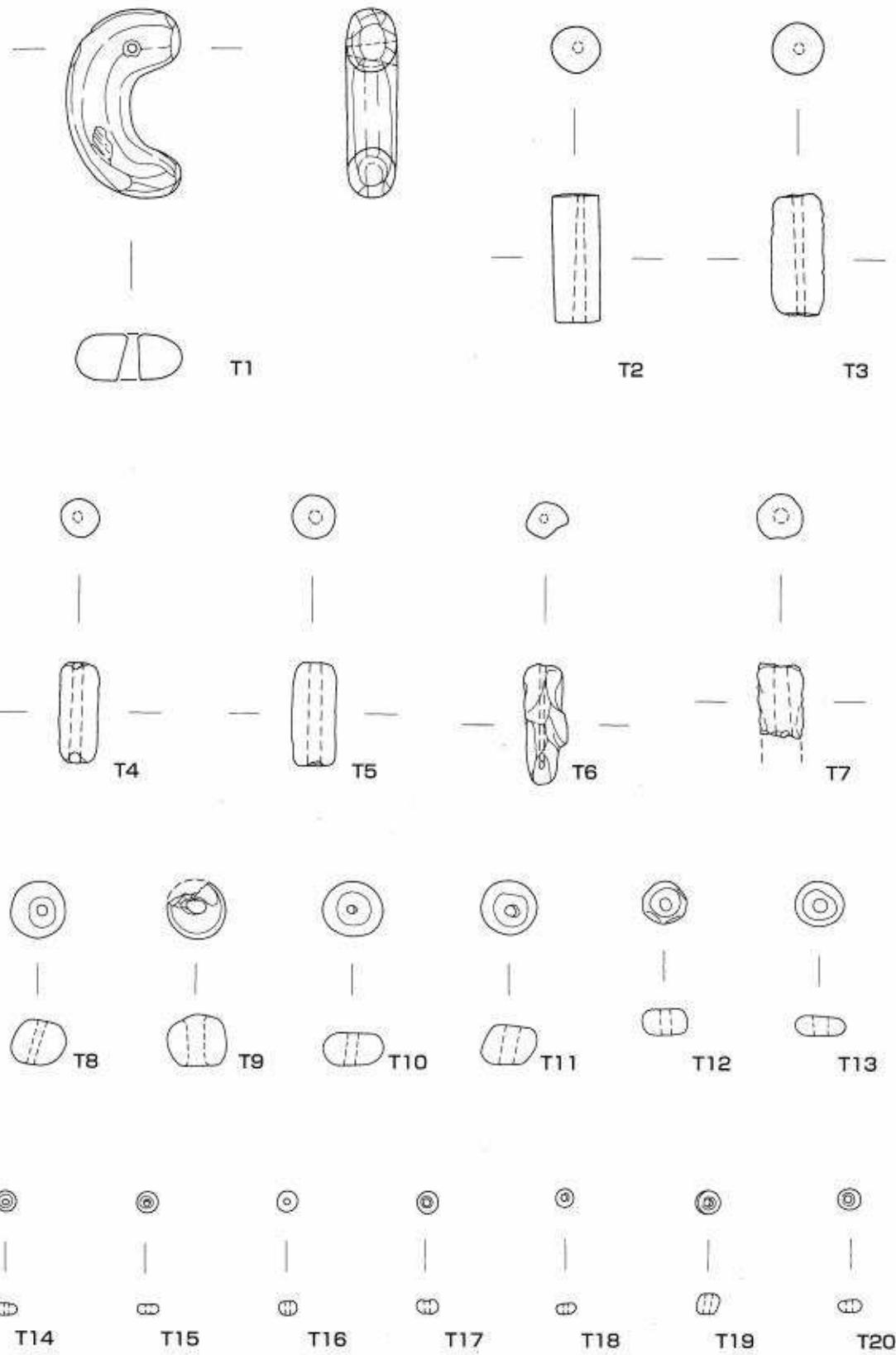
単位:mm

No	径	厚	孔径	No	径	厚	孔径	No	径	厚	孔径
T8	0.9	0.75	0.15	T42	0.35	0.25	0.15	T76	0.35	0.3	0.1
T9	0.95	0.85	0.35	T43	0.3	0.1	0.1	T77	0.4	0.3	0.1
T10	0.95	0.5	0.15	T44	0.25	0.4	0.1	T78	0.45	0.25	0.15
T11	0.9	0.65	0.2	T45	0.4	0.15	0.15	T79	0.3	0.2	0.1
T12	0.7	0.4	0.2	T46	0.4	0.3	0.1	T80	0.25	0.1	0.1
T13	0.8	0.3	0.2	T47	0.25	0.15	0.1	T81	0.4	0.25	0.1
T14	0.3	0.2	0.1	T48	0.4	0.3	0.15	T82	0.4	0.3	0.15
T15	0.35	0.2	0.1	T49	0.3	0.15	0.1	T83	0.5	0.3	0.2
T16	0.3	0.2	0.1	T50	0.3	0.25	0.1	T84	0.3	0.2	0.1
T17	0.35	0.25	0.15	T51	0.4	0.25	0.15	T85	0.4	0.25	0.2
T18	0.3	0.2	0.1	T52	0.3	0.25	0.1	T86	0.3	0.25	0.1
T19	0.35	0.35	0.15	T53	0.35	0.2	0.15	T87	0.3	0.15	0.1
T20	0.35	0.2	0.1	T54	0.4	0.3	0.15	T88	0.3	0.15	0.1
T21	0.25	0.15	0.1	T55	0.3	0.2	0.1	T89	0.4	0.3	0.15
T22	0.35	0.35	0.2	T56	0.35	0.3	0.15	T90	0.35	0.2	0.15
T23	0.3	0.2	0.1	T57	0.35	0.2	0.15	T91	0.5	0.35	0.15
T24	0.5	0.25	0.2	T58	0.3	0.2	0.1	T92	0.4	0.3	0.1
T25	0.3	0.2	0.1	T59	0.2	0.15	0.1	T93	0.4	0.3	0.15
T26	0.45	0.35	0.2	T60	0.35	0.2	0.15	T94	0.3	0.2	0.1
T27	0.3	0.2	0.15	T61	0.35	0.2	0.1	T95	0.2	0.1	0.1
T28	0.35	0.35	0.1	T62	0.4	0.3	0.2	T96	0.3	0.15	0.15
T29	0.3	0.3	0.1	T63	0.4	0.2	0.15	T97	0.3	0.25	0.1
T30	0.4	0.2	0.1/0.2	T64	0.5	0.3	0.1	T98	0.3	0.15	0.1
T31	0.4	0.3	0.15	T65	0.3	0.2	0.15	T99	0.3	0.15	0.15
T32	0.35	0.15	0.2	T66	0.35	0.1	0.15	T100	0.3	0.25	0.1
T33	0.35	0.2	0.1	T67	0.3	0.25	0.15	T101	0.4	0.25	0.15
T34	0.3	0.25	0.1	T68	0.3	0.3	0.1	T102	0.3	0.2	0.1
T35	0.3	0.35	0.1	T69	0.4	0.25	0.1	T103	0.45	0.35	0.15
T36	0.4	0.3	0.1	T70	0.3	0.2	0.1	T104	0.4	0.25	0.15
T37	0.4	0.25	0.2	T71	0.35	0.25	0.15	T105	0.7	0.55	0.2
T38	0.45	0.3	0.15	T72	0.4	0.3	0.1	T106	0.7	0.4	0.2
T39	0.35	0.2	0.1	T73	0.3	0.2	0.1	T107	0.45	0.35	0.2
T40	0.35	0.2	0.1	T74	0.3	0.2	0.1				
T41	0.4	0.2	0.1	T75	0.4	0.3	0.2				

B 11号墳出土 ガラス小玉

単位:mm

No	径	厚	孔径	No	径	厚	孔径	No	径	厚	孔径
T109	0.3	0.2	0.1	T112	0.3	0.25	0.1	T115	0.45	0.3	0.1
T110	0.3	0.2	0.1	T113	0.4	0.3	0.15	T116	0.3	0.2	0.1
T111	0.4	0.3	0.1	T114	0.35	0.2	0.1				



第11図 出土遺物実測図（3） 玉類①

◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◐	◑	◐	◑	◐	◑	◐	◑
T21	T22	T23	T24	T25	T26	T27	
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◑	◑	◑	◑	◑	◑	◑	◎
T28	T29	T30	T31	T32	T33	T34	
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◑	◑	◑	◑	◑	◑	◑	◑
T35	T36	T37	T38	T39	T40	T41	
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◑	◑	◑	◑	◑	◑	◑	◑
T42	T43	T44	T45	T46	T47	T48	
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◐	◑	◑	◑	◑	◑	◑	◑
T49	T50	T51	T52	T53	T54	T55	
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◑	◑	◑	◑	◑	◑	◑	◑
T56	T57	T58	T59	T60	T61	T62	

第12図 出土遺物実測図（4） 玉類②

◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
▣ T63	▣ T64	▣ T65	▣ T66	▣ T67	▣ T68	▣ T69	

◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
▣ T70	▣ T71	▣ T72	▣ T73	▣ T74	▣ T75	▣ T76	

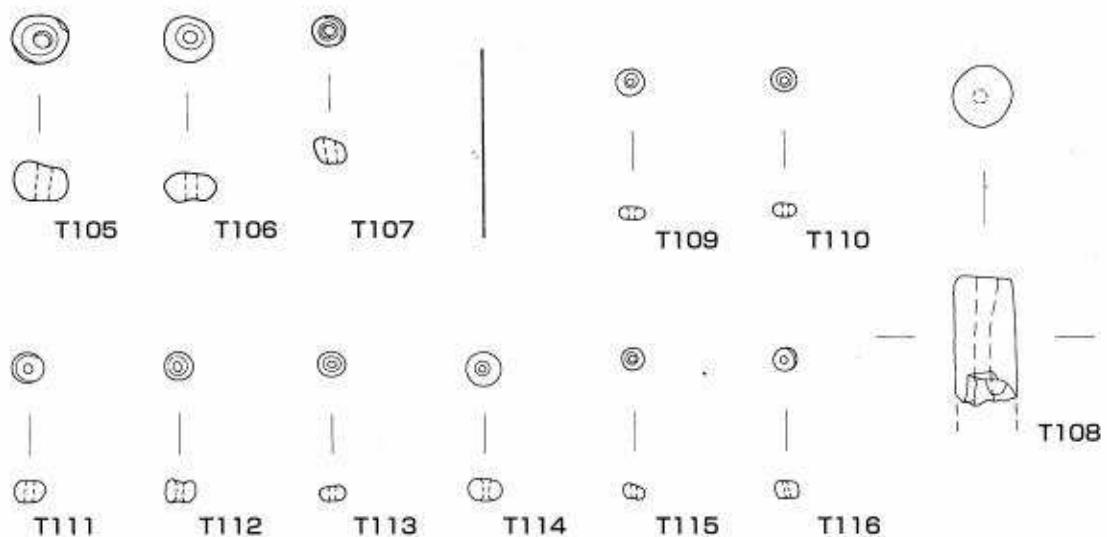
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
▣ T77	▣ T78	▣ T79	▣ T80	▣ T81	▣ T82	▣ T83	

◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
▣ T84	▣ T85	▣ T86	▣ T87	▣ T88	▣ T89	▣ T90	

◎	◎	◎	◎	●	◎	◎	◎
▣ T91	▣ T92	▣ T93	▣ T94	○ T95	□ T96	▣ T97	

◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
▣ T98	▣ T99	▣ T100	▣ T101	▣ T102	▣ T103	▣ T104	

第13図 出土遺物実測図（5） 玉類③



第14図 出土遺物実測図（6） 玉類④

表4 出土玉類法量表（2）

ガラス小玉以外

単位：mm B11号墳出土

単位：mm

No	種別	長	幅	厚	孔径
T1	勾玉	3.05	1.7	0.8	0.15/0.4
T2	管玉	2.05	0.8	0.8	0.1/0.2
T3	管玉	1.9	0.8	0.8	0.15/0.2
T4	管玉	1.65	0.6	0.6	0.15/0.2
T5	管玉	1.7	0.7	0.7	0.2
T6	管玉	2	0.7	0.7	0.2
T7	管玉	1.2	0.7	0.7	0.25

No	種別	長	幅	厚	孔径
T108	管玉	*1.75	0.8	0.8	0.3

表5 出土金属器法量表

単位：mm

報告No	遺物名	出土古墳	出土場所	全長	最大幅	最大厚	残存状況	木質
F 1	鉄鎌	B10号墳	主体主体部・木棺痕跡内	*8.90	1.00	0.25	両端欠損	
F 2	鉄鎌	B10号墳	主体主体部・木棺痕跡内	*10.10	0.70	0.20	茎部？欠損	遺存
F 3	鉄鎌	B10号墳	主体主体部・木棺痕跡内	*5.30	0.50	—		

*は残存する最大規模を示す。

第6章 まとめ

調査の対象とした範囲は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「西山C古墳群」と「西山B古墳群」で、延べ12基の古墳が存在した。

西山C古墳群では、2号墳として知られる古墳を1基調査した。墳丘の背後に周溝が遺存、底部からは須恵器杯が出土した。墳丘は後世の崩落によって半分以上を失い、埋葬主体も確認することはできなかった。

西山B古墳群では、11基の古墳を調査した。横穴式石室を埋葬主体に持つ4号墳のほかは、いずれも単体の箱式木棺を直葬する。尾根筋に直列で立地するが、墳丘盛り土の流失は顕著で遺存状態も悪い。ほとんどが墳丘の背後には周溝を有する。埋葬主体には土器枕など見られず、小口板の痕跡を検出できたものも1点のみであった。出土遺物は極端に少なく、土器のほかに2号墳・11号墳から玉類、10号墳から金属器が見られた。

また4号墳の横穴式石室は基底石の一部と礫床が遺存するのみで、墳丘・埋葬主体ともに大きく破壊を受けている。抜き取り穴などから小規模の形態と考えられる。

古墳の築造時期について

西山B古墳群10号墳からは、良好な状態の遺物が出土した。墓壙内にほぼ完形の甕が落ち込んでいたほか、墳頂部からは墳丘での祭祀に伴う土器群がまとまって見られた。これらの多くは5世紀末の特徴をもつが、甕は5世紀後半まで遡ると見られ、築造時期も5世紀末より古い可能性がある。

他の古墳では遺物が極端に少ないうえ、出土位置も墳丘の覆土や周濠埋土など、古墳との共伴関係に疑問が残る。あえて強引に前後関係を把握するならば、1・5号墳が5世紀末～6世紀初頭の遺物を出土して10号墳に次ぐ。2号墳から出土した遺物は新しい時期の遺物も含むことから、若干後出する6世紀初頭と考える。さらに6世紀前葉の遺物を有する6号墳が続く。8号墳の出土遺物も類似する特徴だが、形態などが若干新しいことから6世紀前葉でも新しく位置づけておきたい。以上の出土土器は、おおむね5世紀末～6世紀前半の特徴を有することから、今回調査した西山B古墳群の主要な造営時期も5世紀末～6世紀前半と考えておく。

なお最も新しいものは、横穴式石室を有する4号墳で、7世紀中葉の遺物が出土している。木棺直葬墳との間に、時間的な断絶が指摘できよう。

各古墳の特徴

最古の時期を示す10号墳は、他の木棺直葬古墳と異なって、盛土・周溝とともに確認できなかった。多くの古墳が後世の改変を受けていることから、10号墳もまた、本来の状況を失っている可能性は否定できない。しかし墳頂部出土の遺物や埋葬主体の遺存状況が良好なことから、明瞭な隆起を持つ墳丘や周溝を持たなかつたと考えておく。

これに次ぐ時期の古墳は、いずれも墳丘・周溝を有する。墳丘規模は、径10mを越すものが1号墳と9号墳で、わずか下回る2号墳がこれに次ぐ。続いて、8m～7m前後の6号墳・8号墳・7号墳が続き、11号墳が最小となる。なお周溝のみ検出した5号墳は、円弧から復元した規模を基にすればもっとも小規模な古墳となる。周溝は、半円弧をなす(1・2・6・5号墳)、直線に近い(7・8・9号墳)、明瞭に円弧で囲む(11号墳)の3つに大別できる。同じ形態の古墳は近接する位置にあり、尾根の高所から、半円弧をなすもの(標高65～70m前後)、直線に近いもの(標高57～62m前後)、明瞭に円弧で囲むもの(標高52m以下)の順で立地する。

以上の状況を整理すると、尾根の高所に築造時期の先行するものが築かれ、時間を経過すると同時に、低所へと徐々に占地を移動した様子がうかがえる。周溝の形態が半円弧から直線に近づき、最後には完全な円弧を形成する傾向は、古墳の質的な変化が表出したものと考えておきたい。古墳の内容にもわずかではあるが時間的な変遷が反映し、時間とともに墳丘や埋葬主体の規模が縮小傾向になる。

西山B 4号墳について

西山B 4号墳は、調査したなかで唯一の横穴式石室を埋葬主体とする古墳である。後世の擾乱等によって、大きく改変を受けていたが、遺存していた構造の特徴について触れておく。

石室では、基底石におけるほぼすべての掘り方内部から、多くの石材を検出した点が上げられる。掘り方の底面から、裏面（墓壙側）にかけて配置され、基底石の基部を後ろから包み込むように設けられていた様子がわかる。これらの石材は、奥・側壁の安定を得るために用いられたと考えられるが、人頭ほどの大きい石材が使われている点も特徴的である。

墳丘は、急斜面に接して構築されているため、盛り土は失われ、丘陵を整形した基底部分だけが遺存する。斜面の上部にあたる左側壁の西側で、直線に配置された石列を1条検出した。検出した石列は1段で、丘陵を溝状に穿った掘り方内に配置している。丘陵側のみに遺存することから、墳丘を構築する際の土留めの可能性が高いが、反対側の有無は明らかにしがたく、設置された当初の全容を把握することができない以上、性格の追及には限界がある。

八鹿町では墳丘に列石を持つ古墳が多く知られているが、多くは谷あいの緩斜面に造られていることから、物理的な要因だけではなく、祭祀的・観念的な視点から石室を保護する目的で築かれたと考えられている。西山B 4号墳は急斜面に立地し、地形的に土留が必要な条件を満たしていることから、その性格を考える上で注目される。

周辺古墳群との関連

浅間周辺の古墳群における動向について、箱式石棺や木棺を直葬する古い時期の古墳が尾根上に築かれた後、横穴式石室の導入に伴って緩斜面へ造墓域を移動する点が指摘されている。

西山C古墳群の立地する尾根の北東緩斜面には、横穴式石室を持つ西山A古墳群が存在する。近接する位置にあるうえ同じ尾根上に展開することから、一定の関係を想定しうるが、今回の調査では直接的な関連を裏付ける証左は得られなかった。古墳群の全容がある程度明らかになることで、周辺の古墳群との関連も含めた具体的な状況が明らかになるであろう。今後の調査例増加を待ちたい。

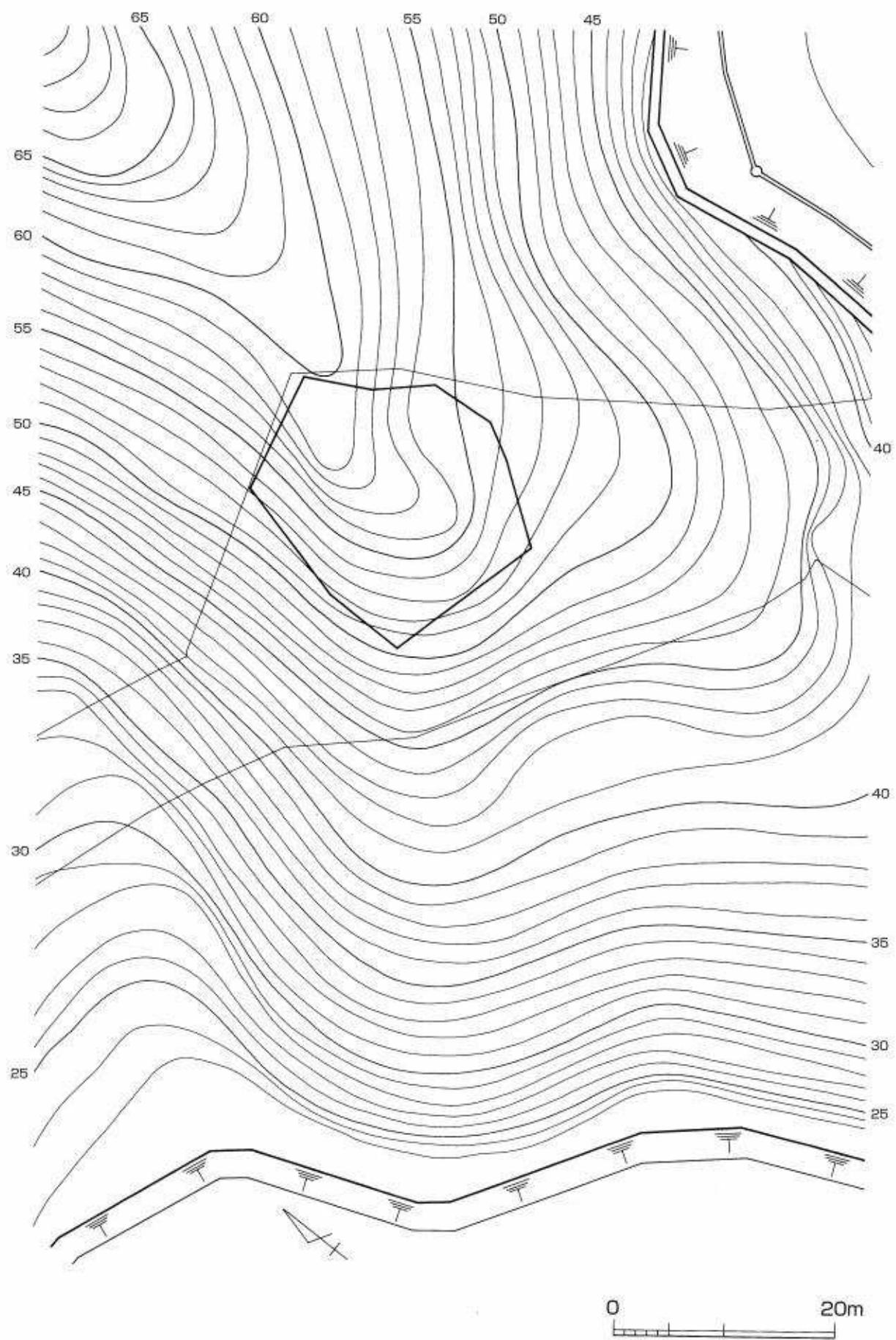
また西山B古墳群では、尾根筋に木棺直葬の古墳が直列し、尾根筋を外れた斜面に横穴式石室を検出した。ここでも埋葬主体の形式によって立地の変化が見られるが、両者には時間的な隔たりがみられ、直接の関連を指摘することは困難である。むしろ、調査した古墳群の周辺に空白をうめる時期の古墳が展開する可能性を考えておきたい。

遺構・遺物ともに遺存状態がよくなかったため、各古墳の前後関係などを十分検討できたとはいがたい。ただし、副葬品の出土状況を見る限り、後世の改変等によって亡失しただけでなく、本来から寡少であった可能性も否定できない。

調査した埋葬主体の構造が比較的簡単であることや副葬品が寡少である点が、被葬者の保持していた立場を暗示しているよう。

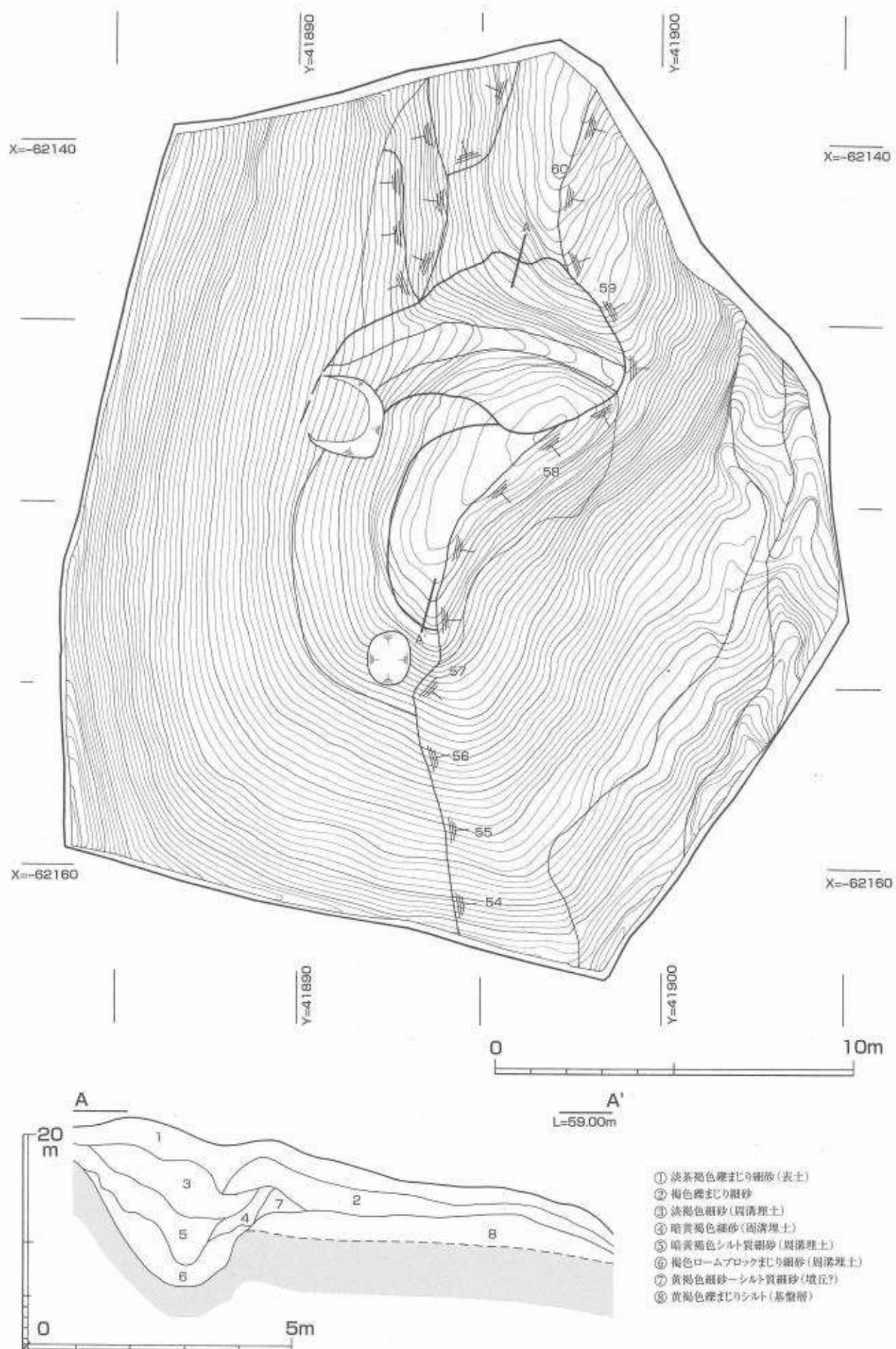
図 版

図版 1

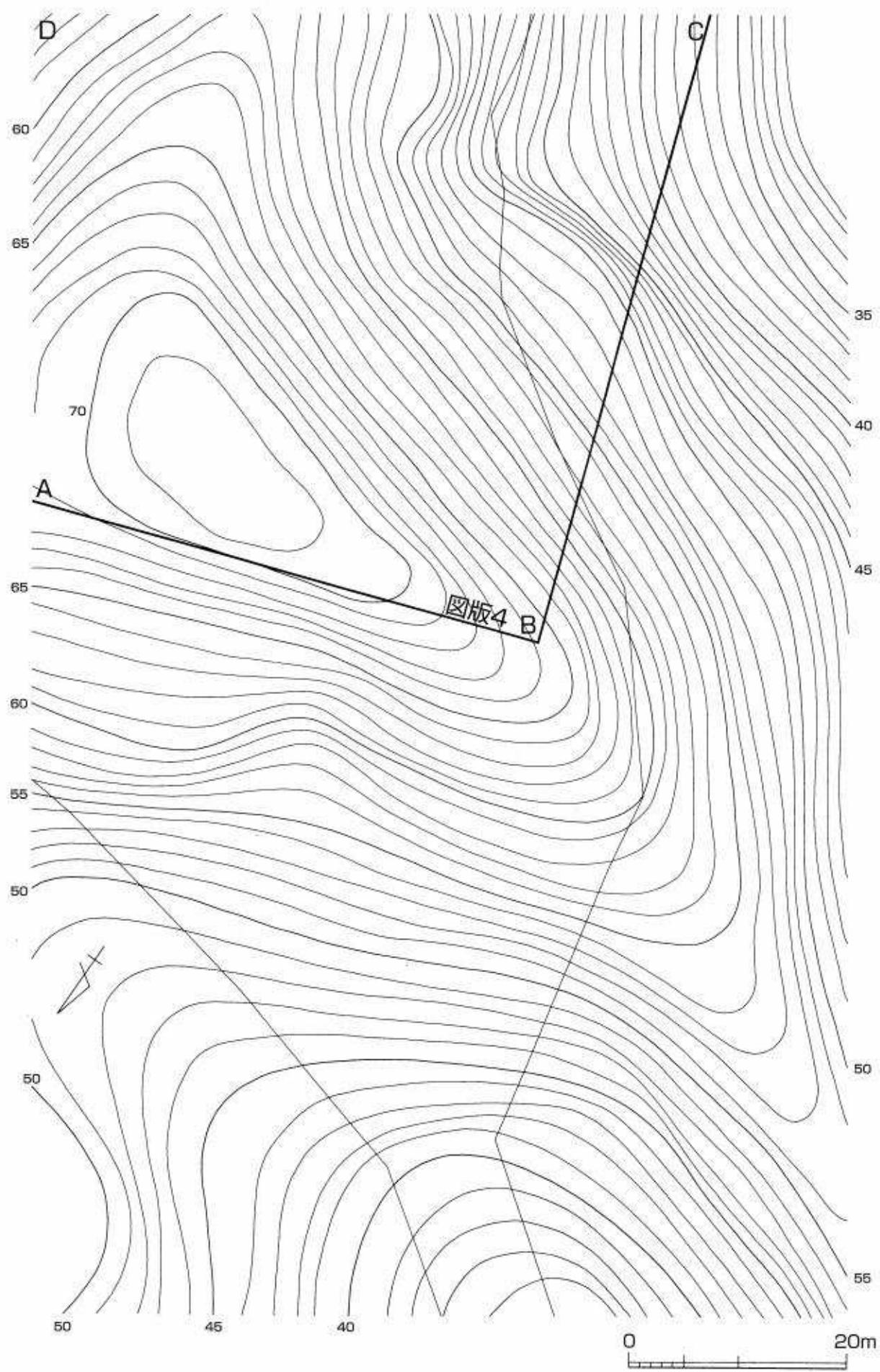


調査前地形図 西山C 2号墳

図版2

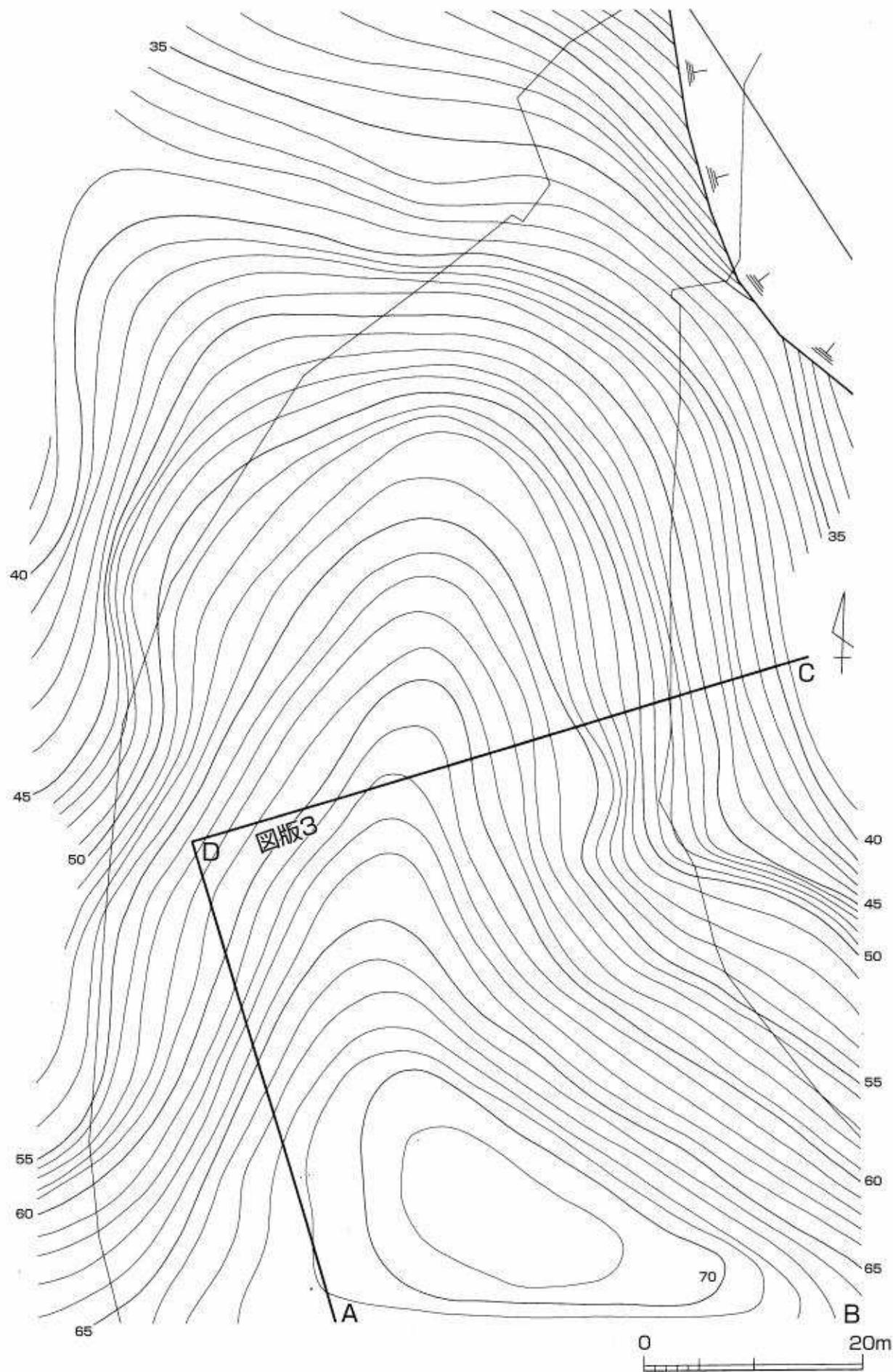


調査区平面図・周溝堆積状況図 西山C 2号墳

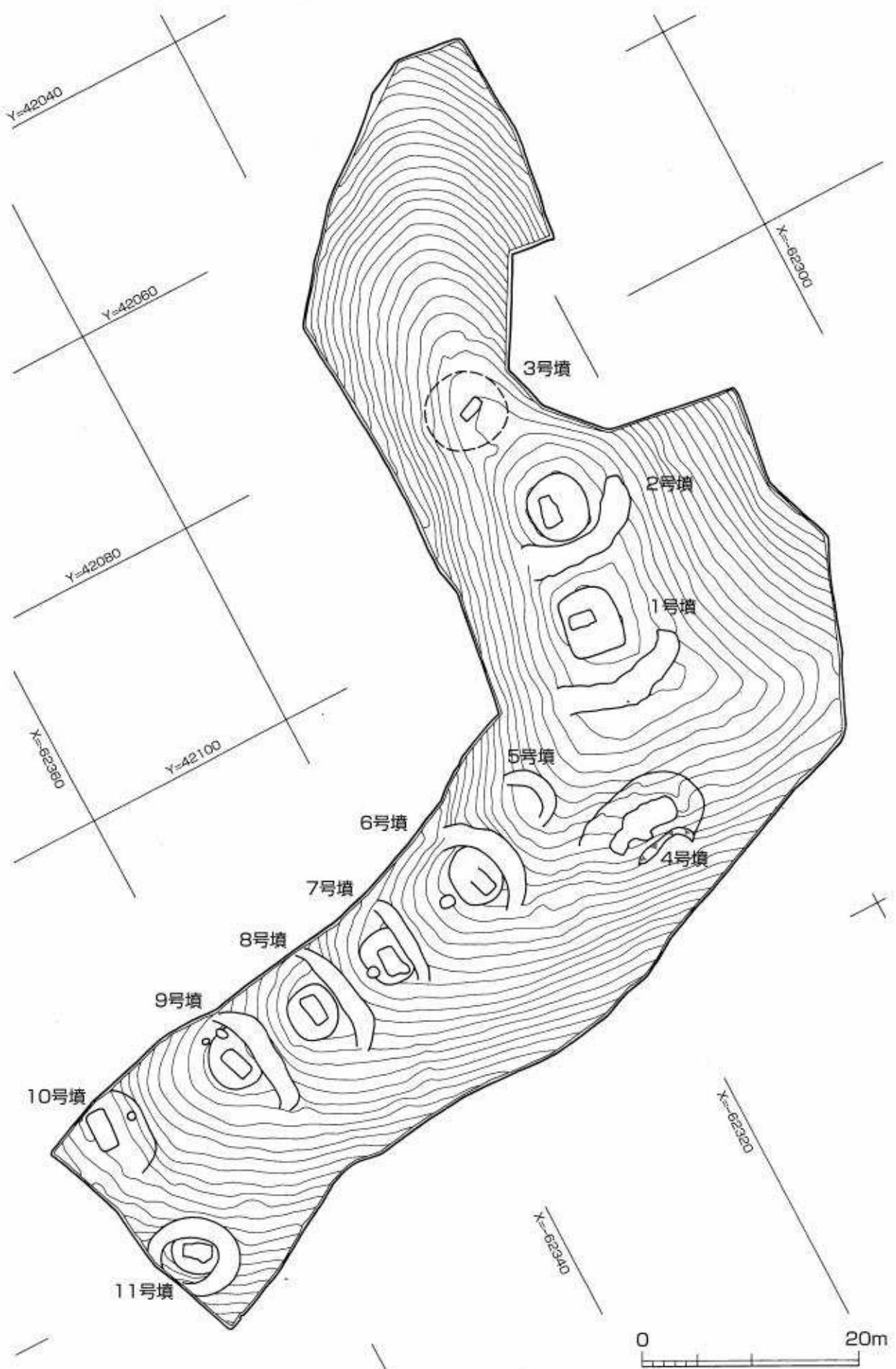


調査前地形図 西山B古墳群（1～3号墳付近）

図版 4

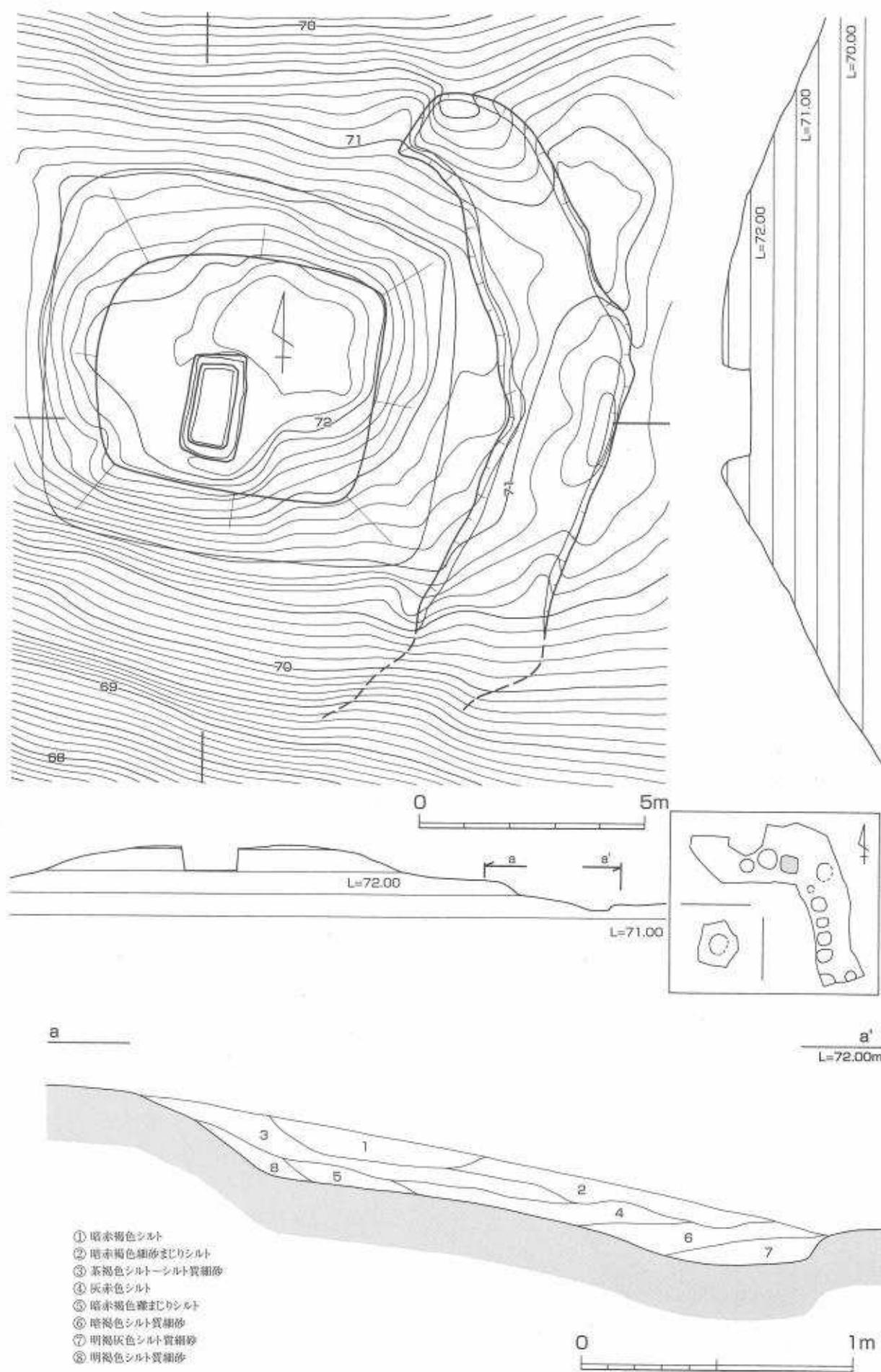


調査前地形図 西山B古墳群(4~11号墳付近)

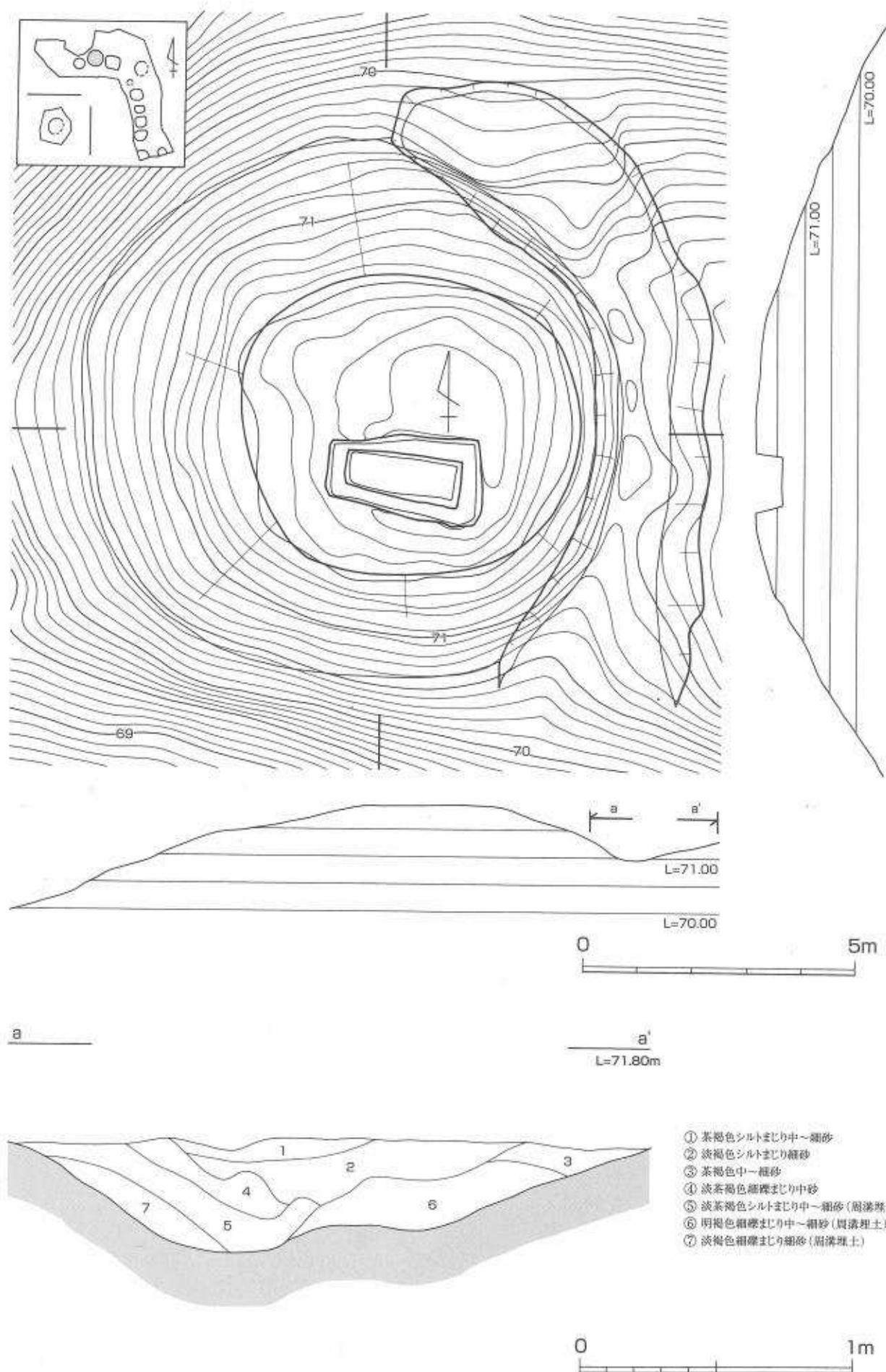


調査区平面図 西山B古墳群

図版 6

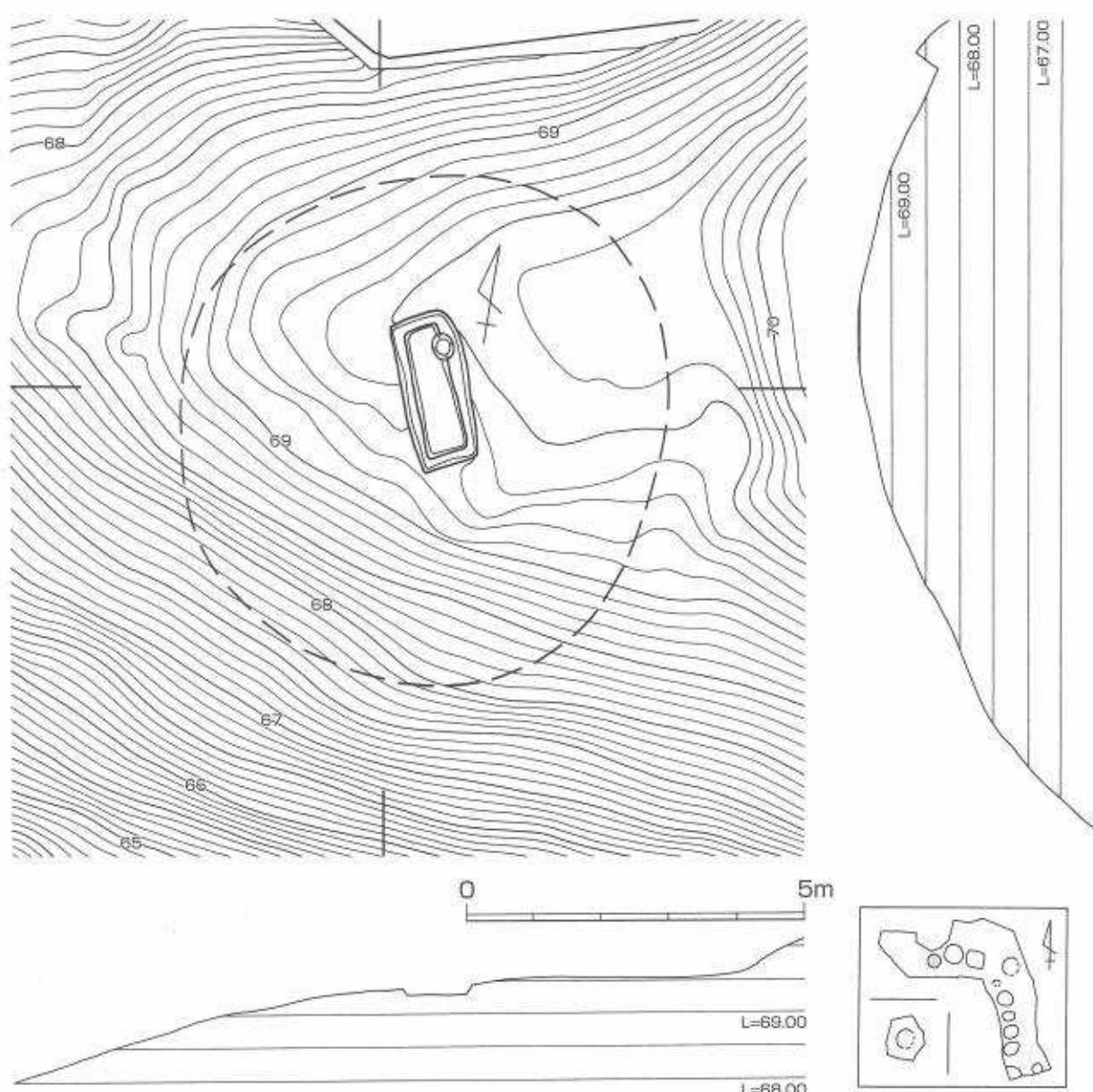


墳丘測量図・周溝堆積状況図 西山B 1号墳

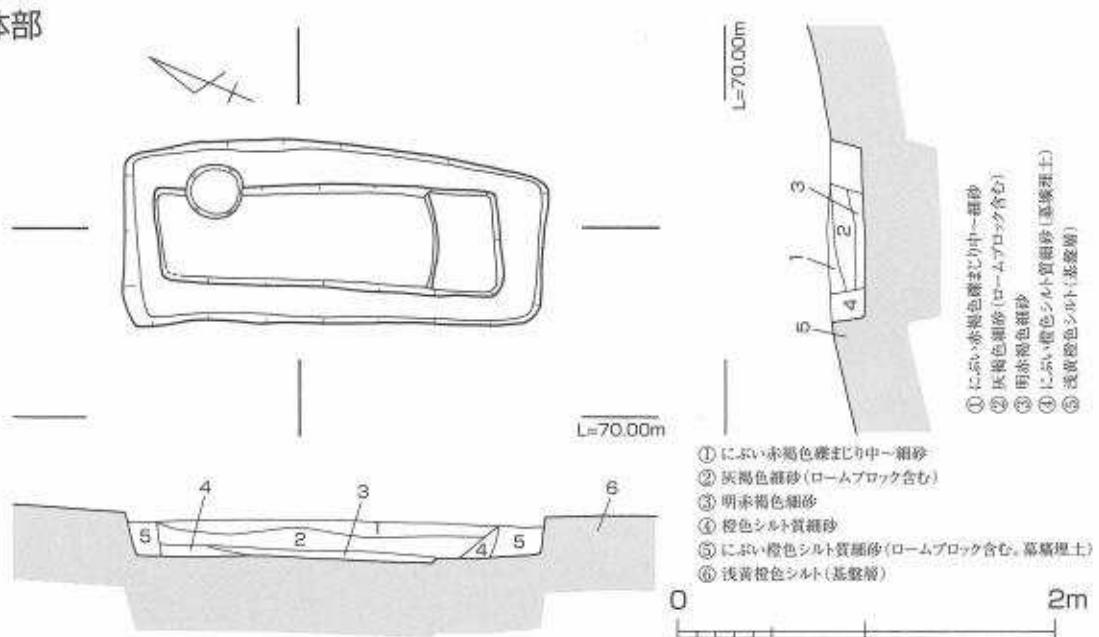


墳丘測量図・周溝堆積状況図 西山B 2号墳

図版 8

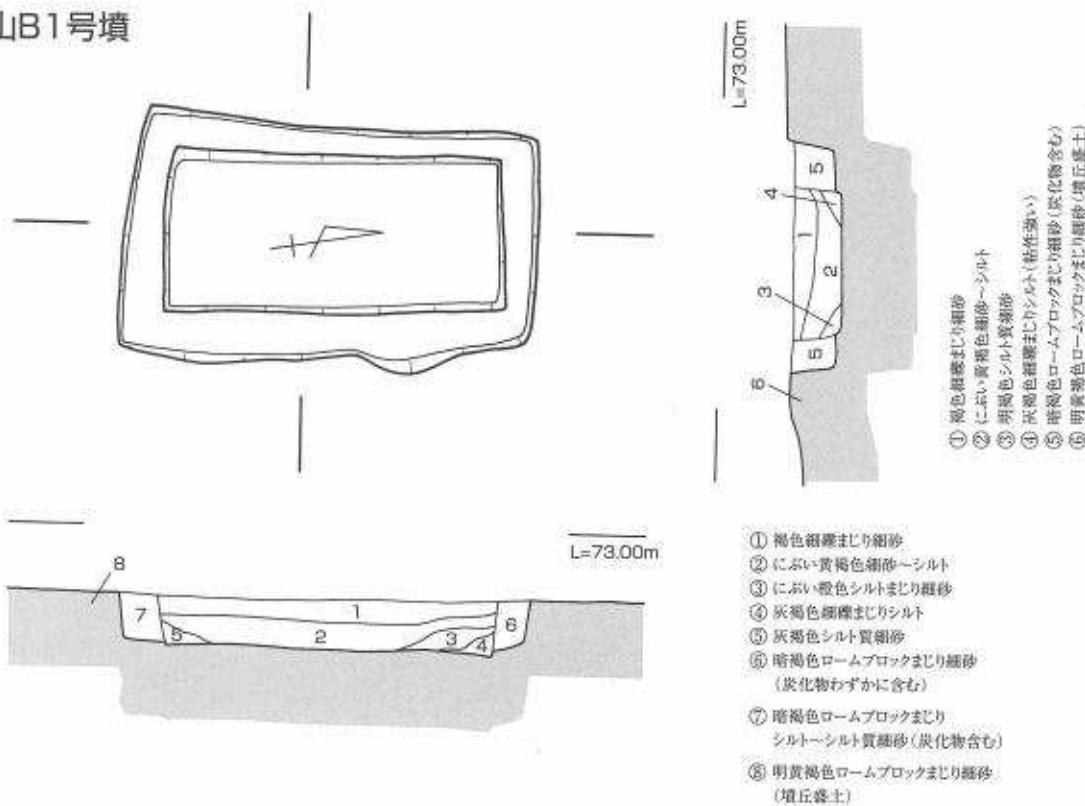


主体部

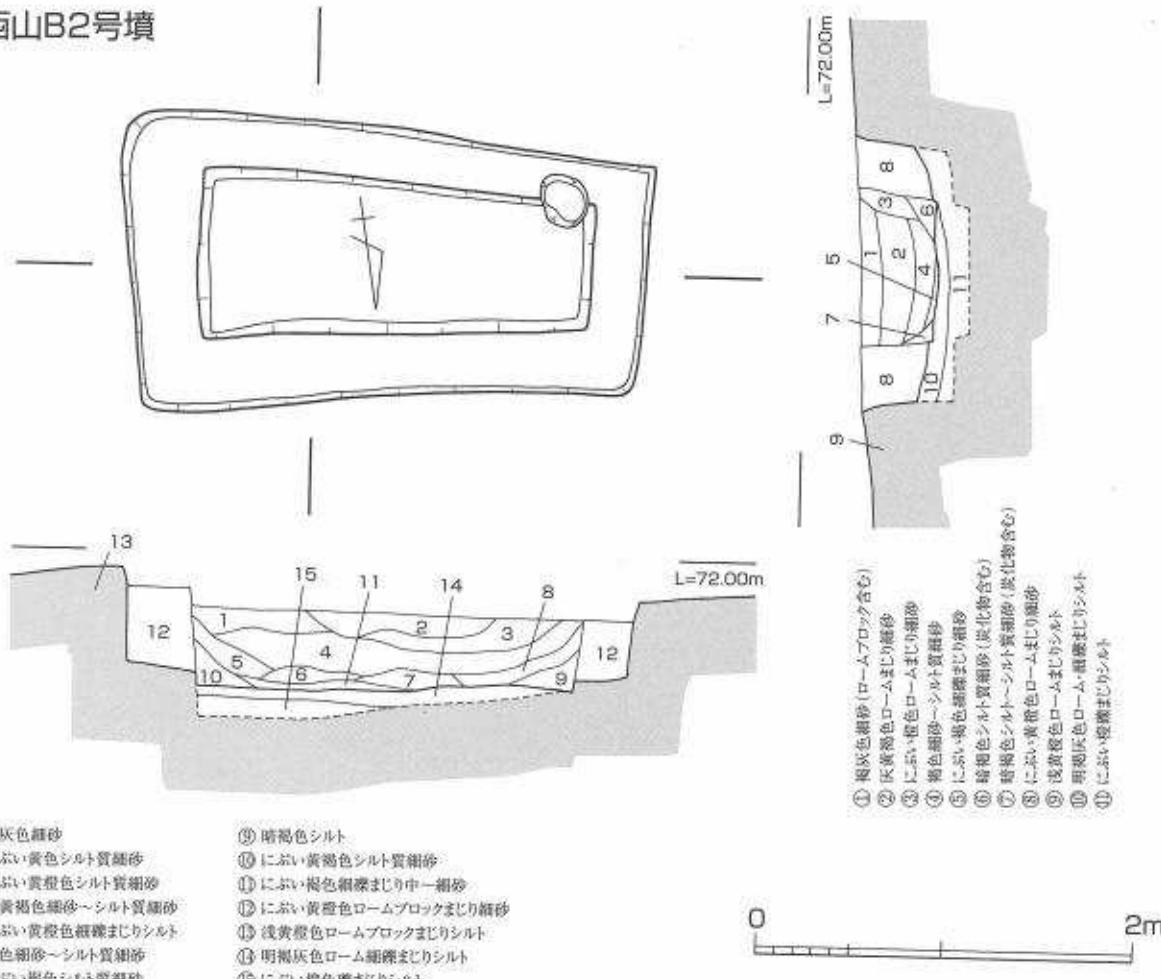


墳丘測量図・主体部平・断面図 西山B 3号墳

西山B1号墳

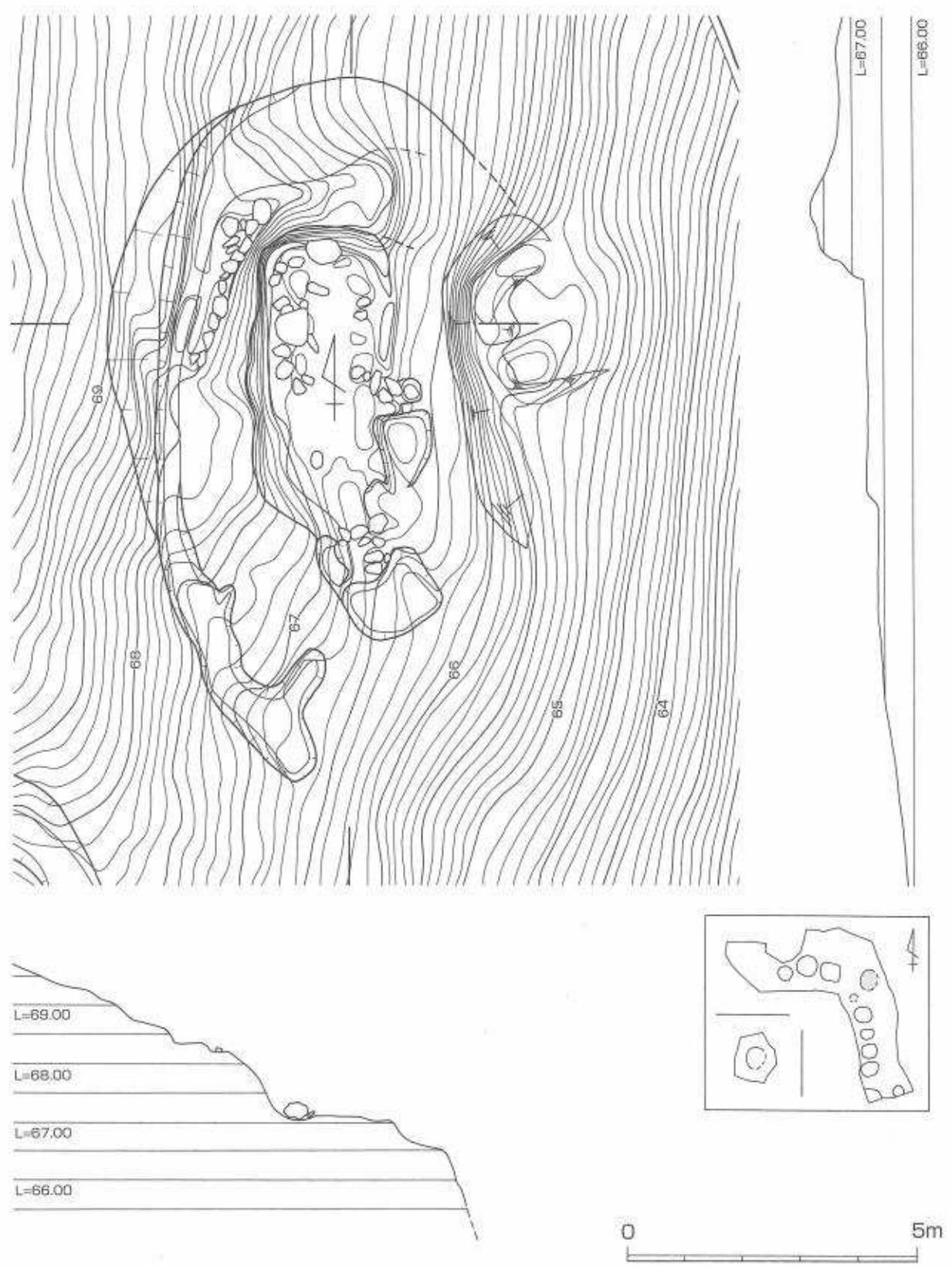


西山B2号墳

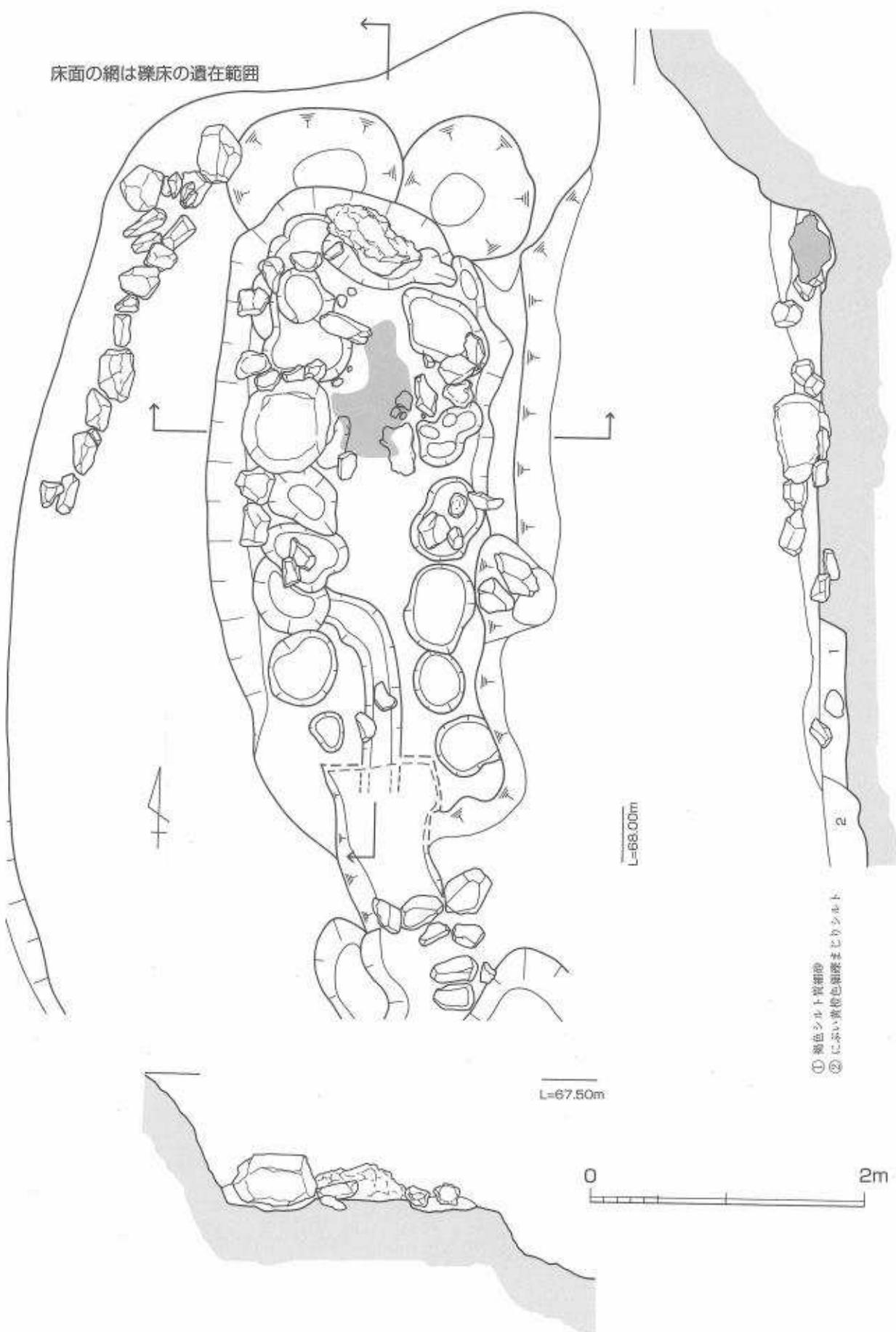


主体部平・断面図 西山B1号墳・2号墳

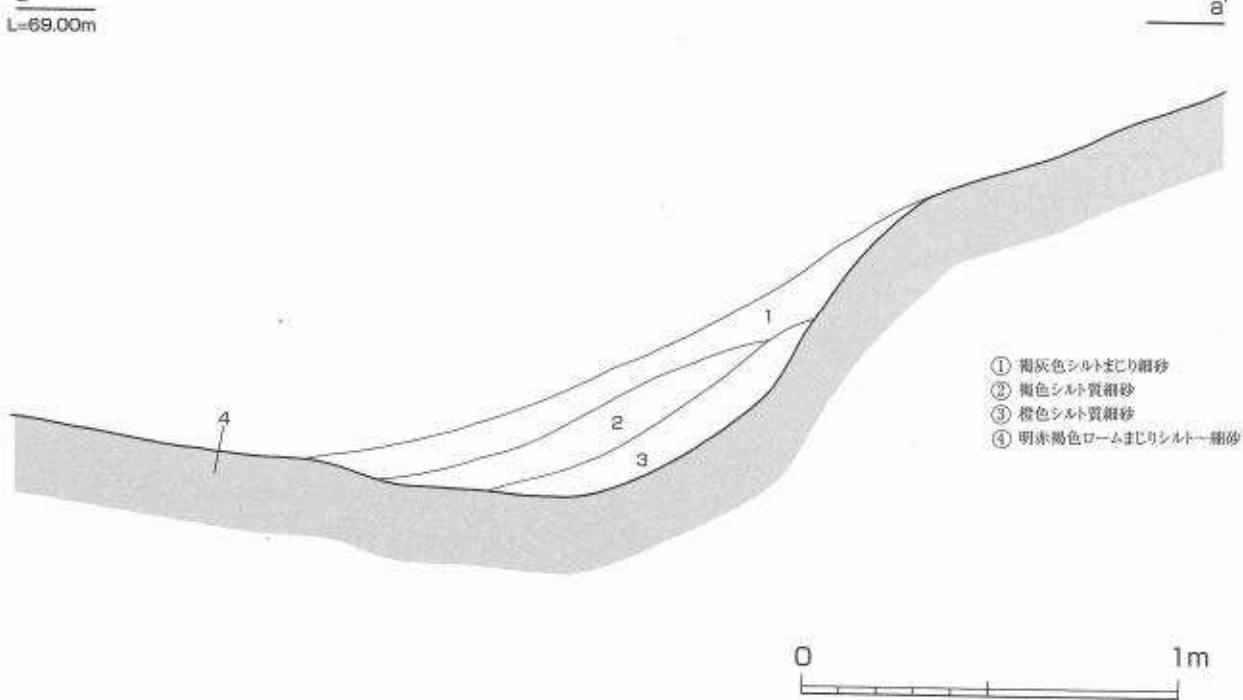
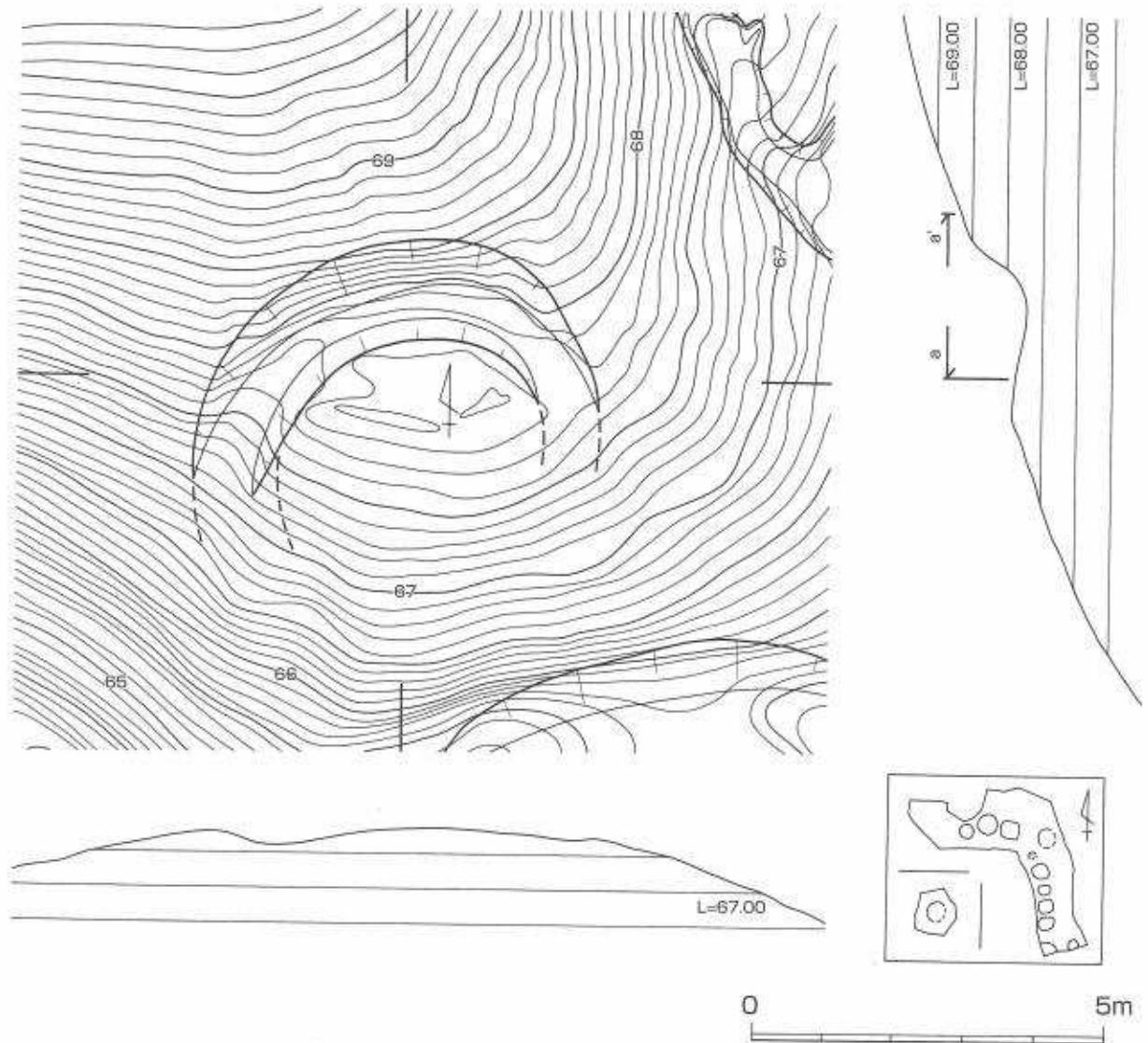
図版10



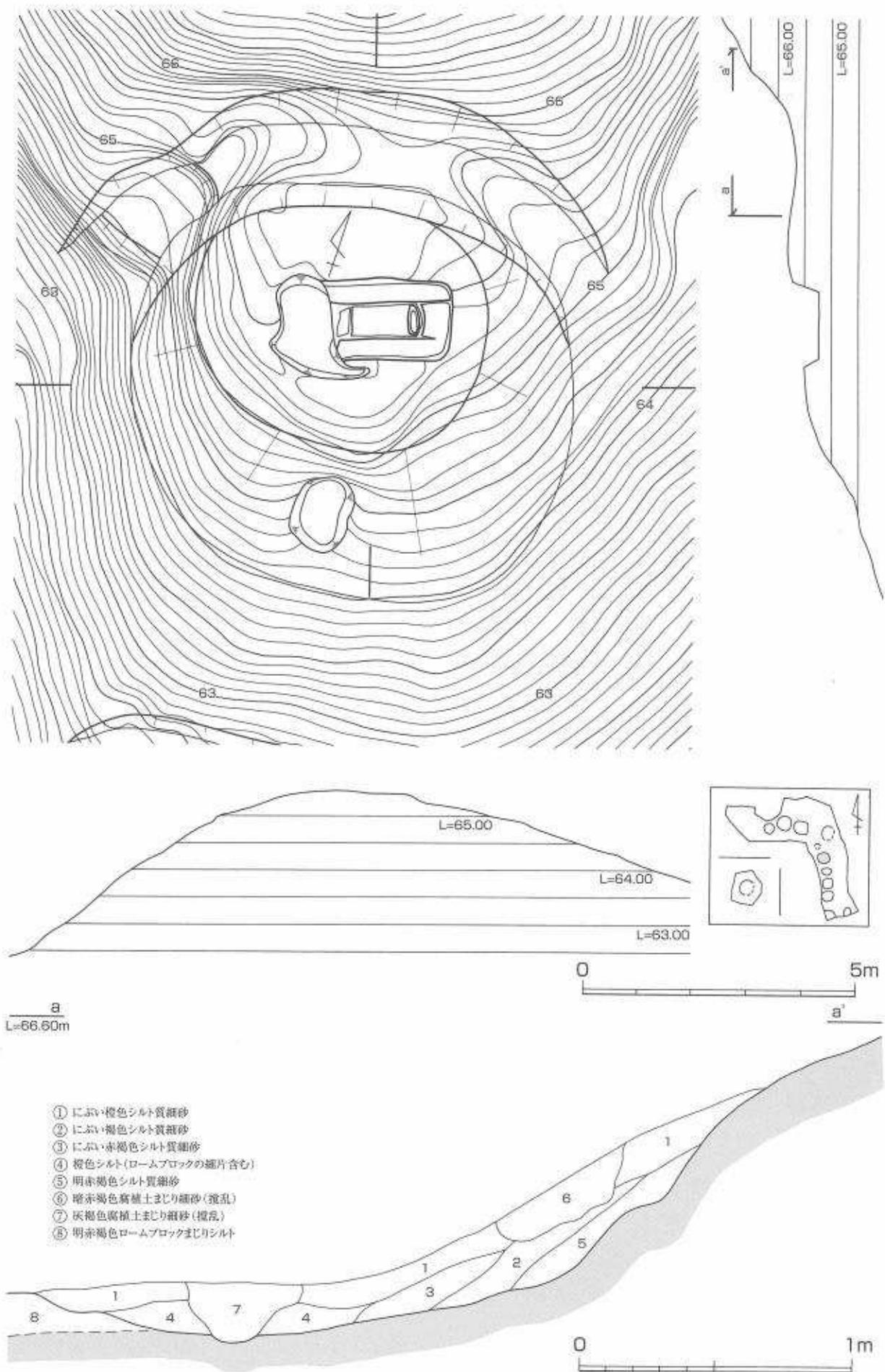
墳丘測量図 西山B 4号墳



図版12

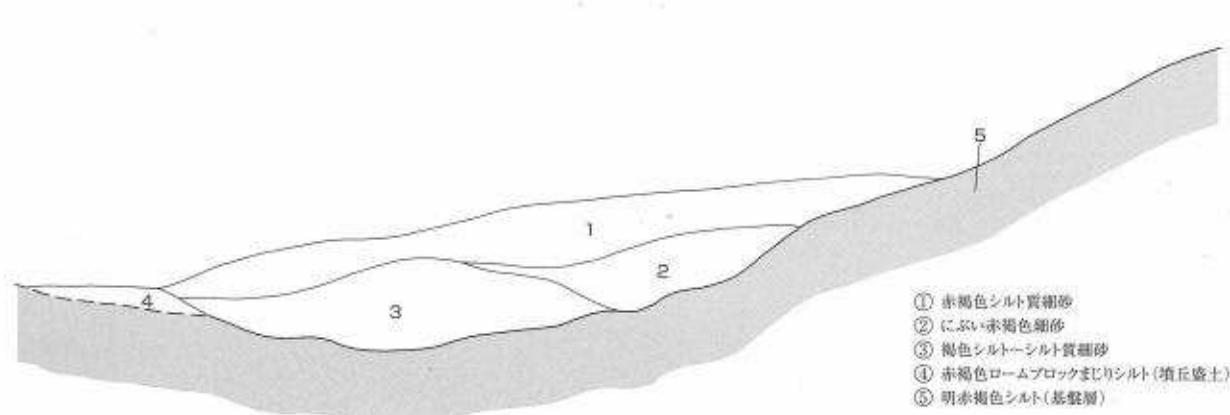


地形測量図・周溝堆積状況図 西山B 5号墳

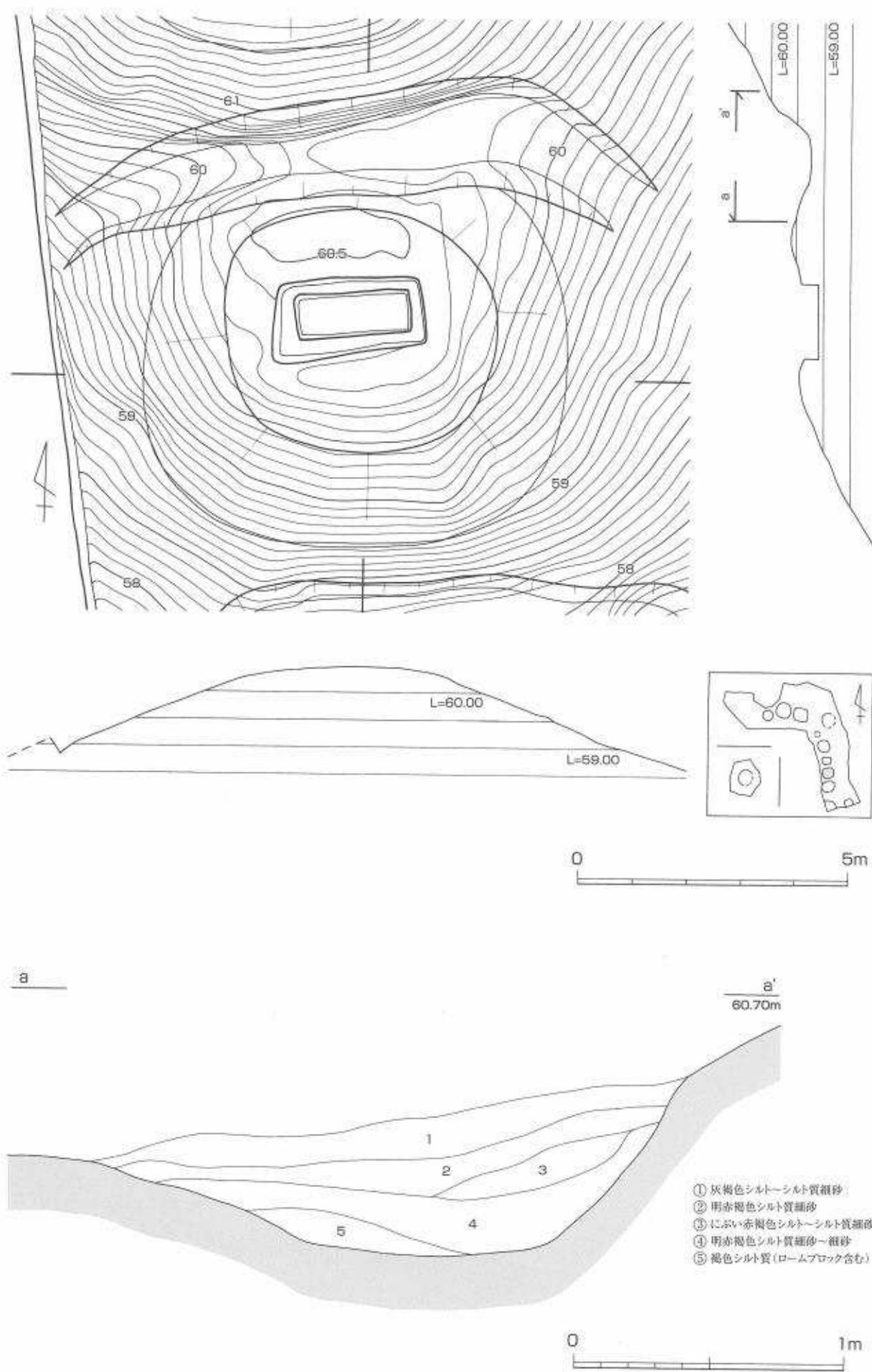


填丘測量図・周溝堆積状況図 西山B 6号墳

図版14

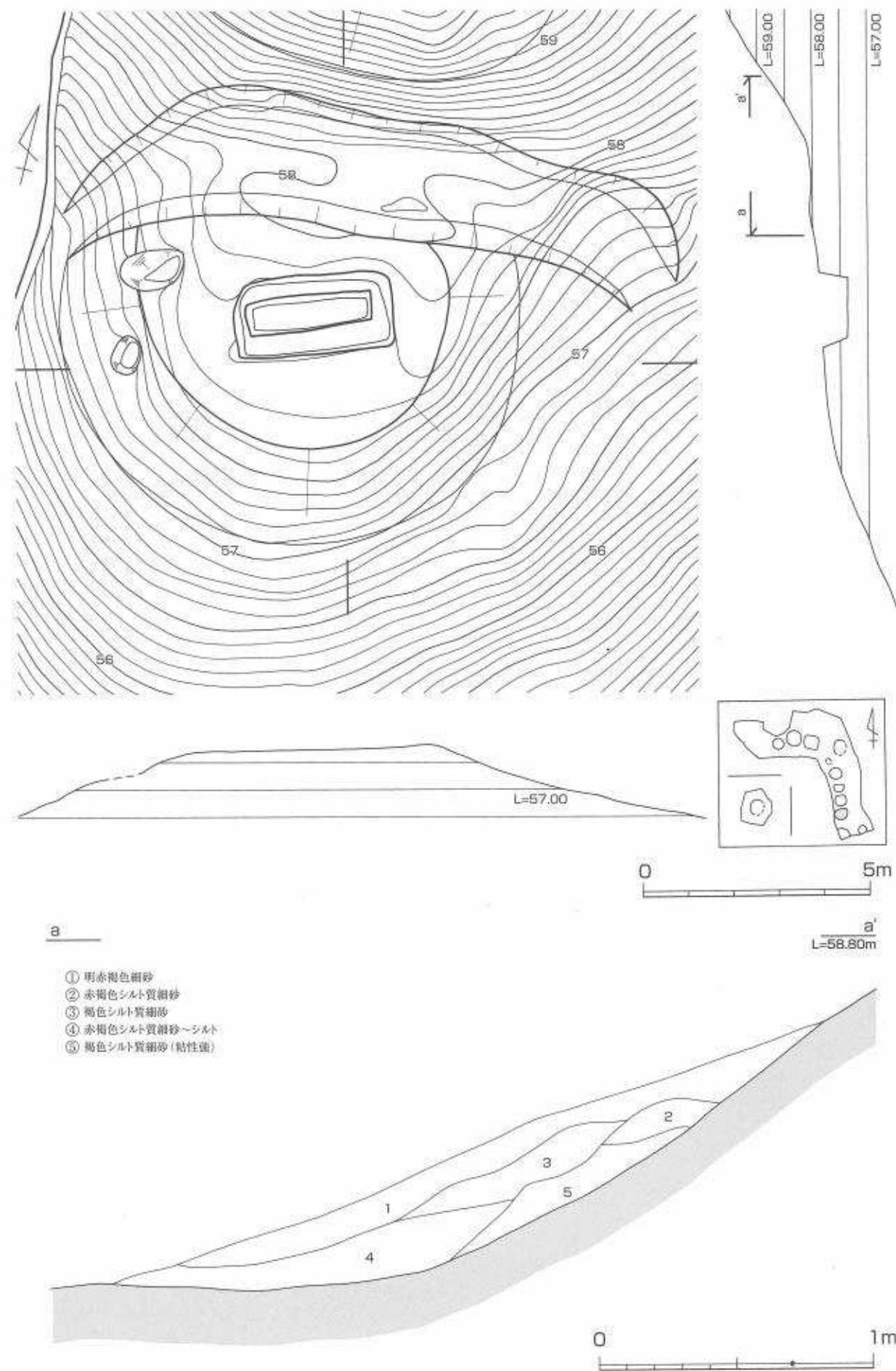


埴丘測量図・周溝堆積状況図 西山B 7号墳

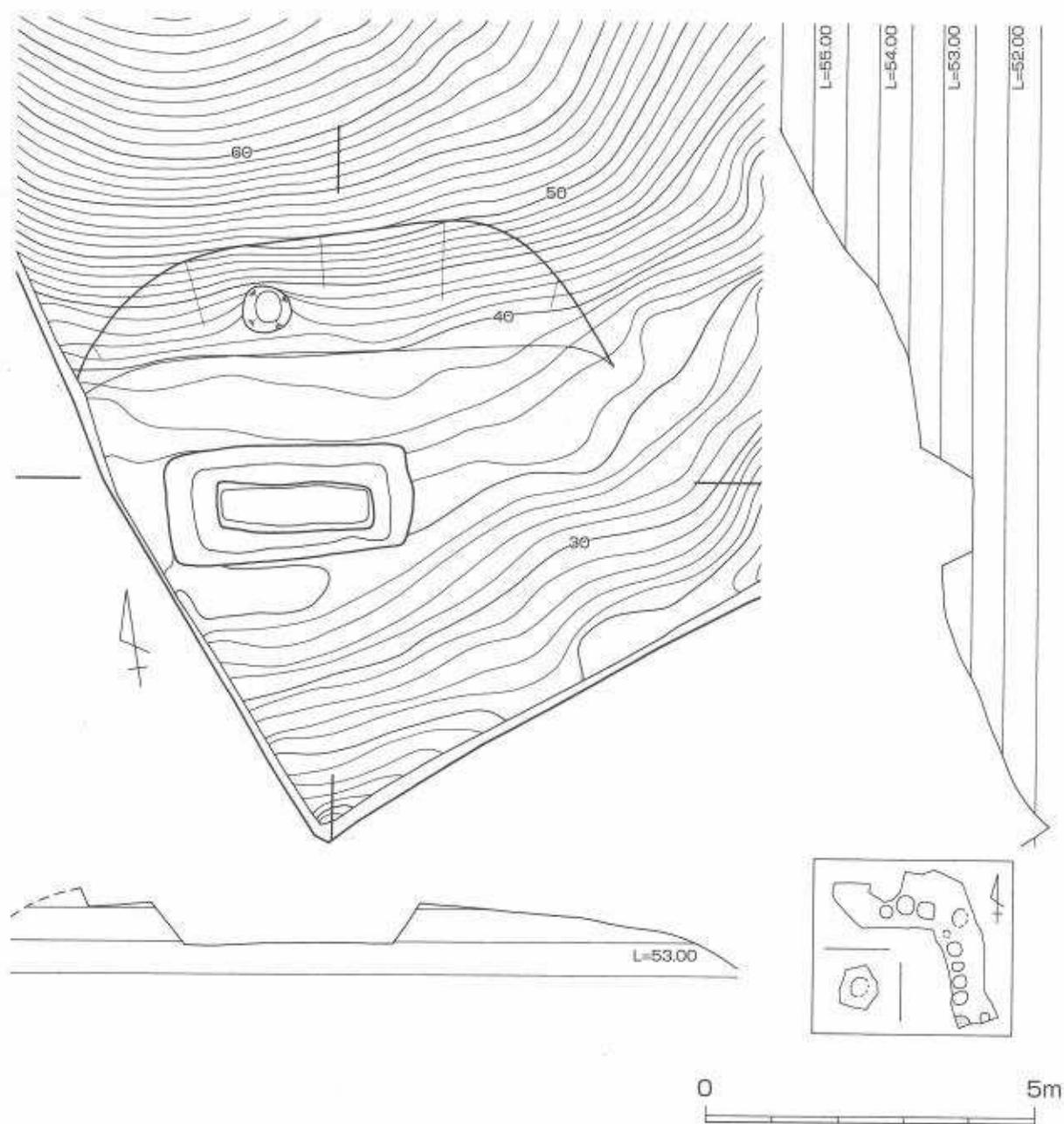


墳丘測量図・周溝堆積状況図 西山B 8号墳

図版16

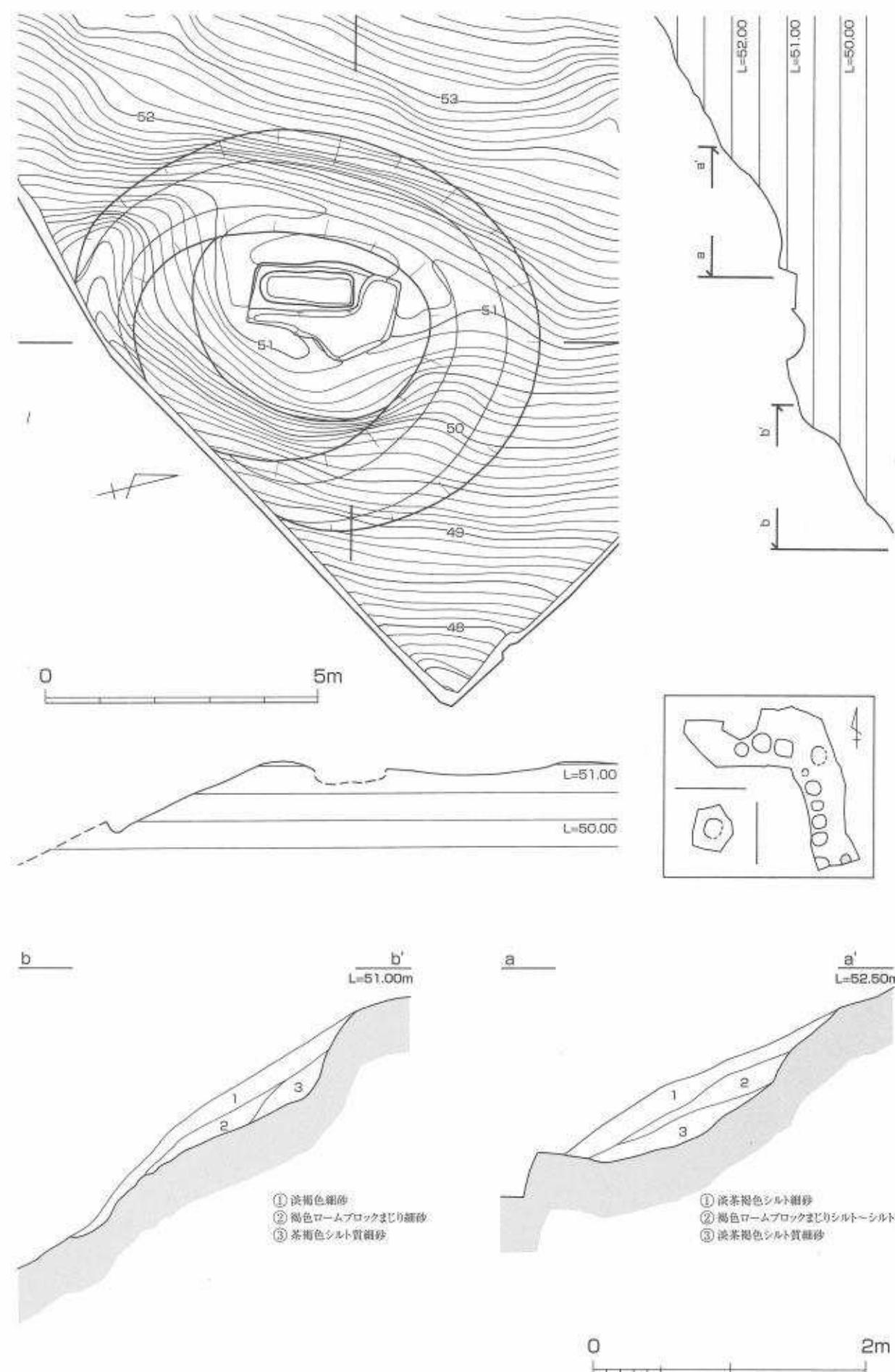


填丘測量図・周溝堆積状況図 西山B 9号墳



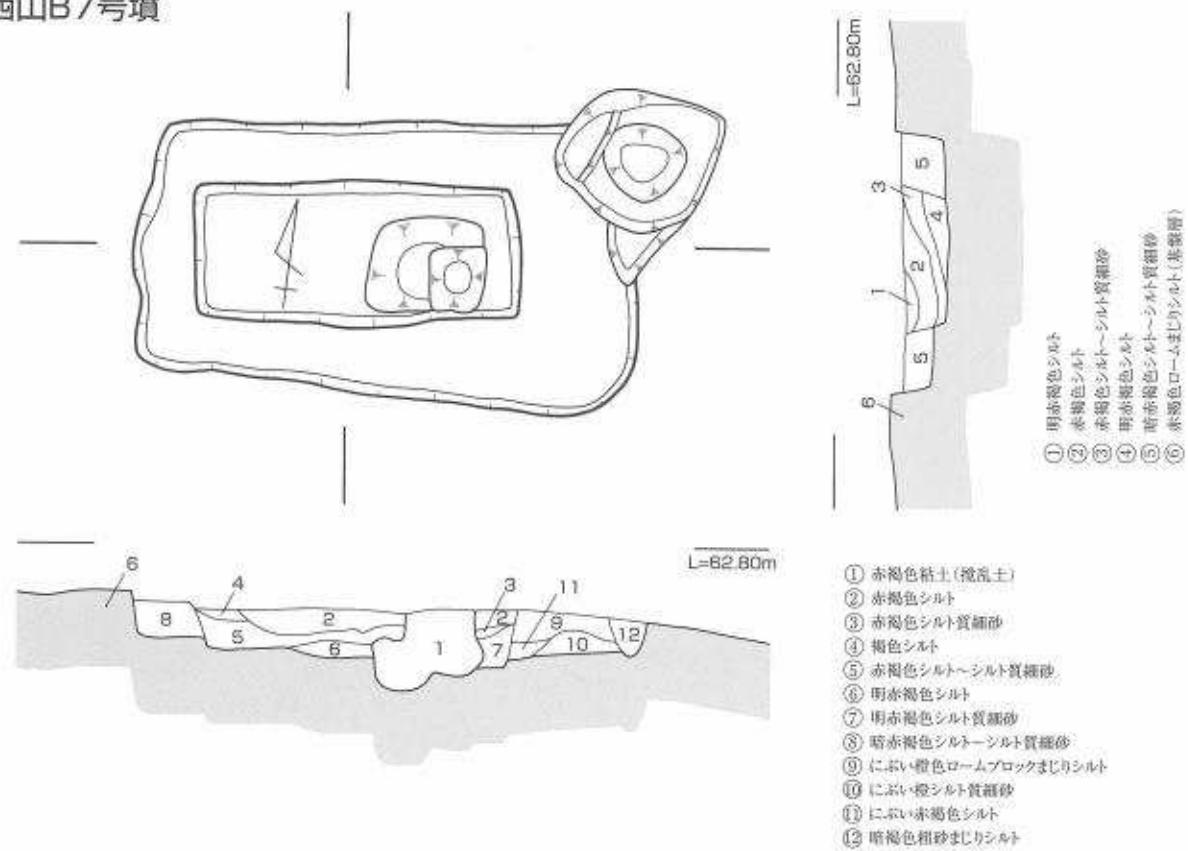
墳丘測量図 西山B 10号墳

図版18

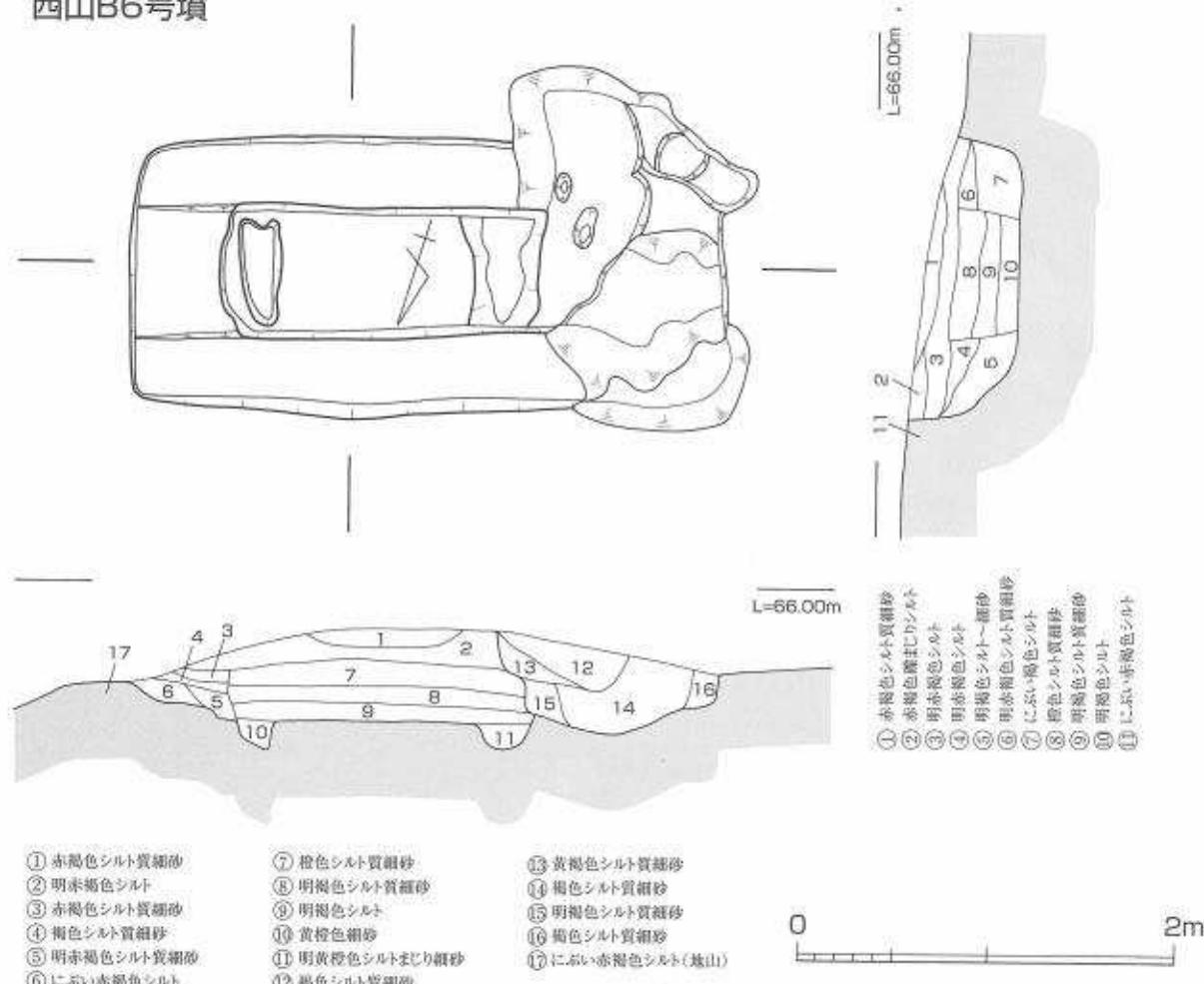


墳丘測量図・周溝堆積状況図 西山B11号墳

西山B7号墳



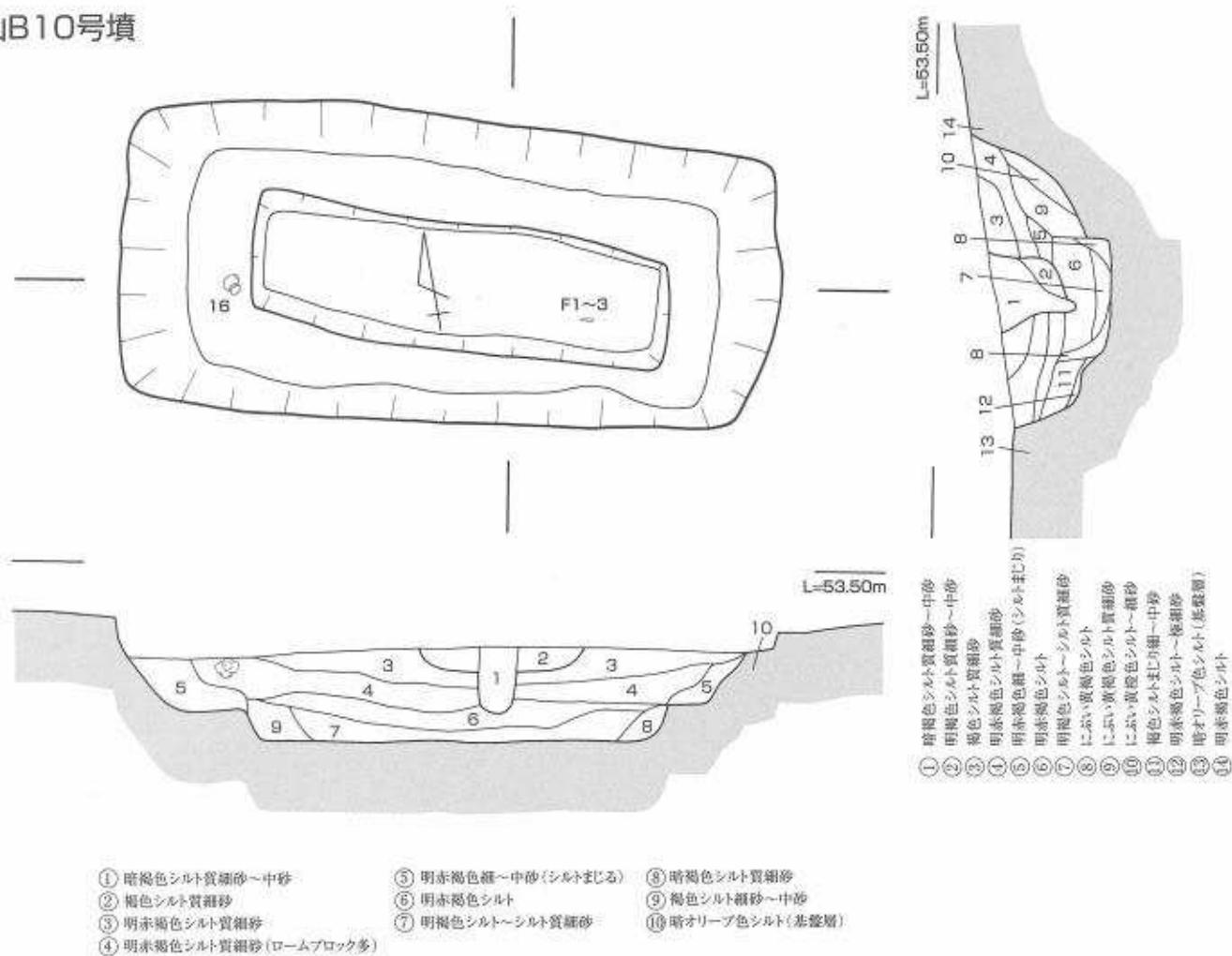
西山B6号墳



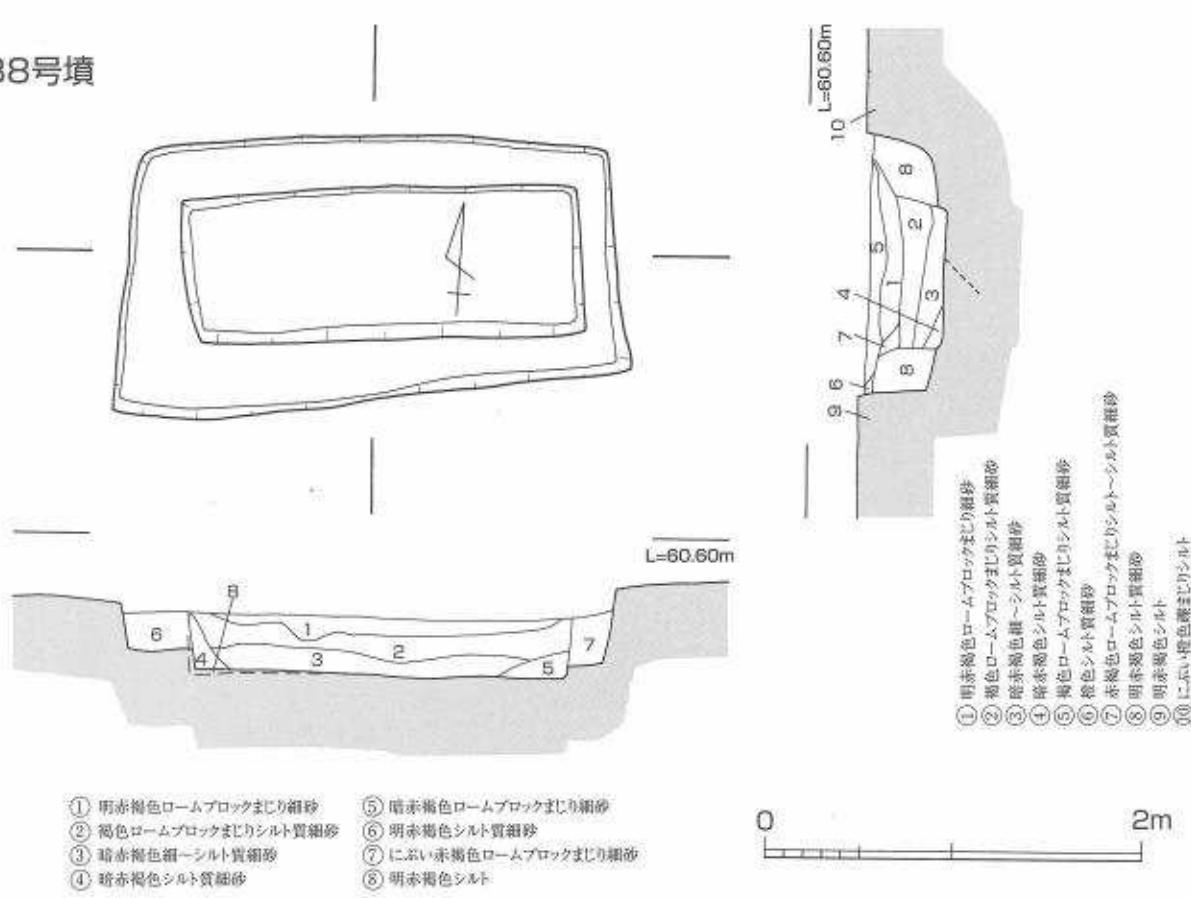
主体部平・断面図 西山B6号墳・7号墳

図版20

西山B10号墳

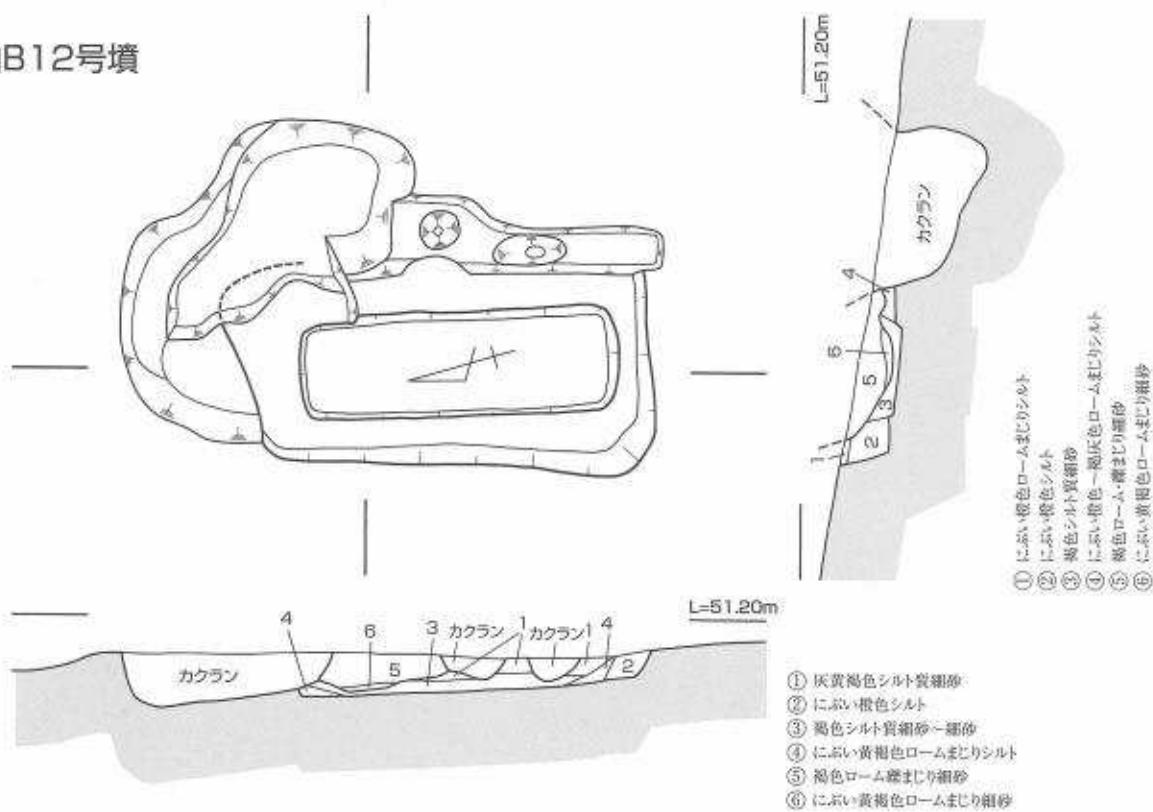


西山B8号墳

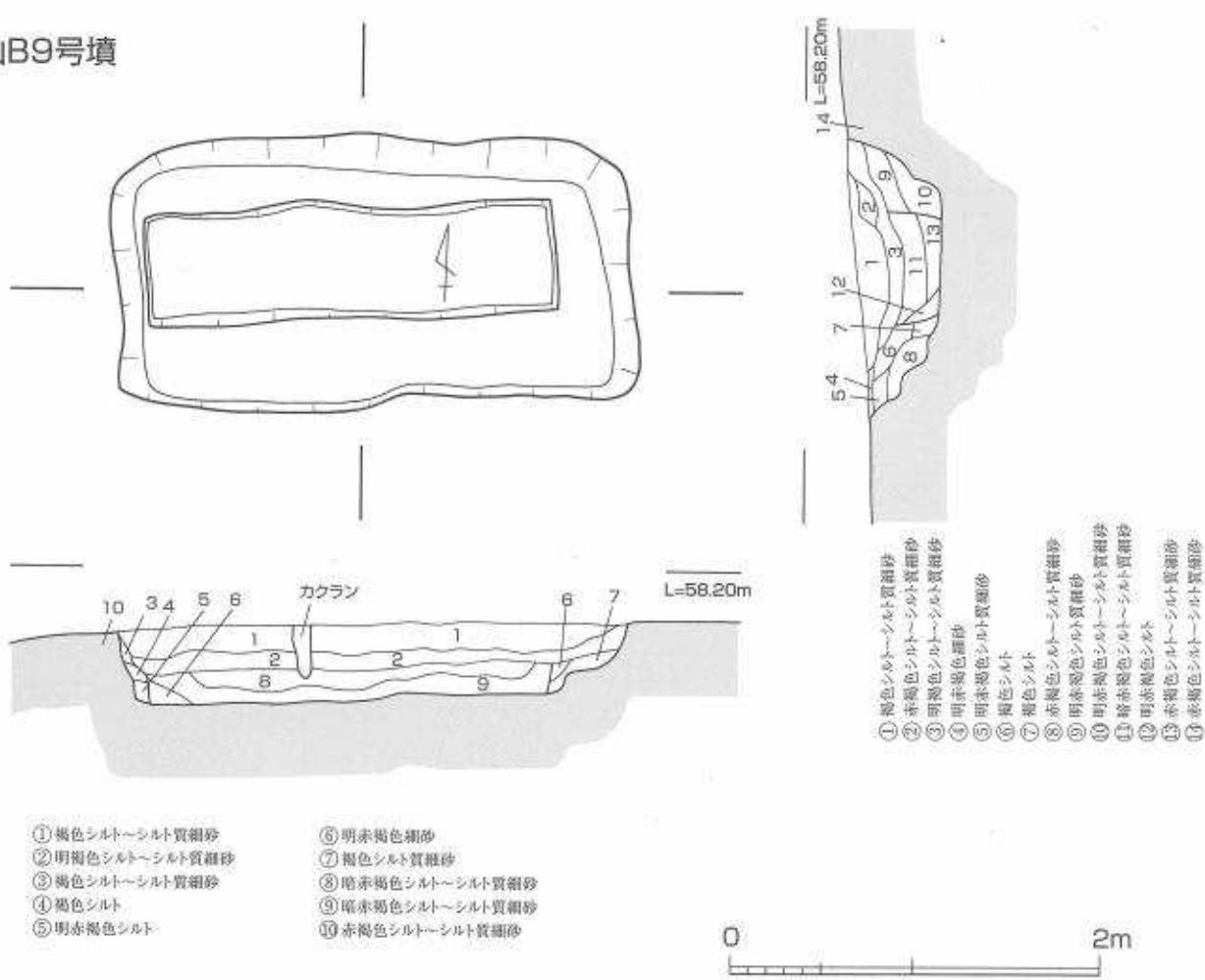


主体部平・断面図 西山B10号墳・8号墳

西山B12号墳

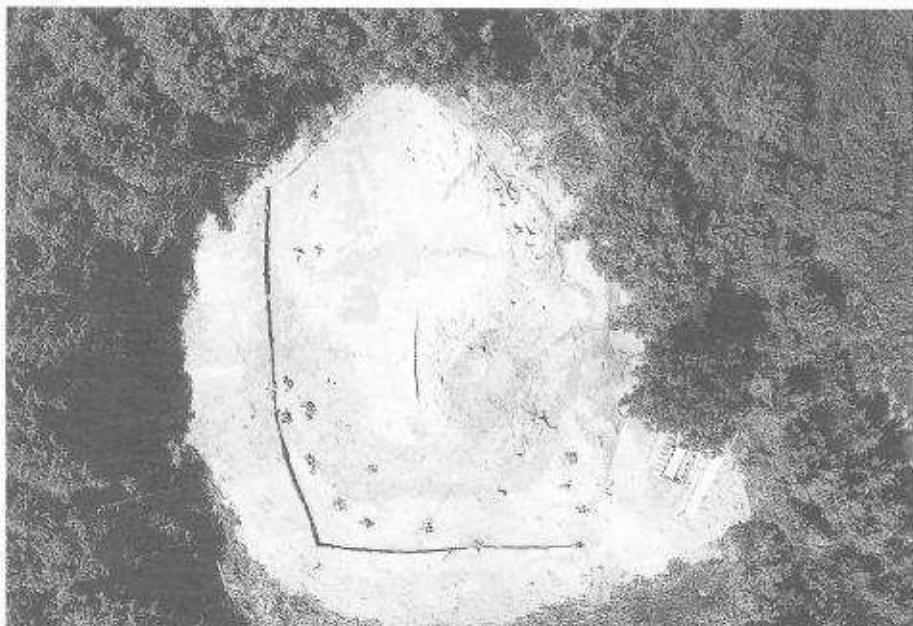


西山B9号墳

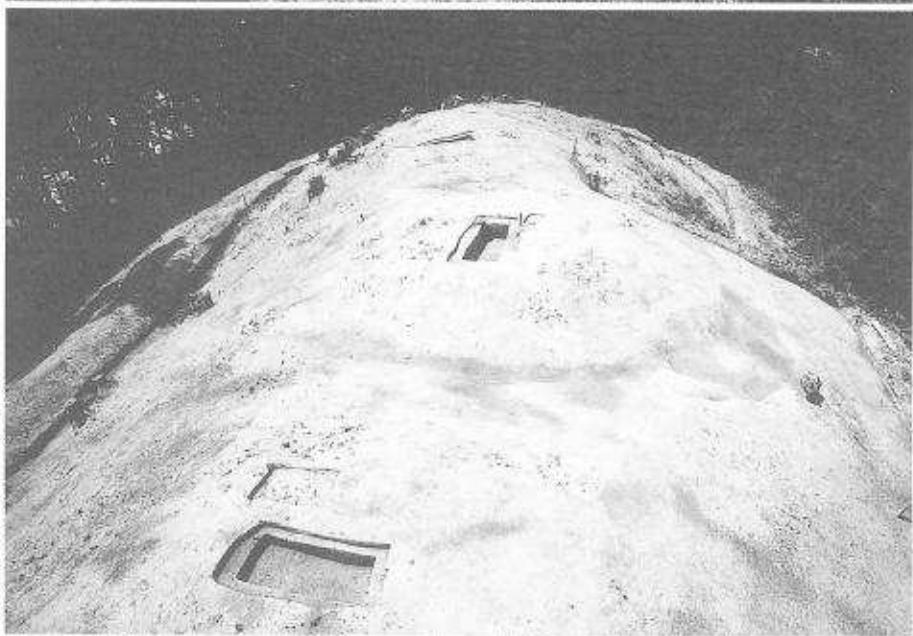


主体部平・断面図 西山B11号墳・9号墳

写真図版



西山C古墳群
2号墳
(上空から)



西山B古墳群
1~3号墳
(東から)



西山B古墳群
4~11号墳
(北から)

写真図版 2

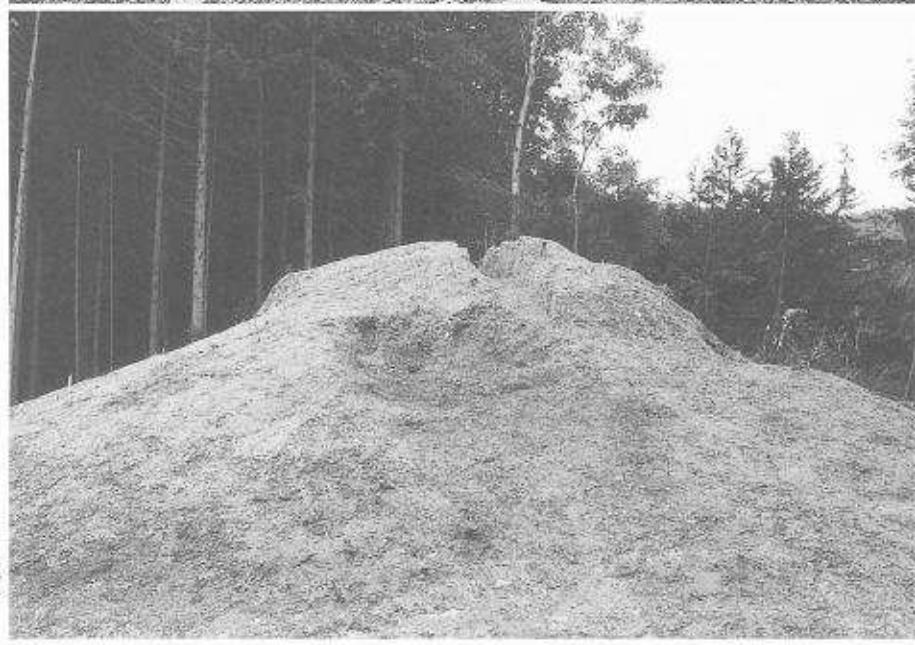
調査前全景
西山C 2号墳
(南から)



人力掘削作業
西山C 2号墳
(南から)



墳丘全景
西山C 2号墳
(南から)





墳丘全景
西山C 2号墳
(南東から)



墳丘・周溝
西山C 2号墳
(北から)



周溝
西山C 2号墳
(西から)

写真図版 4

調査前遠景
西山B古墳群
(西から)



調査前全景
西山B 1号墳
(西から)

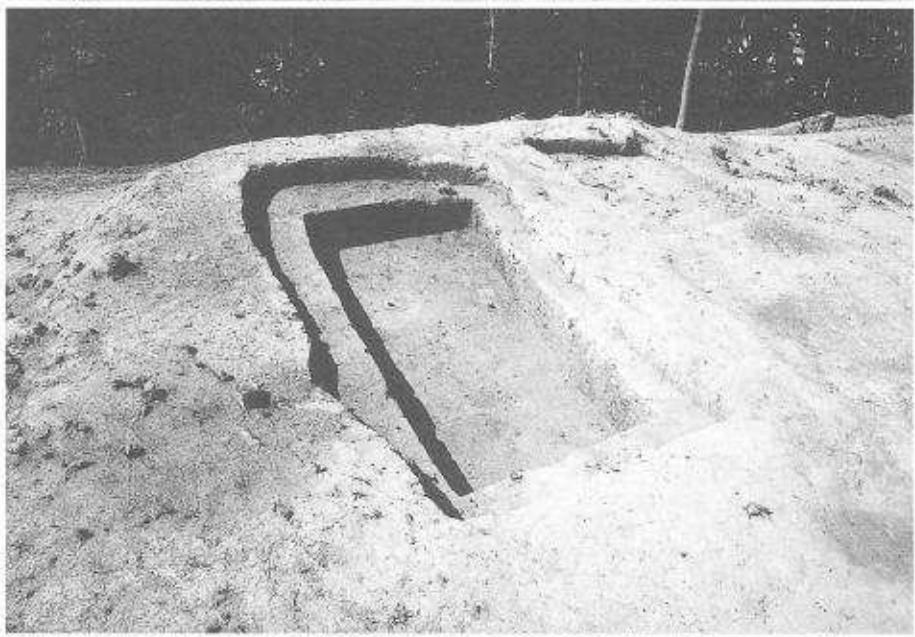


調査前全景
西山B 2号墳
(東から)





古墳全景
西山B1号墳
(東から)

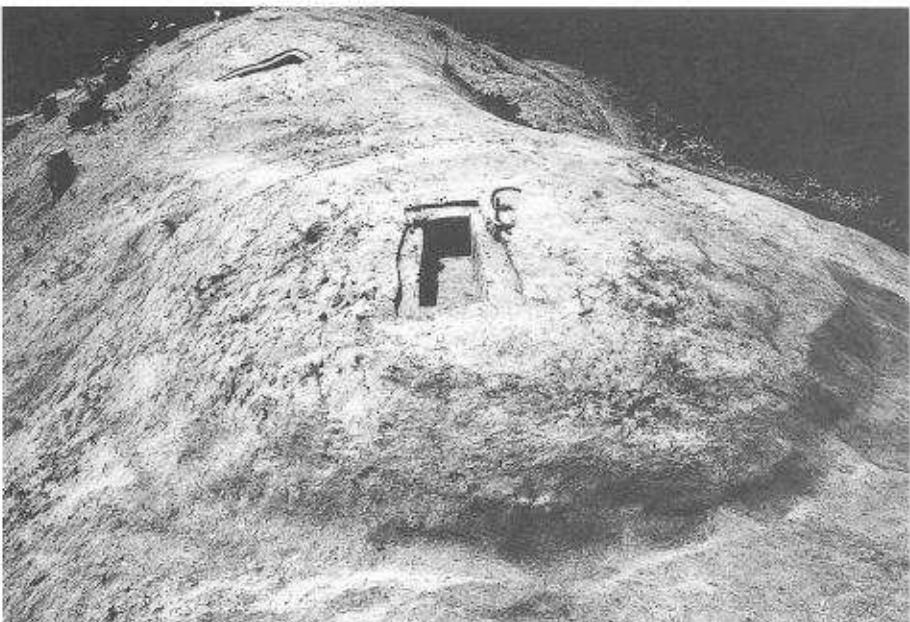


主体部
西山B1号墳
(北東から)

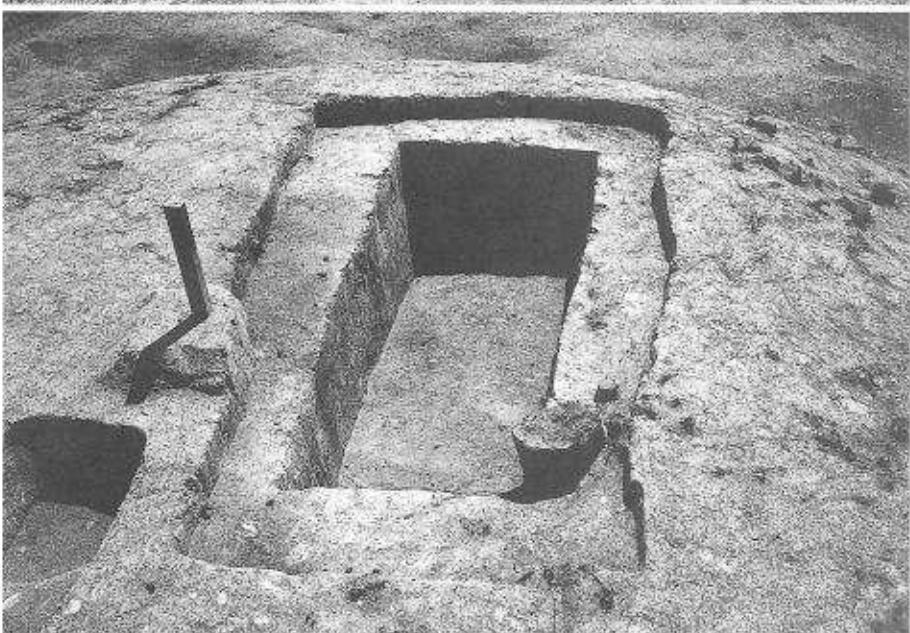


周溝
西山B1号墳
(北東から)

写真図版 6



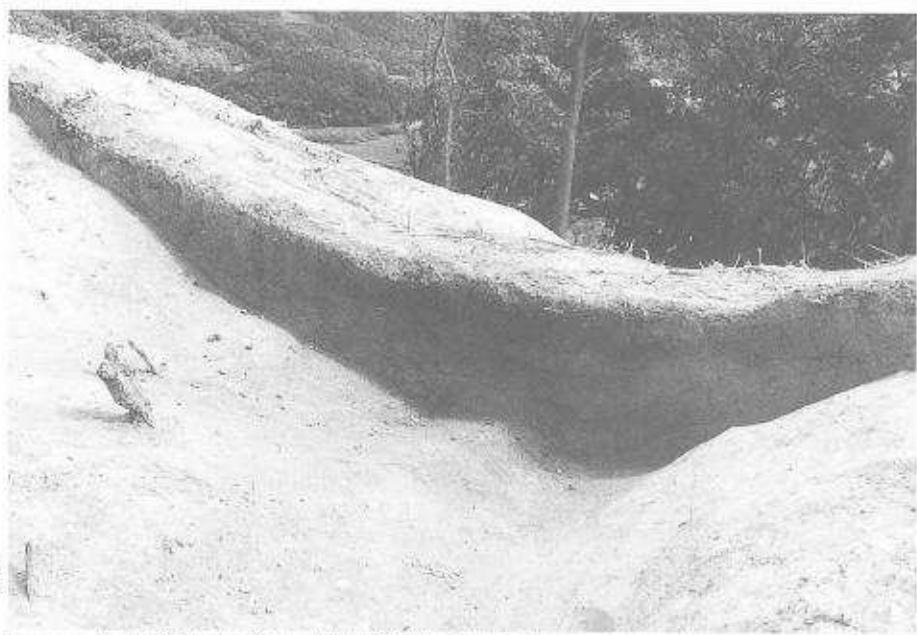
古墳全景
西山B 2号墳
(東から)



主体部
西山B 2号墳
(西から)



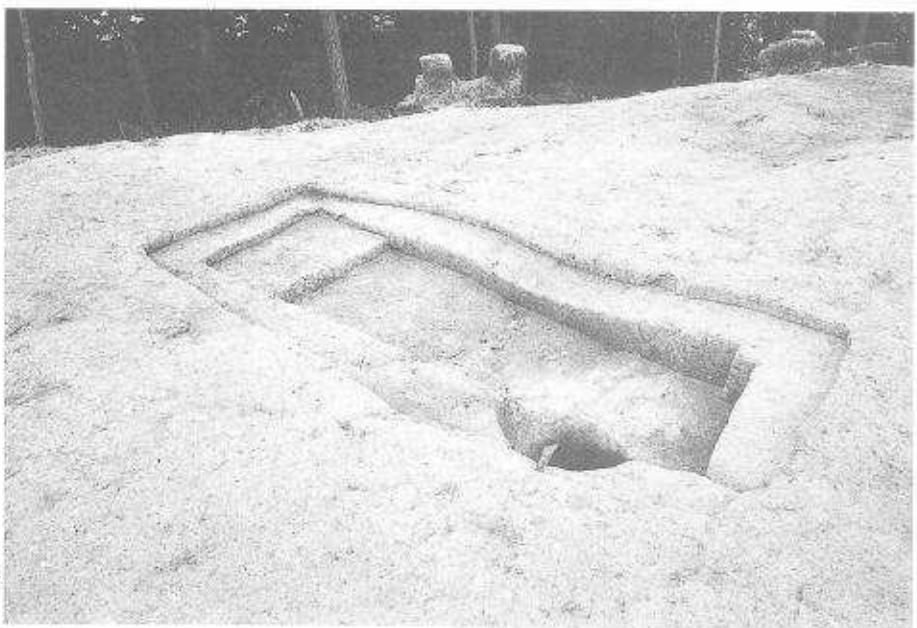
主体部内 勾玉
出土状況
西山B 2号墳
(東から)



周溝堆積状況
西山B 2号墳
(北から)



古墳全景
西山B 3号墳
(東から)



主体部
西山B 3号墳
(北東から)

写真図版 8

調査前遠景
西山B古墳群
(南から)



調査前全景
西山B古墳群
(東から)



調査前全景
西山B古墳群
(北から)





調査前全景
西山B 6号墳
(南から)



調査前全景
西山B 7号墳
(南から)



人力掘削作業
西山B古墳群
(北から)

写真図版10

調査後全景

西山B 5～11号墳
(北から)



調査後全景 (B 1号墳から南を望む)





古墳全景
西山B 4号墳
(西から)



主体部
西山B 4号墳
(南から)



墳丘内列石
西山B 4号墳
(南東から)

写真図版12



主体部礫床
西山B 4号墳
(南東から)



主体部排水溝
西山B 4号墳
(南から)



主体部検出作業
西山B 4号墳
(南から)



古墳全景
西山B 5号墳
(北から)



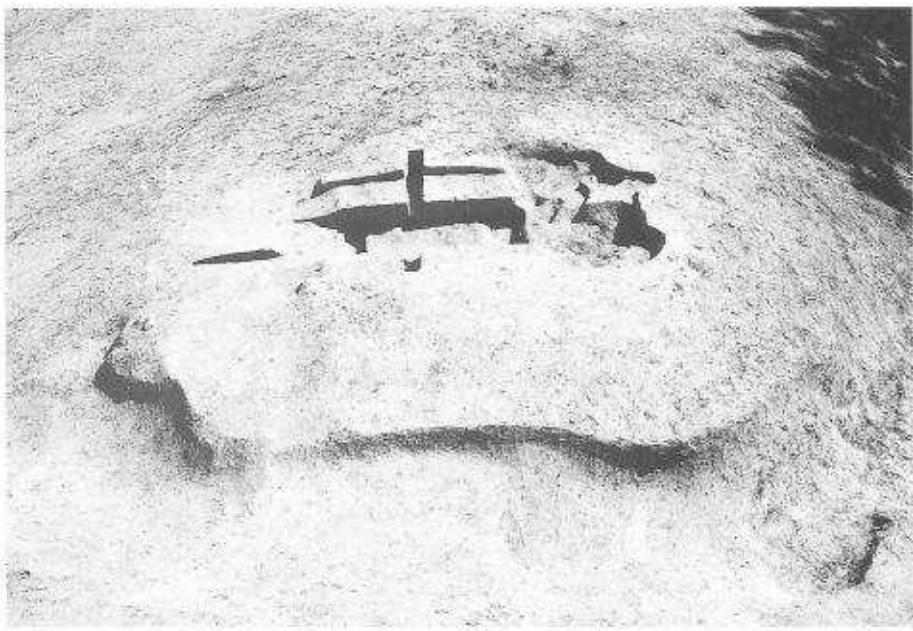
周溝 土器出土状況
西山B 5号墳
(西から)



出土土器アップ
西山B 5号墳
(西から)

写真図版14

古墳全景
西山B 6号墳
(北から)

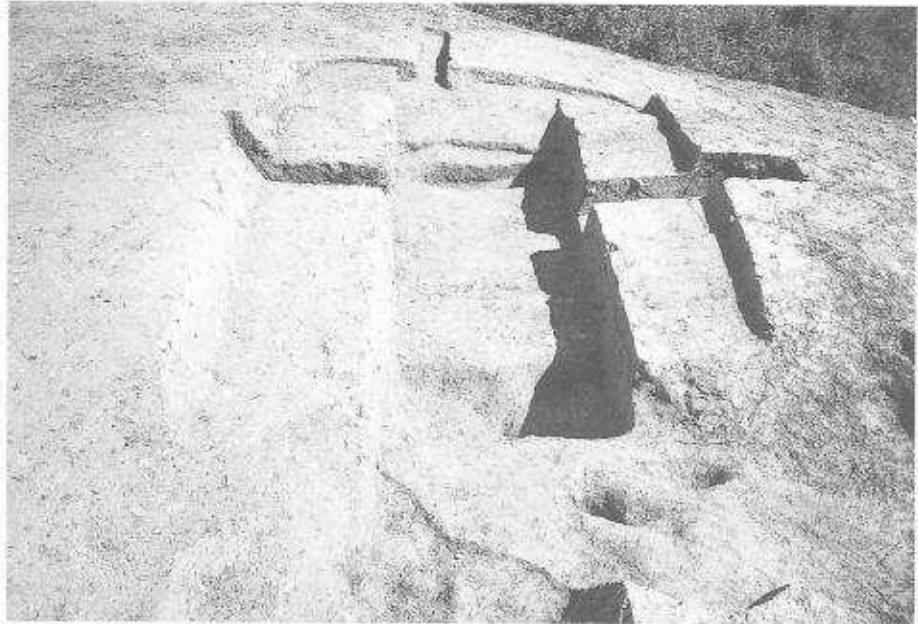


主体部
西山B 6号墳
(南東から)



墳丘検出作業
西山B 6号墳
(南から)





主体部
西山B 6号墳
(南東から)



土器検出作業
西山B 6号墳
(北西から)

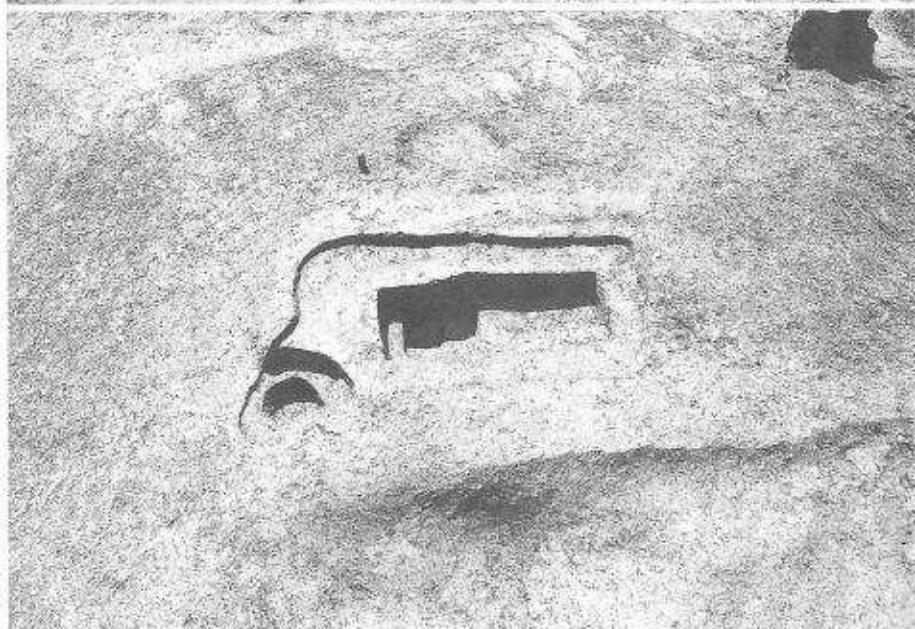


主体部 土器出土状況
西山B 6号墳
(西から)

写真図版16



古墳全景
西山B 7号墳
(北西から)



主体部
西山B 7号墳
(北から)



主体部アップ
西山B 7号墳
(西から)



古墳全景
西山B 8号墳
(北から)



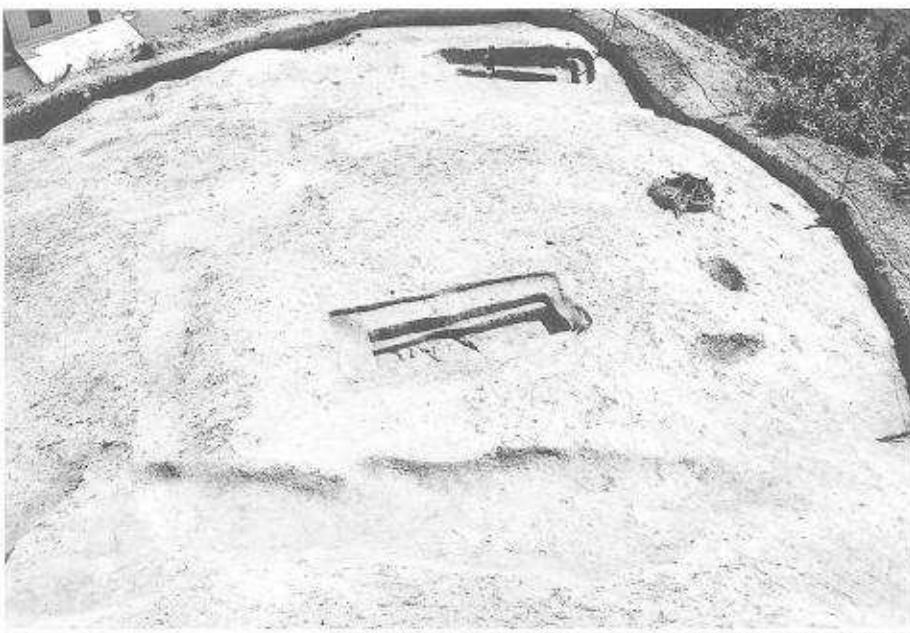
主体部
西山B 8号墳
(東から)



墳丘検出作業
西山B 8号墳
(北から)

写真図版18

古墳全景
西山B 9号墳
(北から)



主体部
西山B 9号墳
(西から)



周溝堆積状況
西山B 9号墳
(西から)





古墳全景
西山B10号墳
(北から)



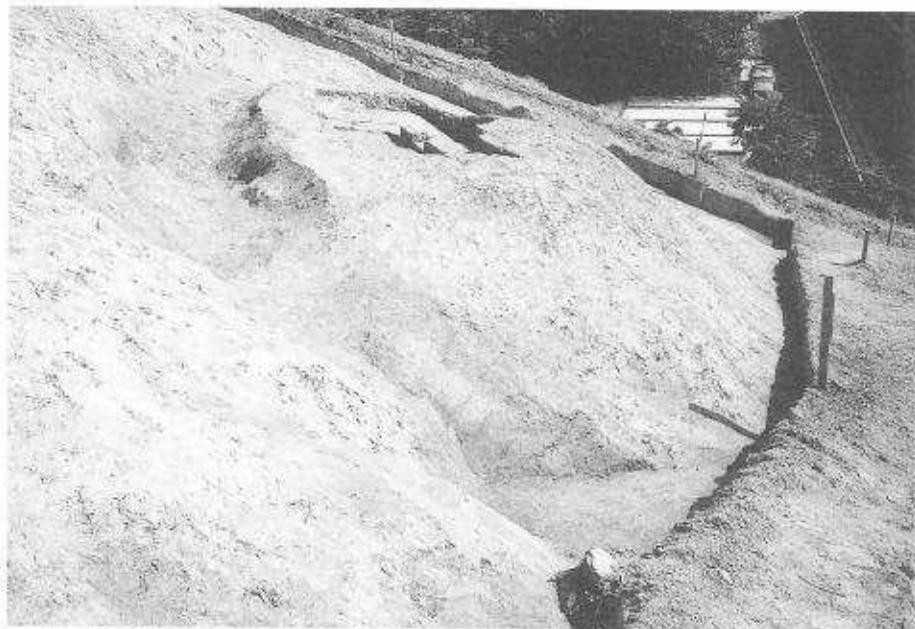
墳丘検出状況
西山B10号墳
(東から)



主体部
西山B10号墳
(西から)

写真図版20





古墳全景
西山B11号墳
(西から)

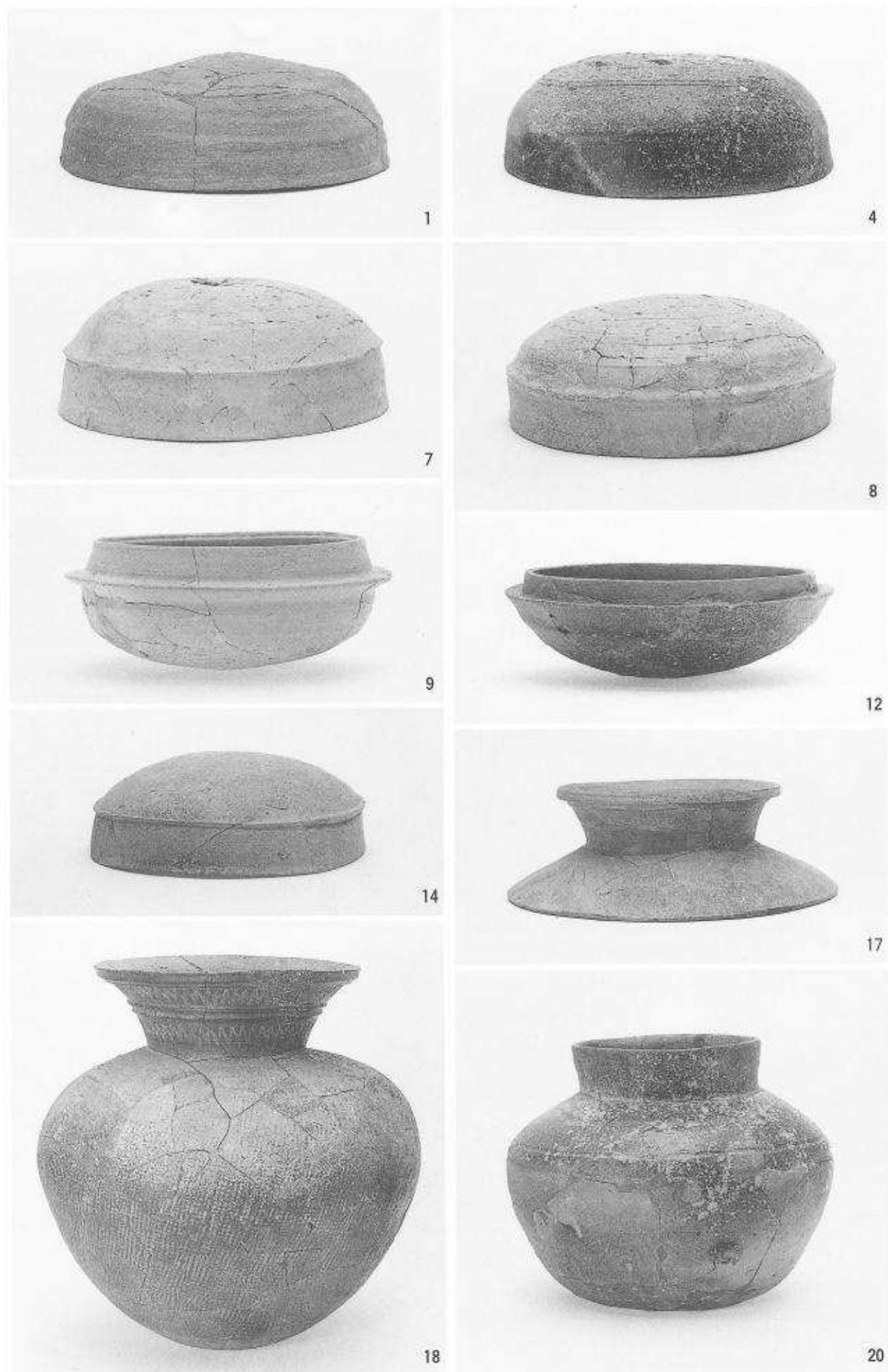


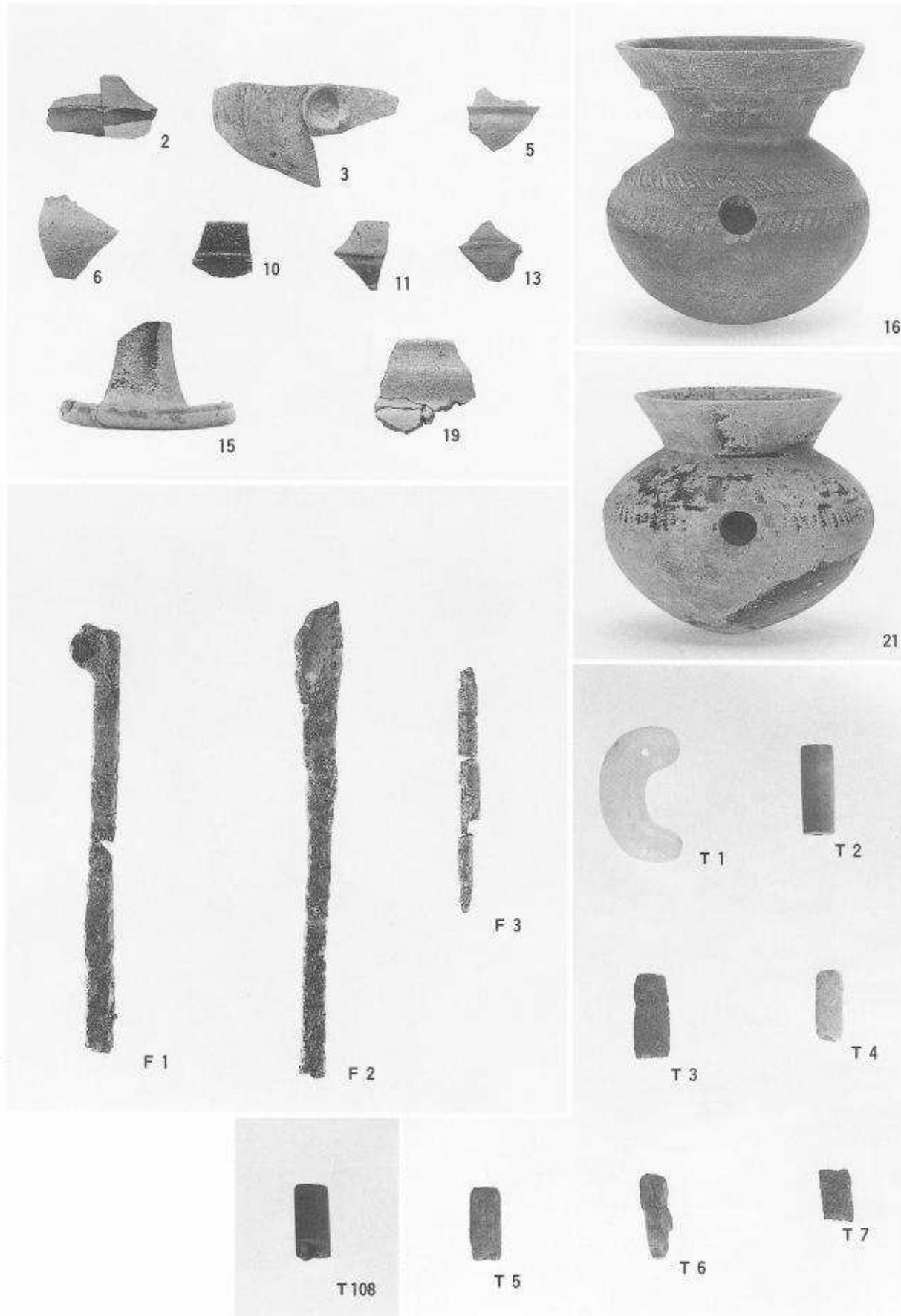
周溝
西山B11号墳
(東から)



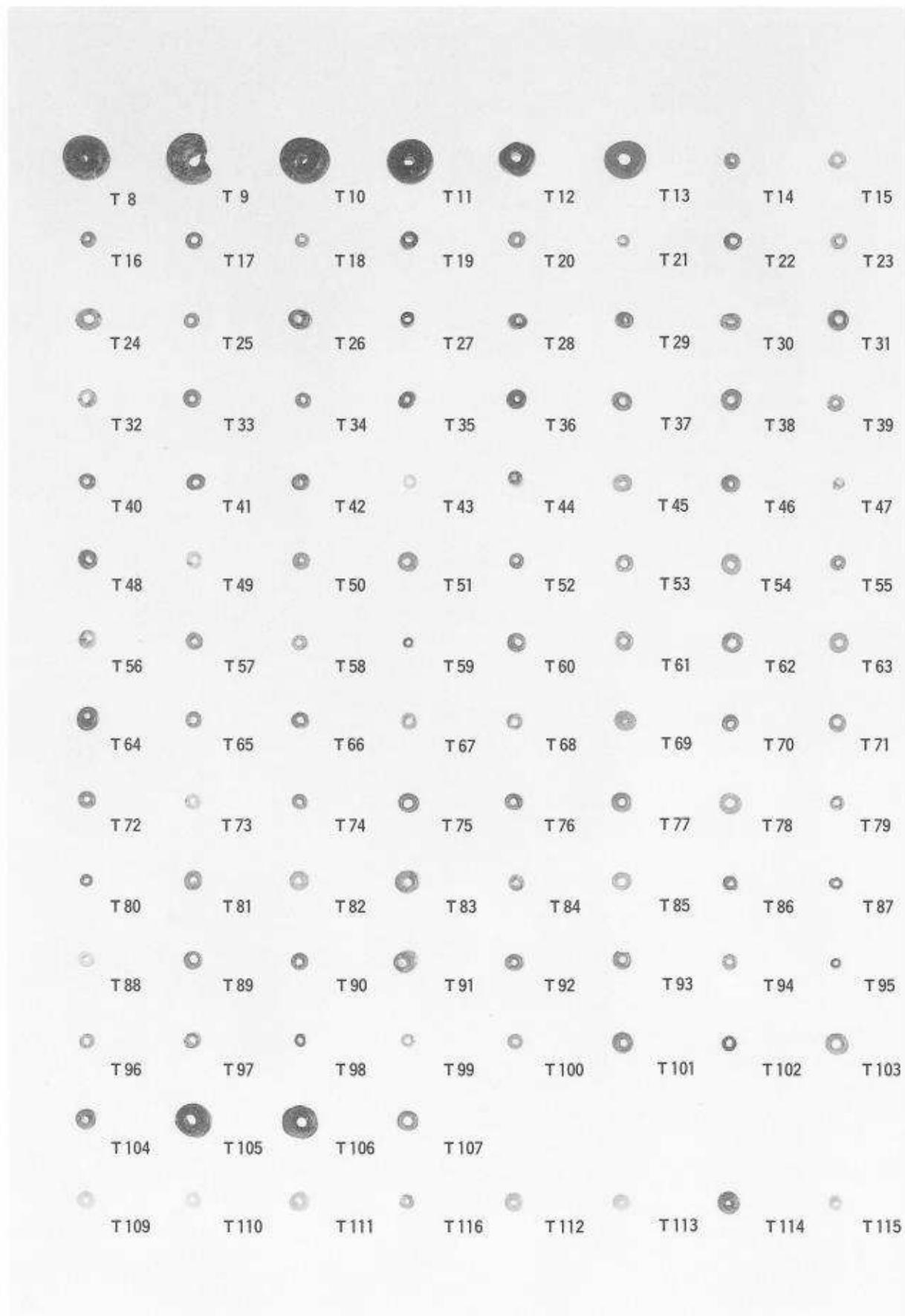
主体部
西山B11号墳
(東から)

写真図版22





写真図版24



報告書抄録

ふりがな	にしやまB・Cふんぐん							
書名	西山B・C古墳群							
副書名	ふるさと農道緊急整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第224冊							
編著者名	柏原 正民 田中 秀明 宮田 耕平							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL 078-531-7011							
発行年月日	西暦2002年(平成14)年3月30日							
所取 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市	町村					
西山B	兵庫県養父郡八鹿町浅間	28601	2000283	35度 26分 21秒	134度 47分 51秒	全面調査 2001.5.11～ 2001.11.15	3,480m ²	ふるさと農道緊急整備事業に事前調査
西山C								
所取遺跡名	種別	主な時代		主な以降		主な遺物	特記事項	
西山B	古墳	古墳時代後期		古墳 11基 (主体部:木棺直葬10・横穴式石室1)		土器(須恵器) 金属器(鉄鎌) 玉類(勾玉・管玉・ガラス小玉)		
西山C	古墳	古墳時代後期		古墳 1基 (主体部:不明)		土器(須恵器)	主体部は災害時の崩落で消失。	

兵庫県文化財調査報告 第224冊

養父郡八鹿町所在

西山B・C古墳群

—ふるさと農道緊急整備事業に伴う発掘調査報告書—

平成14年3月30日 発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印 刷 ウニスガ印刷株式会社

〒677-0053 兵庫県西脇市和布町39
